
深淵に抗する平和の紡ぎ手

トイボックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深淵に抗する平和の紡ぎ手

【Nコード】

N25940

【作者名】

トイボックス

【あらすじ】

預言に繋がれた世界。

“未曾有の大繁栄”の名の元、犠牲にされる者と犠牲を強いる者が織りなす世界。前者に救いはなく、後者はその先に救いがあると詠う。

死期を知り、絶望を知り、だからこそわかったことがある。僕は僕としてただ生きたい。その過程で誰かが笑えるならきつと意味あることだと信じて……

キャラクター設定（前書き）

ales of the Abyssの原作沿い長編パロディです。
主人公は導師イオン。被験者イオン様です。

「もしもオリジナルイオンが生きていたら」という話ですので、受け入れられない方はご遠慮下さい。

ギャグも入れつつ大筋はシリアスでお送りします。戦闘描写があり、流血表現などもあります。

基本的に原作沿いでいこうと思っておりますが、一部多大なオリジナル要素が入ります。というか既に前提が変わっております。そして都合主義などもあります
ネタバレを含みます。

小説内で、などの記号も使用していますが、台詞としてのニョアンスの意味で使用していません。
そこまで多用することはありませんし、無意味に使用しているわけではありませんが苦手な方はご遠慮下さい。

初投稿ですが自分に出来る精一杯でがんばりますので、よければお付き合い下さい。

キャラクター設定

キャラクターの設定

- - - - -

名前：フェル・フォーヘン

性別：男

年齢：14歳

身長：166cm

体重：58kg

武器：グローブ（大気中の音素の吸収効率を上げるための譜陣と一部の譜術を強化するための特殊な譜陣の二つが刻まれたシエリダシメ組作）

容姿：白髪に緑の瞳。以前は深い緑色の髪だったが、ある事件により白髪へと変化する。長さはうなじが見える程度。

服装：取り外し可能な黒のフード付きの白いジャケットでラインは薄緑。インナーは深緑色のただのTシャツで、黒のカーゴパンツを穿いている。グローブは全体が黒で指の部分はシルバー色をしている。

性格：責任感が強く、能力もあり、鋭い洞察力を持つ。それ故に他者を信用するが信頼はせず、出来る限り自分で物事を対処しようとする。あとボケもこなすがどちらかというとツツコミ属性。俗世間を一人で旅したせいか交渉術が導師のころよりも上達し、某眼鏡大佐に張り合うほど底を見せない。

身体能力：ダアト式譜術を使いこなし、体術だけならシンク以上。もともと体力はレプリカイオンよりはあるが、あくまで同世代より多少上というレベルのため持久力は並。通常の放出系譜術も上級まで使える。またグローブに取り付けられた譜陣によって譜術を強化することが出来、尋常でない威力を出すことも可能。ただし音素のチャージにかなりの時間を要し、連発もほとんど不可能。

戦闘方法：ダアト式譜術を用いた術技が主体で、通常の譜術は牽制程度。洞察力に優れ、弱点をすぐに見抜くことも出来、状況に対応した術技を用いる。

備考：偽名は古代イスパニア語で「希望の紡ぎ手」という意味。ここでは“導師イオン”というのは役職名だと解釈しているので、名前は本名としています。

プロローグ 預言の名のもとに

ND2015、導師イオンの死亡 ……

「…イオン様、最近元気ないです。アリエッタに…何か出来ることありますか？」

傍に控えている少女が遠慮がちに声を掛けてきた。

驚きました。引き取った当初は目も合わせず、口も利かず、ただおどおどしているだけだったというのに。自分では普段どおりに自室で仕事をしていたつもりだったのですが、アリエッタには無理をしているのがばれてたようですね。

「そうですね。少し疲れしました。何か飲み物を取ってきてくれますか？」

「はいっ！」

パタパタと足音を立てながら走っていく彼女を見て少し苦笑し、ふっと軽くため息をついた。

「すみません、アリエッタ…。僕には時間が残ってないんです…」

秘預言に示された僕の死期まであとわずか。改革派のみんなに後を託せるように今は出来る限りの事をしなくてはと、この所ろくに睡眠もとらず仕事に明け暮れていましたからね。

パタパタパタパタ……

あれ？アリエッタはずいぶん早く戻ってきたみたいですね。何かあったのでしょうか？

「イオン様…モース様がお部屋に来て欲しい…そうです」

「分かりました。アリエッタ、すみませんが僕の机の上の書類をフイルして置いてください」

教団の機密に関わることが満載ですが、アリエッタにはさすがにまだ理解できないから大丈夫でしょう。さて、モースの用件という…教団の運営についてでしょうね…。

気が向かないが、無視するわけにはいかず僕はモースの部屋へと向かった。

コンコン

「僕ですが」

ノックをしつつモースの部屋に入る。

「ああ、これはイオン様。わざわざお呼び立てして申し訳ありません。ささ、お座りください」

来客用のソファアームに座っていたモースが席から立ち、テーブルを挟んで対面のソファアームを勧めてくる。テーブルには紅茶が用意されており、良い香りがする。モースの表情は笑顔だが、八歳から導師職にあり大人の世界で生きてきた僕は作り笑顔なことくらい理解して

いる。

もっとも、僕も同じような笑顔を浮かべているでしょうけど。

「…それで、話とは教団の運営についてですね」

席に着きながらモースに問うた。

「ええ。単刀直入に聞きます。本気ですか？」

笑顔を収め、声を低くして聞いてくる。その程度で威圧しているつもりだろうか？

「当然です。それに詠師会で決定されたはずですが？」

詠師会とは大詠師を含めた7人の詠師が集まり、教団のあり方を話し合う会のことだ。導師である僕は教団の象徴に過ぎず、参加は出来るが決定権も無くただ見ているだけにすぎなかった。

前回までは。

先の詠師会で賛成多数で決定された内容は、モースにとってとても納得できないものだった。モースはともかくとしてヴァンまで反対票を投じたのは僕も予想外でしたが…。

「神託の騎士団の30パーセント縮小、その分の予算で救護院の建設までは吞みましよう」

モースの音量が徐々に高まってくる。よほど腹に据えかねているのだろう。

「しかし、望むものに対して個人の秘預言の告知……」

個人の秘預言とはその人の死についてである。誰しもが恐れる死についての預言、それは今までは頑なに隠されてきたものの一つ。

「さらに、全人類に対してユリアの預言の開示とはどういうつもりですか！？あなたは我々本来の役目を放棄するおつもりか！！」

ユリアの秘預言とは始祖ユリアがこの世界、オールドランドの未来を詠んだものであり、モース率いる保守派はユリアの預言を守ることは“未曾有の大繁栄”に繋がることであると固く信じているのだ。「詠師会でも言いましたが、まず個人の秘預言については死期を知ることに残りの人生を有意義に使える人もいるだろうと考えたからです」

…僕のようにと心の中で続ける。

「そして、ユリアの預言を守ることは確かに重要ですが、僕はホド戦争のように多くの犠牲を看過できません」

そう、たとえ“未曾有の大繁栄”が約束されようとも、その過程で失われた犠牲にとっては関係ない。その上「ユリアの預言を守る」ことにしか目を向けない保守派やキムラスカ、マルクト両国の政治家達は罪悪感さえ麻痺しており、犠牲にされた人を悼むことすらしない。

『来るべき“未曾有の大繁栄”のために死ぬ』と、自分がそれを言われても納得するのか。近しい人がそのせいで死んでも繁栄のためと思えるのか。そんなことさえ彼らは考えていない。

「このことはすでに決定事項です。さらにユリアシテイの許可、マルクトの批准まであるのです。いまさら変更はありません」

僕が導師の位を継承したのは8歳の時。その後すぐに自分の秘預言を詠み自分の死期とその後しばらく次の導師が誕生しない空位の時代を知った時はかなり落ち込んだ。それでも死期を知ることが出来た僕は幸運だと思う。

死期が分かったから、それまで精一杯生きようと考えるきっかけになっただ。

そして僕は、人々に希望を、可能性を与えよう。それが導師としての僕の責務、僕が生きた証。

改革派の打ち立て、各方面の政治家及びその周辺人物のリストアップ、そしてそこから説得が可能そうな人物の策定、説得が無理な場合の備えをした上での交渉を秘密裏に行い、表では保守派の手腕により改革が暗礁に乗り上げているふうを装った。

結果、モース以外の詠師の説得、ユリアシテイのテオドーロ市長以外の政治家の許可、マルクト皇帝ピオニー9世陛下との批准まで漕ぎ着けた。

足掛け3年半。ここまで本当に長かった…。

「いかに大詠師といえど決定には従ってもらいます」

モースは顔を歪め、大きなため息をついた。

「まさか導師イオンがここまでの政治手腕をお持ちとは。確かに現状私に打てる手はありませんな…」

モースとて分かっているのだろう。今日ここに呼び出してもは嫌がらせ程度の意味しか持たないことを。

そんなモースを見つつ、紅茶に口をつけた。優しい香りがする。

「っ!!」

慌てて紅茶を吐き出しつつ、ソファーから飛び退き扉へと向う。大丈夫、まだ十分動ける!

けれど、ドアノブに手をかけた瞬間、ドアの裏から殺気を感じ、

「光龍槍!」

衝撃でドアが吹っ飛んでくる半瞬前に何とかサイドステップで回避。そのままの勢いで部屋の壁を基点にすぐさま反転し、出来る限り姿勢を低くしつつ碎けたドアから外へ向かう。

何故彼が!?!という驚愕はしているが今は考えている余裕はない。彼の武器は剣。こっちは体術。クロスレンジに入り一撃を見舞い、そのまま脱出する!

まだ剣を突き出したまま硬直している彼を下から臥龍空破で突き上げる。いかに彼といえど回避は不能。

「レイジレーザー！」

しまった！と思った時にはすでに遅く、彼　ヴァンの隣に立った金髪の女性、リグレットの譜銃から光が溢れた。

ヴァン以外の人間がドアの外で待ち構えている可能性を完全に失念していた。それでも身を振りつつ、光が当たると思われる箇所に譜術を込めガードする。しかし、

「くっ！」

衝撃までは殺せず壁に叩きつけられ、

「烈波掌」

腹に衝撃を感じ、僕は意識を失った。

side　ヴァン

「仕留めたのか？　ヴァン！」

モースがやや無然とした表情を浮かべ破壊されたドアから廊下に出ながら聞いてくる。自室のドアを派手に破壊されたのが気に食わないのだろう。

導師に比べると所詮小物だな…。

モースの問いを無視しつつ、イオンの様子をつかがう。後ろのリグ

レットも未だに銃口を向けたままだ。

「閣下…？」

その声は多少上擦っていた。導師の実力はあくまで噂レベルに過ぎず、どれも常軌を逸していたことから信じていなかったのだろう。私でさえ初見では土を付けられたのだから、あるいは仕方ないのかもしれんな。

苦笑しながらも油断無く導師の様子を見るが、動きはない。完全に気を失ったのだろう。

「問題ありません。完全に気を失ったようです」

「そうか！予定通りだな！ふん、小僧が私に逆らうからだ。暗殺という手段を思いつかなかったとは所詮子供ということか」

満足そうに笑うモースを横目に、私はよく言っていると心の中で毒づいた。

当初モース本人が立てた計画は毒入りの紅茶を飲ませるという暗殺というには単純すぎる上、死体の処理など全く考えられていないものだった。それを私の方から念には念を入れたものに変更した。

一段目は痺れ薬を入れた紅茶を飲ませること。上手く行けばそのまま仕留めればよく、上手く行かずとも多少でも口をつければ導師の動きを鈍らせることが出来ると踏んだ。

二段目は脱出を図るであろう導師を死角から攻撃すること。そして仕留められなかった場合、導師からの反撃に備え気配を殺したりグレットを配置したのが三段目。

「ヴァン、導師の処分は任せるぞ。私は情報操作に入る」

それだけ言い、モースは廊下の向こうに消えた。

「我々も行くぞ、リグレット。一応、導師の手足は縛っておけ。その上でお前は導師が目覚めないか監視しておけ」

過剰ともいえる警戒だが、この段階で躓くわけにはいかない。

「はっ」

リグレットが導師の手足を縛ったのを確認すると、ヴァンは導師の体を担ぎ上げ、廊下を歩く。行き先はザレッホ火山に続く教団の隠し通路。その火口から導師を捨てる予定だ。

その時、教団中に警報が鳴り響いた。これも予定通り。

モースが自室で導師と会談中に反改革派の賊が侵入。導師を襲い、逃亡したとオラクル騎士団に報告し、導師は今頃気を失い手当てを受けているはずだ。

もっとも手当てを受けているのはレプリカだが……。

この一件で導師のレプリカをオリジナルと入れ替え、両者の差異は「事件のシヨックで部分的に記憶を失った」ことにする。オリジナルをよく知るアリエッタを含めた導師守護役は警備不行き届きで解任というシナリオだ。

正直惜しすぎる人物だが、やはり優秀すぎて使いにくいか…。

過去の過ちを越え、預言という壁にぶつかってもそこから別の道を

見つけた導師イオンは決して自分の計画を認めないだろう。そう最終的な決定を下している間に火口の上に到着した。

「さらばだ、導師イオン。あなたがもつと早く、そしてもつと長く導師として在れたならば、おそらく私も従っただろう。許せとは言わん。せめてあの世から預言を越えた人類を見守ってくれ」

私は地獄行きだろうから……と心の中で加えつつ導師の体を火口に投げ入れた。

side フェル

「…せめ…預言……見守って…」

何か聞こえたが、聞き取ることが出来なかった。そして、一瞬の浮遊感の後、自分の体が落下する圧力と熱気を感じ、意識がはつきりする。

しかし、手足は縛られ、眼下は溶岩。これでは…！

「くっ！」

それでもフォンスロットに異常がないならまだ手はある！かなり危険だが迷っている暇はない。

腹腔にありつたけの譜力を体と時間の限界まで込め、口から一気に放出。衝撃波に変化する。反作用で体を上に向けつつ、残りの譜力を両足に均等に込め、岩壁を両足を揃えたまま蹴り上げた。

最後の一步で岩壁が崩れバランスを崩したが、強引に空中で体制を変え、前宙気味に外へ体を放り出す。

「かはっ！」

さすがに受身を取る余裕は無く、背中からもろに落ちたため、息が詰まったがとりあえず生き残ったようだ。そのまま乱れた呼吸が整うのを待つ。

モースのこと、ヴァンのこと、教団のこと…考えなければならぬことは多いが、今はそんな気力はない…

「はあ、はあ、…ここまでやりますか…！」

全身のフォンスロットは悲鳴を上げ、無茶というより常軌を逸したな使い方をしたため頭が割れそうなくらい痛む。気力、体力共に尽きかけたままこんなところに居れば絶命は必至だろう。とにかく外に繋がる移動用の譜陣を目指す。外がどうなっているかは分からず、たどり着けるかも正直微妙なところだが…。

こんなところで死ぬわけにはいかないんだ…！

そして譜陣に触れた瞬間、再び僕は意識を失った。

生きているようですな。

身を起こし周りを見渡すときちゃんと整理された部屋の中でベットに横たえられていたようだ。

どうやら、どこかの私室で匿われているようですな。さて…、

フォンスロット：大丈夫、手足：きつく縛られた影響が少し痛むがそれだけ、

あと眠気とたるさが多少残っている程度か。

「目を覚まされたのですね！？導師イオン！」

体の状態を把握していると部屋の扉が開き、よく知った顔　詠師
トリトハイムが駆け寄ってきた。彼は保守派だが最初に自分に協力
してくれた人で信頼できる。

「ええ、一応は」

「譜陣から導師イオンがぼろぼろで表れた時はどうしようかと思
いました。あと独断で私の部屋に運びましたので、誰にも気づかれ
ないと思います」

「そうですか」

ただそれだけ言う。

「…一つだけ私からも失礼を承知で聞きたいのですが、あなたは
あの導師イオン”ですよね？」

何故そんなことを聞くのだろう…。僕を助けたのはトリトハイ
ム自身だというのに。

「ええ。間違いなく僕は導師イオンですよ…」

「…分かりました。あと、いくつかお伝えしなくてはならないこと
があります」

神妙な顔をしながらトリトハイムはここ数日で起きたことを話した。まず、僕は丸3日も意識を失っていたらしい。そしてその間に“導師イオン”がモースの部屋で襲われ、今日復帰したこと。この件で“導師イオン”は改革の一時断念を決定したこと、それに伴い保守派が立て直されたこと。

さらに僕自身の容姿が変わってしまったこと……。肩を超える程度の長さがあった髪は半分ほど短くなり、今はうなじが見える程度のショートになっていた。色も前は深い緑色だったが白く変化している。おそらく火口から脱出するために無茶な使い方をしたせいで体内のフォニムに影響が出たせいだろう。

「……これからどうされますか？正直私の想像を超えたところで事態は動いているようです。それに多くの者は……」

「……もう一人のイオンを“導師イオン”だと思っでしょうね」「言い淀んだトリトハイムの言葉を自嘲気味に引き継ぐ。今更どうすることも出来ないだろうが、一つだけ気になることがあった。

「その“導師イオン”を一目見ておきたいです」

トリトハイムはただ「用事が終わったらもう一度戻ってきてください」とだけ言い、反対しなかった。

部屋の外から中の気配を窺うと一人分の気配 “導師イオン”だ

ろう。音を立てないように注意しつつ、扉をわずかに開け、中に滑り込む。

そのまま机で書類整理をしていた者 『導師イオン』に飛び掛り、口に手をかざし声を封じる。

「危害をくわえる気はありません。大声を出さないでください」

まあ、すでに手荒なことをしている気もしますが…。

彼は目を見開いて驚いた顔をしていたが、ゆっくり頷いたのを確認し手を退ける。

「…良かった。ご無事だったんですね！」

無事？ヴァンやモースの手の元だとしたら可笑しな台詞だ。表情から本当に僕のことを案じていたようだが……

「…ええ、とりあえず生きてはいます。僕のこととはどのように聞いていますか？」

少しでも情報を集める為、質問する。

「…モースからあなたは亡くなったとだけ。ですから僕が“導師イオン”として振舞えと……」

「ヴァンは何か言っていましたか？」

「いえ、まだ直接話してませんので」

とりあえず僕は死んだことになっているようだ。それにヴァンが彼とまだ会っていないということはそれほど“導師イオン”を重視していないのか。

「他に命令されていることはありませんか？」

「いえ、必要になればその時指示を出すから“導師イオン”をやつてろとだけ…けれどあなたがご無事だったならすぐ戻ってくださいれば」

僕は首を横に振り、事情を説明する。少なくとも彼に敵意はなさそうだし、どっちにしろダウトにいられないから同じことだ。

それにしてもヴァンだけでなくモースにとっても“導師イオン”については終わったことなのでしょう…。

その後、彼は自分が僕のレプリカであることを告白してきたが、僕は聞いていなかった。

僕が今までやってきたことってなんだったんでしょう…。

これでも犯した過ちを償うために全力でやってきた。

周りの大人は“導師”という地位に敬意を払うだけで、その実“僕”自身を所詮子供だと蔑み、化け物だと恐れた。

周りとは打ち解けず、誰も僕の言葉に耳を貸そうとしなかった。

一人になると自責の念と後悔で押し潰され、心が悲鳴を上げていた。そして残り時間は少なく、希望を託す相手は現れないことを知り絶望した……。

その中で自分が見つけた、いや縋った希望は“希望を創ること”
自分の時間が残っていないならば、誰かの時間を有意義に使えるように。自分の希望が見えないならば、他の誰かが希望を見つけれようにと。

そのために“導師”として世界を変えようとしたのに……。

“導師イオン”には既に役割は無く、モースやヴァンの手のものに見つかれば殺され、“死”。

仮に見つからなくてもいざれ秘預言によって殺され、“死”。

選択肢は2つしかなく、結果は同じ……。

僕は、何も出来ずに終わるのでしょうか……。

「あの、僕からも一つ聞かせてください！どうすればあなたのようになれますか！」

鬱々と自分の内に沈み込んでいると、彼が堰を切って質問してきた。絶望しかなかった僕に怒りが沸々と湧き上がってくる。

「僕はレプリカで何もありません……。けれど“導師イオン”として生まれた以上、あなたのように新しい道を切り開いていきたいんです。そして、あなたのようにこの世界に必要な導師になりたいんです！」

真っ直ぐな瞳を僕に向けながら彼は聞いた。僕が、この世界に必要な……？

「あなたの力は世界を動かせるところまでいきました。僕はそれを継ぎ、あなたの夢見た世界を創りたい。そこはきっと今より綺麗な世界だと思うから……！」

ああ、なんて純真な瞳なんだろう……しかし、

「…僕を偶像視し過ぎです。それにその願いはあなたを生み出した
モーサヤヴァンへの反逆ですよ?」

「そんなことないです!僕が復帰してから多くの信者、オラクルの
方から心配の言葉を頂きました。おかげで“導師イオン”がどれだ
け尊敬されていたのか実感できたのです。それにモーサヤヴァンに
対する反逆行為なのは分かっています。けれど……」

彼はそこで言葉を区切り、「誰かが笑えるように全力を尽くす。そ
れが“導師イオン”でしょう?」と続けた。

彼の言葉と共にトリトハイムの「あなたは“あの導師イオン”です
よね?」という問いが思い出された。

何だ、モーサヤヴァンがどうこうより僕自身が“導師イオン”
であることを放棄していたんですね……。

「だから……」

「ありがとうございます」

彼、いや導師イオンの言葉を遮って礼を言う。

「あなたのおかげで少し目が覚めました。あなたなら大丈夫。僕よ
り“導師イオン”でいられますよ」

「えっ?どういう意味ですか?」

導師イオンには僕的心情が分からず、きよとんとしていた。

「なら一つだけ。あなたはあなたの道をあなたが思うままに進んでください、導師イオン」

それだけ言い、部屋の外へと向かう。

「……分かりました。あと、一つだけ。……また逢えますか？」

「さあ？明日のことは分かりません」

くすりと微笑を溢す。そう、結局その時になつてみなくては何も分からない。

「けれど、逢えると良いですね」

「はい！」

不安はあるが心は決まった。僕も僕であり続けよう。

あの後、トリトハイムの部屋に戻ると彼は「おかえりなさい。“導師イオン”」と笑ってくれた。そして僕用の服と幾ばくかの路銀、『全力で』の意味を持つフォルアルカのC・コアなどを渡し、

「お気をつけて。もし私に出来ることがありましたらいつでも連絡ください」

彼はそう言つてもう一度笑ってくれた。

導師イオンのことを頼もうかと思いましたが、彼なら大丈夫。自分で信頼できる人を見つければいいと思えば何も言わなかった。

こうして僕はダアトを出た。
旅立ちの空はただ青く、そして世界はどこまでも広がった。

第一話 夜の溪谷（前書き）

プロローグだけでは寂しいので一話を投稿。
空白期をすっ飛ばしていきなり原作開始です。

第一話 夜の溪谷

天空では星々が瞬き、草木は風で鳴き、小川で水が流れる音が届く。

ここはタタル溪谷だと乗ってきた辻馬車の御者が教えてくれた。ついでに水を汲みに行くというので僕は散歩がてら付いていくことにする。

夜風を感じながら大きく伸びをしていると、夜空を切り裂くように光が落ちていった。

「な、なんだ！？今のは！！」

御者が泡を食ったように驚く。

「どうやら、近くに落ちたようですね。少し様子を見てきますから辻馬車で待っていてください」

「待てよ、坊主。どんな危険があるかも分からねえんだぞ？水も組み終わったしさっさと離れたいんだが？」

御者が言うこともつともだ。

とはいえ僕は気になることは自分の目で確かめたい性分。このままスルーしては気になって眠れなくなる。

「ちょっと見てくるだけですよ。危険そうならすぐ戻りますし、10分待って戻ってこなかった場合は気にせず行ってください」

「…分かった。気をつけてな？」

御者の心配の声に右手をひらひらと振って答え、溪谷の奥に分け入る。

少し進むと開けた場所に出、そこでは見知った二人の男女が魔物に囲まれ応戦していた。

「何であの2人がこんなところにいるんでしょう？」

一人はダアト、もう一人はバチカル出身。こんな場所にいるのは不自然すぎる。

「そういえばあの2人は第七音素を持ってましたね。ということはさっきの光は超振動による転移？理論上不可能ではないそうですが、実際できるものなんですね」

「いまいち信じられないが、他に理由も思いつかないので、とりあえず納得しておく。」

そうこうしているうちに気づくと2人は徐々に劣勢に立たされていた。

鶯色の髪に神託の騎士団の軍服を着た女性　ティアはともかく、おそらく初めて魔物と戦っているであろう、朱色の髪に翡翠色の瞳の男性　ルークの動きが悪い。

放っておくとやられそうだと思い、やれやれと苦笑する。

そして右手を振り上げ「魔神拳」と拳圧を放った。

side ルーク

(…これが魔物っ!?)

変な草みたいなやつに叩かれた左手が痺れる。最悪だ、どうして俺がこんな目に遭わなきゃなんねんだよ!!それもこれもあのティアとかいう女のせいだ!!

「ルーク!? 後ろ!!」

余計なことを考えたせいだろう。反応が遅れた。ティアの声で慌てて振り向いたがイノシシみたいな魔物がこっちに向かって突進してきたところだった。

(かわせねえ……!?)

衝撃に備えて体を硬くし、目を瞑る。

「…ルーク、戦闘の真っ最中に目を閉じてどうするんですか?」
「えっ?」

突然掛けられた声に驚いて目を開くと、魔物は衝撃波で弾き飛ばされていた。

白髪に深い緑の目。初めて会った頃と変わらない、穏やかな、それでいて楽しそうな表情のフェルがいた。

「魔神拳、魔神拳、魔神拳……」

そしてやたらに楽しそうな声と共に、俺らの周りにいた魔物が次々に衝撃波で倒されていく。

「魔神拳、魔神拳……ふう、飽きたのと面倒なので残りは大技で決めます。2人とも避けて下さいね？」

アピアース・フレイム」

「ちよっ！」

止めようとしたが、あいつの足元にオレンジ色の妙な譜陣が引かれた。そして次の瞬間、手のひらに馬鹿でかい炎の玉が生まれ、

「逝け！シアリング・ソロウ」

落ちてきた！？どうしろって言うんだよおおおお！！

side フェル

魔物の一掃完了。ルークは巻き込まれたようで吹き飛ばされ、気を失っているがとりあえず生きてはいるようだ。

「こんばんは、ティア。良い夜ですね」

「もう！これだけやっておいて他に言うことないの？」

ティアは少し怒りながら服についた土埃を払う。

「ルークを見捨てて、ちゃっかり退避していた人に言われたくありませんね」

くすりと笑ってそう言えば、仕方ないわねとティアは苦笑を洩らした。

「彼とは少し距離があったし、フェルのことだから手加減はしていると思ったのよ」

お互いに顔を見合わせ、同時に笑った。

「まったく…、フェルは相変わらず破天荒な人ね。それよりこんなところで何をしているの？」

「少し気になることがあって、辻馬車で移動中です。そこにあなた達と思われる光が降ってきたので様子を見に」

言いながら気を失ったルークの頬を軽く叩き、ついでに第七音素を流し、気付け代わりにする。

「そう。その辻馬車は首都まで行く？」

「ええ。終点は首都ですよ。もつとも僕は途中で降りますが」

「なら案内を頼んでもいいかしら？」

「もちろん。少しの間ですがよろしく」

そう言って僕は立ち上がり、ティアと握手を交わした。

その後、ルークはすぐに目を覚ました。起きるとごちゃごちゃ文句を言ってきたので、もう一度、寝る？と優しく聞くと静かにしてくれた。会話による解決は良いものですね

「ところでフェルはルークと知り合いだったの？」

3人で溪谷を下っているとティアが訊いてきた。

「ええ。バチカルに行った時に屋敷から脱走したはいいものの迷子に……」

「だあぁっ！それよりティアこそ、こいつと知り合いだったのか？」
言葉を続けようとしたらルークに遮られた。まあ、おおよそ状況は伝わったでしょうが。

あの時はバチカルに調べ物に行ったはずなのに、まさかこんなに大きな迷子を拾うだなんて思いもしませんでしたよ。

「まあね。さっきみたいに一度助けてもらったことがあるの」

ティアはルークの質問に答えつつ、少し恨みがましい目で僕を見た。

ティアと出会ったのはダート周辺の森だった。そこでオラクルの任務帰りで疲弊していた彼女を魔物から助けたのだ。

そういえばあの時もシアリング・ソロウを放ちましたね。なるほど、退避出来るわけだ。

そうこうしているうちに溪谷を下りきり、辻馬車の前に到着した。

「お客さん！無事だったんだね！そちらの人達は？」

「ご心配おかけしました。彼らは僕の友人でどうやら道に迷ったらしいんです。首都まで乗せてあげて欲しいんですけど」

お願いしますとティアも続けた。

「かまわないよ。首都までだと…1人1万ガルド、2人で2万ガルドになるよ?」

「高い……」

後ろで首都に着いたら父上がまとめて払うとか世間知らずっぷりを発揮しているルークは無視しよう。ツッコんでも楽しくない。

「……代わりにこれを」

辛そうな顔をしながらティアはペンダントを御者に渡そうとする。確かあれは……?」

「いえ、僕が手持ちで払いますよ」

「そんな、迷惑は……」

何か言おうとするティアを片手で制する。

「ただし、3人で乗るんですから多少まけてくれますよね?」

御者は驚いた表情を見せたが、僕の意図を理解したのだろう、笑い出した。

「ははは!お客さんには負けたよ。特別に3割引で手を打とう!さあ、出発するから乗りな!」

そついうと御者は運転席に乗り込み、ルークも疲れたーとさつさと馬車に乗り込んでいった。

「やれやれ、自由な人ですね。ルークは」

「…フェル、ごめんなさい。私…：きゃっ！」

謝ってくるティアに軽くデコピンを放ち、僕も馬車に乗る。

「僕はそれほど狭量じゃないつもりですよ？少なくとも責任感から母親の形見を手放そうとしている女性を見捨てない程度にはね。それに、ティアが思っているほど大きな出費にはなりませんよ？」

「でも、2万ガルドなんて大金…：」

眉根を寄せて申し訳なさそうな表情でティアがぼつりと呟く。そんな顔をさせたいわけじゃないんですけど。

「大丈夫、そんなに払う気はありませんから。もちろん、合法的にね？」

「えっ？それってどういう意味なの？」

「さあね？それより早く乗って」

分かっているティアに肩を竦めるだけで僕は答えず、口元に笑みを浮かべつつ馬車の中からティアに手を伸ばした。

予期せぬ再会、これも預言通りなんでしょうか。

第一話 夜の溪谷（後書き）

第二話 “言葉” はきっちり使いましょう

木々の枝葉の間から差し込むうらかな木漏れ日。

森を駆ける風は心地よく、ブンブンと不快な音を立てる……ん？
ブンブン？

小さく舌打ちをし、後ろを振り返りつつ、

「爆撃掌！」

腰を入れた右ストレートで蜂型の魔物を殴り倒す。

「風情を楽しんでいるのに困った魔物ですね」

僕はやれやれと肩をすくめた。ちなみに今は僕独りだ。

ルークとティアはエンゲーブに着いてすぐ別れた。2人はバチカル
に行きたかったらしく、ルークはティアにひたすら文句を言ってい
たので、

「自分は何も言わず、さつさと辻馬車に乗ったのに、女の子だけを
責めるのは良くないですよ？」

と笑顔で言っておいた。けして脅したわけではないのであしからず。

2人のことは少し気になったが、あいにくバチカルまで着いて行く
用事はなく、時間的な余裕もない。

代わりにローテルロー橋が落ちた以上、海路を取らざるを得ない2人にカイツールで旅券を発行してもらえよう書類をグローブから出して渡している。

ティアは何でこんなものを持っていたの？と驚いていたが「旅の必需品」と答えておいた。

ルークが“聖なる焰の光”である以上、鉾山の町で逢うことになるでしょうけど…。

僕の予定はチーグルの森の様子を見てからグランコクマで用事を済まし、鉾山の町に向かうというもの。そして僕はエンゲープで休憩してから、ここチーグルの森を訪れたのだった。

「どうやら僕以外にも誰か森に入っているようですね」

ガサゴソと誰かが森の中を駆ける音がする。続く足音から追われているようだ。

音を頼りに僕も追いかけると小柄な少年が魔物に追い詰められていた。少年は逃げ切れないと諦めたようで、地面に両手をついた。あれは……

「やめてください！ 空破特攻弾！！」

僕の声に驚き、彼が集めた音素が拡散する。

その間に術技で進路上の魔物をなぎ倒しながら僕は彼の元に文字通り飛び込んだ。

「獅吼滅龍閃!!」

そして拳のフルスイングと共に獅子の闘気を放ち、残りの魔物を一掃する。

ふう、何とか間に合いました……。

「……あなたは!? お久しぶりですね! 助かり……いひゃいひゃいひゃです!!」

僕に気づき、嬉しそうに礼を言ってくる彼の頬を真横に引っ張る。うん、よく伸びます。

彼の体力のなさは2年半前に本人から聞いている。にもかかわらず、彼は広範囲にあんな譜術を展開しようとしたのだ。もし、実行していたら魔物は倒せても倒れていただろう。

「こんなところに導師守護役も連れずに来るものじゃないですよ? “導師イオン様”?」

言いつつ、手を離す。

「……すみません。迷惑をかけました。あと、敬称はいりません、良ければイオンと呼んでください」

「分かりました、イオン。今はフェル・フォーヘンと名乗っているのでフェルと呼んでください」

笑顔で返すと、イオンも笑顔を返してくれた。

「ところでフェル、あなたはどうしてここに……」
「待った。足音と……話し声が聞こえます」

足音はルークとティアだった。僕は右手を小さく挙げ、「や、どうも」と挨拶する。

「……フェル？ それに導師イオンも！ こんなところで何をしているんですか!？」

「まあまあ、ティア？ 聞きたいことがあるのは分かりますが、まずイオンに自己紹介からはじめませんか？……ついでにルークも」

ルークがついでって何だよ!!と怒ったが放っておこう。

「……失礼しました。私はオラクル騎士団所属ティア・グランツ響長です。それと彼はルーク」

「グランツ？ ということはあなたはヴァンの妹ですか？」

「ええ、私達は……」

「俺を無視して話を進めるなっつーの!!」

ティアとイオンの話しにルークが痙攣を起こし、割り込むのを聞きながら僕は輪から離れる。

そして、少しだけ森の奥に進み、さっきから視界の端に移っていた赤いもの　リングを拾い上げ、印を確認する。

「……フェル？何か見つけたの？」

話は終わったようで3人が駆け寄ってきたので、リンゴをティアに軽く投げ渡す。

「エンゲーブ産のリンゴです。周りにチーグルの毛もありましたから、この先の大きな木に住むチーグルが運んできたのでしょうか」

「なるほど。……それは分かったけど、フェルはそもそもここに何をしにきたの？」

ティアの疑問にルークとイオンも同意する。

「ここから北の森で大きな火事があったんですよ。そこにはライガの女王がいたのですが、もしかしたらこの森に流れてきたのではと思っただけの様子に見に着たんです」

ライガの女王はアリエッタの母親代わりですし、元導師としては聖獣チーグルのことも気にかかる。何よりライガは肉食で、人を襲うこともあり、ここは人家に近すぎる。

「……けれど、悪い予感は大当たりですね。森の中でここにはいないはずのライガルを何度か見ましたから」

「それで、フェルはどうするつもりなの？」

「とにかく、チーグルの長老にくわしい話を聞くとするのはどうでしょう？全てはそれからです」

イオンの意見に賛成し、僕達はチーグルの巣に向かった。

チーグルの長老に話を聞くと、チーグル族の子どもが北の森を燃やした犯人らしい。それで、流れてきたライガから同胞を守るためにエンゲープから食料を盗み、ライガの女王に献上していたそうだ。

話を聞いたイオンは「ライガを説得しましょう！」と提案したので、ライガとの通訳に例のチーグルであるミュウが着いてきた。

「……そう言えば、お前、昨日辻馬車から降りるときに御者と揉めてたじゃん？ あれは何だったんだ？ ……分かった！ さてはお前、金払わなかつたんだろ？」

ライガの住処に向かう途中、ルークが失礼なことを言ってきた。

「ダメだぜ？ 金は払わねーと。そんなことじょーしきだぜ？」

ルークは何故か得意気に続ける。一方ティアは「馬鹿……」と呟き、イオンは苦笑している。

いつもどおりスルーしても良かったが、少し苛つときたので相手をしてあげることにした。僕って優しいですねー。

「や、どこかの某ルークさんのようにお金も払わず、リンゴを食べるようなことはしていませんか？ まあ、そんな馬鹿というのもおこがましいくらい世間知らずな真似をする某ルークさんみたいな人はいないと思えますがね？」

“某ルークさん”を強調しつつ、にっこり笑ってルークを見る。

ルークは俯き「何でフェルがあのこと知ってるんだ……」とか言っ
て落ち込んだ。

ちよっとリンゴを金も払わず食べちまっただけで、人を盗人扱いし
やがって！

マジむかつくつーの！！などと宿で騒いでいれば知ってて当然で
しょうに……。

「ルークが言うことはともかく、御者と揉めてたってホント？ ま
さかお金が足りなかったとか……」

違いますよと心配そうなティアの言葉を苦笑しながら否定する。

「ただ、向こうが料金を不当に請求してきたので、抗議してただけ
です」

「……え〜と、1人一万ガルドで確か3割引してくれるって言っ
ましたね。だとすると3人で二万七千ガルド……」

「御者もそう言っつて、六千ガルドも水増ししてきたんですよ！ あ
んまりだと思いませんか？」

「……どういうことなんですか？ティアの話の話を聞いている限りおか
しなところはないと思いますが？」

イオンも首をひねりながら訊いてくる。

「だって辻馬車に乗るとき御者は“3割引で手を打とう”と言っ
たんですよ？ てつきり僕は“1人、3割引”かと思っただけで」

困りますよねと肩をすくめる。

「はっ？」

「えっ？」

「それはちよつと……」

3人は声を合わせて驚いた。ちなみに前からルーク、ティア、イオンの順だ。

「だから1人あたたま七千ガルド、3人で二万千ガルドだって言ったんですよ。それで揉めてたんですよ。ま、最終的には納得してくれましたが、こっちは余計な手間を掛けられたのでそのお詫びに千ガルドまけてもらいました」

「鬼だ……」

「同情するわ……」

「あ、ははは……」

「結果、3人で二万ガルド。思った以上に安く済みました」

につこり笑いかけると3人は目を背けた。はて、どうしたんでしょうね？

「お願いします！ 話を聞いてください！」

「“卵が孵化するところだから来るな”と言ってるのですの」

イオンがミュウを通訳に説得？を行ったがあえなく失敗し、ライガの女王 ライガクイーンが戦闘態勢に入った。

やれやれ、一方的にこっちに要求を伝えることを“説得”とは言わないでしょうに。

仕方なく、僕はみんなの前に出る。

「ミュウ、通訳お願いしますね？」

ライガクイーンが怖いようでもみゅう……と情けなく鳴きながら前に出てきてくれた。

僕は敵意がないことを示しながらまず頭を下げる。

「僕からひとつ提案があるのですが、聞いてくれませんか？」

「みゅみゅう、みゅうみゅみゅみゅう……」

ミュウの言葉で一応ライガクイーンは戦闘態勢を解いてくれた。これならなんとかかなりそうだ。

「提案とは何だ？」と言っているのですの

僕は話を聞いてくれることにもう一度礼を言った。

「ここは人里に近すぎ、卵が孵化すれば人間と無用な争いを生むでしょう。そこで、ここより北にあるキノコロードと呼ばれるところまで移動してもらえませんか？ そこなら外敵は少ないと思います」

「…もしその提案を呑まなければどうするつもりだ？」と言って

いるですの」

「その場合、双方にとって不幸ですが力づくになります。後ろの3人はともかく、僕とあそこで隠れている人の2人と戦うのは分が悪いと思いますが？」

その言葉を聞き、ルーク達は振り向き、隠れていた人は苦笑しながら出てきたが、僕はライガクイーンの目をじっと見つめた。

「それにあなたが死ぬと悲しむ“人”もいるでしょう？僕は“彼女の母親代わりを殺したくありません”

「“そうかあの娘の知り合いか。私もあの娘を悲しませたくはない。…分かった。我らはこの地より去ろう”」

みんなは僕の言葉の意味が分からなかったようだが、ライガクイーンには伝わったようだ。

最後にライガクイーンは「お前の名は？」と訊いてきたので「フェルと申します」と返しておいた。

ライガクイーンが去った後、隠れていた人はマルクト軍のジェイド・カーティス大佐と名乗った。

同時にイオンの導師守護役のアニス・タトリンという女の子も紹介されたが、ジェイドに何か指示され、すぐ走り去ってしまった。

そして報告のために長老の元に戻るとそこでミュウは追放処分を言

い渡されたが、結局僕達と合流し、5人と1匹で森の外を目指した。森の出口に着くと、マルクト軍の兵士がルーク達を囲み、僕は後ろから首筋に槍を突きつけられた。

「抵抗しなければ、手荒な真似を……ぬっ！」

ジェイド大佐が何か言っていたが、僕は無視し、すばやく裏拳を放つ。

しかしジェイド大佐は槍を手放し、バックステップで間合いを外した。

そのまま大佐は無詠唱で初級譜術である「エナジーブラスト」を僕に放ってきたが、サイドステップで回避。

彼は僕の速さに驚きつつも、冷静に僕を見つめており、その手には手放したはずの槍がある。

そして彼は槍を地面に突き立てた。

槍に第三音素が集まっている…？

第三音素は風の属性を持ち、攻撃範囲が広いことが特徴である。ならば彼の狙いは……、

「風塵皇旋衝！」

ジェイド大佐の周りに竜巻が生じるのを、僕は周りに生えていた木を足場にし、彼の頭の上に身を躍らせながら見ていた。

そして空中で体勢を立て直しつつ、ジェイド大佐の真後ろに着地しようとするが、すでに彼はこちらを向き、

「天雷槍！」

笑みを浮かべながら槍を突き出していた。さらに上空からは第三音素の雷が発生する。

同様に僕も笑顔を浮かべ、槍の先端に左手を、雷に右手を向け気を込め、触れると同時に、

「双撞掌底破！」

音素を爆発させた。

槍と雷は弾け飛び、ジェイド大佐の体が衝撃で後ろに下がる。僕はここが決め所と一足飛びで間合いを詰める。

「……待ってください、彼は敵じゃない！！！」

今まで呆けていたイオンが声を上げたとき、僕の拳はジェイド大佐の顎下数ミリで止めた。

「とにかく今は僕を信じて一緒に来てください！　お願いします！！！」

イオンの声が森に響く。僕はジェイド大佐の目を見、殺気が消えたことを確認すると拳を引いた。

「……分かりました。ただ僕は“イオンの友人”として同行します。

かまいませんね？」

「……ええ、あなたは“同行”して下さい。それとあなた達もいつまでも呆けてないで彼らを“連行”しなさい」

言葉の意味を正確に捉えたジェイド大佐は部下に指示を飛ばした。こうしてルーク達はジェイド大佐に“連行”され、僕はイオンに“同行”し、チーグルの森を離れた。

第二話 “言葉” はきっちり使いましょう（後書き）

トイボックスです。

というわけで2話掲載となりました。

イベントやらゲーム内での台詞やらかなりの勢いで飛ばしており、話の展開が早すぎるのでは？と思わなくもないですが、こんな感じに進めていく予定です。

ご意見、御感想等、ぜひぜひお待ちしております。一行だろつと何だろつと全然構いません。

ただ“おもしろくない”の一言だけとかはぐさっ！と来るのでご容赦を……

第三話 タルタロス（前書き）

今回もですが、ゲーム内での台詞は結構な勢いでカットしています。
ルーク側の動きはゲームを参照ください

第三話 タルタロス

視界を染めるのは突き抜けるような蒼穹と白雲。そのコントラストは留まることなく変わり続ける。

side イオン

僕がフェルを探して甲板に上がると彼は寝転がって日向ぼっこを楽しんでいた。

マルクト軍所属艦タルタロス。時々、近くを通るマルクト兵がフェルを怪訝そうに見ているが彼は眼を閉じ気にしていない様子だ。

まあ、ジェイドが部下達にフェルには関わらぬよう指示を出していましたが、任務中の軍艦の甲板で見知らぬ人間が寝転がっていれば気になるのは普通でしょうね。

「話は終わっただんですか？」

僕が近付くとフェルは眼を開け、訊ねてきた。

「ええ、ルーク達とは話がつきました。あ、隣かまいませんか？」

どうぞと答えたので、僕は隣に腰掛けた。

ルーク達とはタルタロスに乗り込んですぐにジェイドを交えて事情

を説明しておいた。和平交渉において王族に連なるルークの口利きはかなりありがたい。

フェルにも同席してくれるよう頼んだのですが「甲板で日向ぼっこしてます」と笑いながら拒否されてしまったのだ。

「ええ、ルークは了承してくれました。フェルは説明を聞いていませんでしたね。実は……」

事情を説明しようとするがフェルは首を横に振った。

「いえ、ピオニー陛下に和平条約を願い出、その仲介役に“導師イオン”を薦めたのは僕です。だから事情は承知しています」

軽く伸びをしながら衝撃的なことをさらっと言う彼に驚く。

彼はどこまですごいのでしょう……。

フェルの代わりに“導師イオン”になってすでに2年半。少しは近づけたのでは……と自負していたが、全く彼にはかなわない。嫉妬に近い尊敬の目で彼を見ていると、彼は苦笑した。

「……ころら？ 僕は三年半もかかって今のコネを作ったんですよ？ 二年半で僕と比べないでください。それにイオンはイオンが思うようにやれといたしましたよね？」

そう言われ、頭をぐしゃぐしゃと撫でられた。

僕を“レプリカ”と蔑むどころか自分と比べるなど彼は言う。彼は本当に大きく、優しく、何より暖かい。

…やっぱりフェルにはかないそうにありませんと僕は心の中で思った。

side フェル

しばらくお互い何も言わず、イオンと2人で日向ぼっこをしていると警報が鳴り響いた。

「何事でしょう?」

イオンが驚き、身を起こしながら不安そうに聞いてくる。

「導師イオン」が動けばモースやヴァンも動きまわります。星の記憶の一節なら当然、ね。もっともここまであからさまに動くとは思ってませんでした…」

僕も身を起こし、大きく伸びをする。体調は万全。仕込みも終わっている。

前方の空から迫ってくるグリフィンの群れに向かって、タルタロスから艦砲射撃が行われる。しかし数が足りない。襲撃が自然現象か判断しかねているせいだろう。

艦内に！と短く指示すると、イオンは「お気をつけて」と言い、走り去った。

僕は横目に確認しつつ、両手をグリフィンの群れに向ける。

「旋律の戒めよ。我が名において具現せよ。ミステイック・ケージ！」

詠唱と共にグローブ、そして甲板中に引いた譜陣から光が立ち上がり、グリフィンの群れを囲い込む。

「燦然たる神秘、重圧と成りて束縛の意思を示せ。ルーイナストライヴ！」

次に艦の左翼から迫るオラクル騎士団の地上部隊に両手を向け、詠唱と共に落とす。結果、上空のグリフィンの群れは譜術の檻によって動きを封じ、左翼の部隊は上空から落とした重力場で捕らえることが出来た。

しかし、右翼の部隊が艦に取り付くのはどうしようもない。出来れば僕自身が向かって対処したいところだが、大規模譜術の行使で体は限界寸前。

「はあ、はあ、はあ、はあ……さすがにこたえます。後は任せますよ？ 死霊使い殿……」

二つの大規模譜術は本来ならそれぞれ、捕らえた対象を押しつぶすことが出来るものだ。しかし今回は攻撃力を犠牲にし、出現時間を延ばした…平たく言うと拘束専門にしたが、それも長くは続かない。その間に大佐が上手く対処してくれることを期待しましょう。

僕は体を引きずりながら、事前に見つけた身を隠せる場所に向かった。

僕が見つけていたのは艦橋近くの一室で少なくとも仕官クラス、ひ

よつとすると大佐用の部屋の衣装棚の中だ。あまり物は入っておらず広さは十分、しかも清潔。

隠れ場所としては単純だが、この状況でわざわざこんな場所に隠れる人間はいるとは思わない。また、あえて部屋の扉を開け放っておいたことで探す気を削いだ。

事実、艦を占領したオラクル兵はこの部屋にも来たがろくに部屋にも入らず、さつさと他所を探しに行った。

それを確認し、僕は仮眠を取る。今は体力を戻すことが先決でしようから、ね……。

程なく意識は暗闇の底へと沈んでいった。

side ルーク

なんでこいつらは簡単に人を殺せるんだ……！

ティアは「好きで殺しているわけではないけれど、戦場だから仕方ない」と言う。

ジェイドは「戦えない足手まといなら置いていく」と言う。

そりゃあ、俺だってこのままで良いとは思わねえし、戦争が起きればもつと多くの人が死ぬってことは分かる。だからってなんで巻き込まれただけの俺がこんな目に遭わなけりゃなんねーんだ！！俺には関係ねえ！！

俺が思っていることを言うと、ジェイドは呆れ果てたような目で俺

を見、ティアは悲しそうな目で俺を見た。くそっ！俺をそんな目で見るんじゃないねえ！

「わかったよ！！ 戦えば良いんだろ！」

耐え切れなくて俺はとうとう言ってしまった。

「……いいんですね？ 戦力に数えますよ？」

ジエイドの奴が俺のことを値踏みをするような目でもう一度見た。

「戦うって言うてんだろ！ いちいち嫌味な奴だな！」

「ならば結構。さて、一応こちらの話はまとまりましたのでそろそろ出てきたらどうです？ そこで隠れている人？」

ジエイドが言うのと廊下の奥から鍵を片手にフェルが歩いてきた。

「無事だったのか！」

「無事だったのね！」

予期せずティアと声が重なってしまった。くそ！ なんかムカつくっ！

「おやおや、“フェル殿”はモテモテですね？」

「人徳がなせる業ですよ。“大佐殿”？」

「自分で人徳などと言えるなんてよほど“フェル殿”は自信をお持ちのようですね？ 過信に繋がらなければよいのですが」

「“大佐殿”は相手を過小評価して、足元をすくわれないよう注意した方がいいですよ？」

ジエイドとフェルはにこやかに笑いながら会話しているが、なんでか背筋が寒くなってきた……。

「2人ともこんな時に言い争わないでください！」

ティアが言うと、『別に言い争ってなどいませんよ?』と声を合わせて言う。ティアは疲れたようなため息を吐いた。今回はティアにマジで同情する……。

side フェル

「さて、いつまでも遊んでいるわけには行きません。貴方には聞きたいことが満載ですが……」

「現在の状況説明が先、ですね?」

僕はジエイドの台詞を引き継いだ。彼の性格はアレだが能力や判断力は疑いようがない。

「…まず、タルタロスの襲撃犯はオラクル騎士団。またその幹部である六神将のうち現在タルタロスにはアリエッタとシンク、あと重傷のラルゴが残ってます」

ジエイドは仕損じましたか…と悔やんでいたが、話を進める。

「アッシュは単独でどこかに向かい、リグレットはイオンと一小隊を率いて出て行ったようです」

「……リグレット教官は導師イオンをどこに連れて行ったのか、分かっているの？」

僕はティアの質問に首を横に振った。

「不明です。ただそろそろ戻ってくる予定らしいです」

「ふむ、なら少し急いだ方がいいでしょう。最後に1つだけ。…フエル、貴方を戦力として数えますよ？良いですか？」

つまり自分達の味方か？と訊いてくる。大佐だけでなく、ティアも真っ直ぐ僕の目を見た。ルークはそんなの当たり前だろ！と騒いでいたが…。

僕は「もちろん」と短く返し、見張りの兵から奪ってきた鍵でロックを外した。

「わかりました。当てにしますよ」

僕に軽口を叩き、部屋の外に出た大佐は拡声器に駆け寄り、

「死霊使いの名において命ずる。作戦名・骸狩り、始動せよ！」

命令を受け、タルタロスの動力が落ちる。なるほど、緊急停止機構ですか…。

「脱出路は？」

「左舷後方ハッチです。あそこ以外どの隔壁も動きませんから」

大佐の言葉を受けて、僕達は左舷後方ハッチまで走り抜けた。ハッチに到着し、外を窺うと遠目にオラクルの集団が見えた。イオンを

連れて行った一団のようだ。

「なんとか間に合ったようですね」

「ええ、作戦はどうします？」

僕が聞くと大佐はルークの方を向き、

「まず、ルークはハッチの入り口に隠れオラクルがハッチを開いたらミュウを使って牽制してください」

ルークに慣れない対人戦をやらせるより、ミュウを使った方がマシという判断だろう。

「私はリグレットを押さえます。ティアはその際に譜歌を」

ティアに指示し、最後に僕を見た。

「フェルは独自の判断でフォローをお願いします」

挑発的な目だ。完全に僕を試していますね…。

「きますよ？」

大佐の声でみんなが配置につく。

僕はみんなの背中が見える位置に下がった。

ハッチが開く。

ハッチを開いたオラクル兵はミュウの炎を受け、タラップから転げ

落ち、ルークが追う。

ティアは慎重に音素を集め始めた。

そして、大佐はタラップからリグレットに飛び掛り、リグレットが譜銃で迎撃する。

大佐は空中でリグレットの銃弾を弾きながら、リグレットの後ろに着地し、隙を突いてその首筋に槍を突きつけた。

「さすが死霊使い、譜術を封じても侮れんな」

「お褒めいただき光荣ですね。さて、武器を捨ててもらいましょうか？」

フツと自嘲の笑みを浮かべ、リグレットは譜銃から手を離れた。

2人の攻防の間にルークはオラクル兵に剣を向け、動きを封じており、ティアの譜歌も完成間近。

状況は決したかに思えたが、そこにアリエッタを乗せたライガがティアに後ろから襲い掛かりつつ、飛び込んできた。

「っ!?!」

ティアはギリギリで攻撃を避けたが、体制を崩してしまい、牽制しているライガの方が早く行動できるだろう。

そして、ライガに驚き、棒立ちになっていたルークはオラクル兵に、大佐はリグレットに武器を向けられていた。

「よくやった。アリエッタ」

「ううん、この仔が隔壁を引き裂いてくれたから……」

言いながらアリエッタはライガの頭を撫でた。

「形勢逆転だな。今度はお前達が武器を捨ててもらおうか？」

リグレットの声に大佐は歯噛みをし、諦めたように槍を手放した。

さて、状況は決しましたね。彼はどう動きますか……。

一連の流れを僕は何もせず、ただ見ていた。

ハッチが開く直前に後方から迫る気配と、ここに来る前に通った甲板でちらつと見かけた青年の動きが気になったからだ。

一刻も早くハッチまでたどり着く必要があったため、あの時は放っておいたのだ。

あれは迷子のルークを送り届けたときに見た青年で、確か名前は“ガイ”だったと思う。

「ガイ様華麗に参上！」

……

……

…

名前は合っていたらしいが、場違いな上に、間抜けな台詞を言いながら、ガイはリグレットに切りかかっていった。

色々思うことがあるが、これ以上サボる……コホン、様子見をして

いるわけにもいかず僕も飛び出した。

リグレットはガイに任せ、僕はイオンの救出に向かう。

「鷹爪落爆襲！」

言葉と共に蹴り足から音素を飛ばし、イオンの周りにいたオラクル兵を吹っ飛ばす。

イオンのすぐ隣に着地し、ガイに譜銃を乱射していたリグレットに「魔神拳」を放つと、その隙にガイが譜銃を弾き飛ばした。

その間に大佐はいつの間にかアリエッタを後ろから拘束し、槍を突きつけていた。

人質を取って立てこもった幼女誘拐犯にしか見えませんね。いんな意味で危ない人に思える…。

「フェル？ 失礼なことを考えないで下さいよ？」

……実物はもつと危ないですね。

「さあ、お友達をタルタロスに戻してください」

アリエッタは迷っていたが、イオンの説得で大人しく戻り、リグレットも後に続いた。

「またあなたの手を煩わせて……痛っ」

隣のイオンにデコピンを放ち、言葉を止める。

「……“煩わせた”とか言わないで下さい。僕は1人の友人としてイオンを助けただけです。今度、余計な遠慮などしたら本気のデコピンをお見舞いします」

ちなみに僕の本気のデコピンはリンゴに穴を開けるレベルだ。

「すいま……、いえ、ありがとうございます」

笑顔で言い直すイオンを頭を僕は撫でた。

「皆さん、積もる話もあるようですが、まず移動しますよ?」

僕はイオンと、ルークはガイと話している間に大佐はハッチがしばらく動かないように細工をしていたが、どうやら終わったらしい。ティアは独りタルタロスを見上げていた。リグレットのことが気になるのだろう。

「行きましよう?」

僕がそう言つとティアは頷き、僕達はタルタロスから離れた。

こんな強硬手段に出るとは……のんびりしている時間はないらしい。

第三話 タルタロス（後書き）

第三話 投稿となりましたトイボックスです。

前書きにも書きましたが、ゲーム内のセリフは結構な勢いでカットです。後イベントも……。

というのも主人公であるフェル君はパーティーからの離脱が多いからです。

なのでルーク側の動きはゲームをご参照ください。基本的に同じです。

後、視点切り替えが多くなってしまいましたが、出来る限りそれぞれの心情やらを描写出来たら……との思いからです。

そして今回アビスには登場しない術技を使用してますが、あまり気にしないでください。グラビティでも良かったんですが、個人的にTOV技が好きなもので。

ルイナストライブ

TOVのリタ・モルディオのバーストアーツ変化技
ターゲットの頭上に術式を描き、重力を発生させ押しつぶす。地属性の攻撃でダメージを与え、範囲内の敵をダウンさせる。

もっともバースト中は通常の術技を連発する人の方が多し上にわざわざ変化技を多用することもなく、おそらくロマン技かと。。。。

第四話 疑惑

小鳥はさえずり、風は優しい木々と草の香りを運んでくれる。少し離れたところで起こった愚かな人間の争いなど、欠片も感じさせずに……

タルタロスから脱出した僕らはイオンの体調を考慮し、ある程度タルタロスから離れた場所で休憩することになった。

「ところで大佐、アンチフォンスロットでも受けたんですか？」

そこで僕は少し気になっていたことを大佐に聞いてみる。

「鋭いですね。お察しの通りです。何で分かったんですか？」

僕に対する詰問のような大佐の強い言葉。

漂っていた安堵の雰囲気霧散し、みんなは黙って僕を見た。

「音素に対して敏感なんです。チーグルの森では、大佐の周りに何もしくなくても音素が集まっています。しかし、タルタロスの牢で再会した時は違った。怪我もしていない、意識もはっきりしている。なら体内のフォンスロットに異常が生じていると考えるのが妥当です」

腕を組んで大佐を見上げながら言う。身長差の関係でどうしても見上げなければならぬのが若干癪だ。

「そして、それを外因によって引き起こす手段はアンチフォンスロ

ツトのみ。簡単な推理です」

僕が言い終わると大佐は視線を強めた。

「僕に聞きたいことがあるのは分かりますが、先に僕の質問に答えてください」

大佐は何か言いたそうだったが、それをのみ込み「答えられない質問は黙秘しますよ？」と答えた。

「かまいません。まず、タルタロスに乗っていたマルクト兵は無事ですか？」

僕の質問が意外だったのだろう。大佐は少し驚いたようだった。

「ええ、艦長から敵の規模を報告され、すぐに撤退指示を出しましたから」

大佐の的確な指示は本当にありがたい。下手に抗戦されていたらマルクト軍もオラクルもそれなりの被害出ていただろう。

「もう一つ、今回の件でダアトに圧力をかける気ですか？」

「…本来ならそうするべきですが、保留しています。戦争を止めるために」

大佐ならそうすると思ったが、実際に言葉が聞けてほっとした。

ダアトに圧力をかけるということはマルクトとダアトとの信頼関係に異議を申し立てることを意味してしまう。

もちろん今回の件はダアトに非があるのは明らかだが、信頼関係を崩すことは戦争を止めるために得た“導師イオンの協力”を失うことに繋がる。キムラスカとの停戦には両国の“ダアトへの敬意”が最低条件となっている以上、今ダアトと事を構えるわけにはいかないのだ。

「あの時、大規模譜術を展開したのはあなたですね？おかげで怪我人は出ましたが死者は出さずに撤退させることが出来ました。人的被害が無かったためダアトへの抗議を延期できます。本当にありがとうございました」

そう言い、大佐は深々と頭を下げた。

「頭を上げてください。僕は出来ることをしただけに過ぎません。それには確な判断を行ったのは大佐の手腕です。こちらこそ、賢明な判断、感謝します」

僕も頭を下げた。そして「それではこの件はこれで」と締めようとしたが、

「いえ、それは困りますね。私の質問が残っています」

やはり無理だった。まあ、あれだけ派手に色々やれば当然でしょうね。

大佐は笑顔を浮かべながら、イオンは少し不安そうに、残り3人も興味があるのか僕を見た。

「最初にフェル・フォーヘン、あなたは何者ですか？」

いきなり直球を投げてきた。ド真ん中のストライクだ。

「チーグルの森とタルタロスであなたの実力は十分見せてもらいました。優れた体術、的確な状況判断、さらにはあれだけ大規模な譜術。普通の人間だとは思えません。そしてキムラスカ王家に繋がるルーク、導師であるイオン様、オラクルのティアと知り合い。顔が広すぎませんか？」

眼鏡のブリッジを上げながら、尋ねる。すでに質問ではなく尋問です。すねと僕は心の中で苦笑した。

「僕はここ2年半程、時に傭兵の真似事をしながら世界中を回りました。その間にみんなとは知り合っただけです。それと譜術に関してはシェリダンで創ってもらったこのグローブのおかげです」

言いながら、大佐にグローブに刻まれた譜陣を見せる。

「ここには2種類の譜陣が刻んであります。1つが音素の吸収効率を高めるものでこれと同じ譜陣をタルタロスの甲板に創り、僕はその中心で日向ぼっこをしながら音素を集めていました」

ちなみにもう一種類は吸収した音素の制御を補助するものだ。

「あの時ですか」と大佐は呟いた。日向ぼっこかよ！というルークのツッコミは無視だ。

「オラクルがタルタロスを襲撃する可能性は確かにほとんどなかった

た。けれど絶無ではないと思ったので用心していただけたことですが、国際問題に繋がりがかねない行為だが、和平交渉はユリアの預言を着実に進めるには障害になりうる。ユリアの預言が絡む以上、保守派が強硬姿勢を取りかねないと思っただからだ。

とはいえ、さすがに正規のマルクト軍艦に襲いかかるなど、リスクが大きすぎますね。他にも狙いがあつとみる方が妥当か。

キムラスカとマルクトの戦争が絡むと思われるユリアの預言は“ルグニカの大地は戦乱に包まれ、マルクトは領土を失うだろう。結果キムラスカ・ランバルディアは栄え、それが未曾有の繁栄の第一歩となる”の一節。

しかしこれは“ローレイの力を継ぐ者”が鉾山の町に行つてからのはずだ。前提がまだ為されていない以上、今回のようなあんまりな強硬手段を取るのはリスクが大きすぎる。

だとするとイオンをどこかに連れ出したオラクルの動きが気になりますね。

イオンは素直にタルタロスの一室に閉じ込めておけばいいだけだったはずだ。わざわざ奪還される危険性を増やしてまで、外に連れ出すのは不自然だ。

「……私の質問はまだ終わってませんよ？」

思考に没頭していると大佐が呆れながら言ってきた。思考の渦にはまってしまうのは僕の悪い癖だ。

「ああ、これは失礼しました。他に聞きたいことは？」

「一応、貴方がオラクルの動きを警戒していたことには納得しておきます。では、譜術を展開後あなたは何をしていたのですか？私達もあの後甲板に上がりましたが貴方の姿は無かった」

“一応”とわざわざ一言つけるのは大佐らしい。

「無茶言わないで下さい。僕は超人ではありません。いくら譜陣による援護があろうとあれだけのことをやれば疲れもします。捕まりたくなかったので、譜術展開後すぐにあの場を離れ、隠れてました」

とりあえず、怒られるのも馬鹿にされるのも嫌なので寝ていたことは黙っておく。

しかもおそらく大佐の部屋であろうクローゼットの中だ。血が付いているわりに損傷がない軍服なんて僕は断じて見ていないっ！

「なるほど…では最後に旅券と、身分証明書を見せて下さい。見たところ荷物1つ持っていないようですがね」

にやりと笑いながら大佐が聞いてきた。

「荷物はグローブ中に収納しています。ベルケンドを訪れたときに機能を追加してもらったので。なんでもコンタミネーション現象を利用しているとか言っていました。原理までは分かりません」

言いながら、旅券と一枚の書類を大佐に渡す。さて、どんな表情が見れるか…。

旅券を見、「偽造…ではなさそうですね」と疑いの目を向けていた大佐だが、書類を見て表情が凍りついた。

その後、大きなため息を吐き、僕に書類を返す。

「身の潔白は証明できましたか？大佐？」

にっこりと笑って言ってやった。

「ええ、十二分に。全くそんなものを持っているなら先に出してください…あと私のことはジエイドとお呼び下さい」

「分かりました、ジエイド。僕のこともお願ひします」

返してもらった書類には『マルクト帝国ピオニー9世の名においてフェル・フォーヘンの身分を証明する』と書かれていた。

第四話 疑惑（後書き）

後書き 第四話お届けとなりました、トイボックスです。

しかし、会話ばかりですね。イベントまで行けなかったです。

アビスは政治的な話が絡んでくるので、ややこしい。オラクル（というか指示したヴァン）、他国の軍艦に襲いかかるとかやりすぎです><

タルタロス襲撃はヴァンの指示であったことから和平交渉の妨害ではなく、イオンを確保し、ダアト式封呪をひたすら解除させるつもりだったのでしょう。にしても強引過ぎる気がしてならないのですが……。

TOVでの姫様と同じ役どころですね、イオンは。

後、ジェイドはフェルにまだ質問していないことがあります。それは後日に回すことになります。内容、理由はその時に。ま、大したことではないんですが。

ご意見、御感想、お待ちしております

第五話 戦うこと、そして・・・(前書き)

前半と中、後半のギャップが……
話が重くなるのはアビスの宿命ですね

第五話 戦うこと、そして・・・

僕とジェイドの間で話に“一応”の決着がつき、みんなの緊張が和らぐ。

「ところで、ガイさん、あなたも自己紹介したほうがいいんじゃないですか？」

なので話題をシフトすることにする。この空気はちょっと良くないと思ったからだ。

「すまない。自己紹介が遅くなった。俺はガイ・セシル。ファブレ家でお世話になっている使用人だ。それと、呼び捨てでかまわないよ？ フェル」

僕が「よろしく」と言うとジェイドも「よろしくお願いします」と言い、ティアがガイの前に立つ。

「私はティア・グランツ。ティアで良いわ」

と言い、手を差し出すとうわああ！と叫びながらガイは後ずさった。

「ガイは女性が苦手なんだ」

「と言うより女性恐怖症ですね」

ルークの説明にジェイドが合わせる。

ずいぶんな距離を取ったガイに微妙そうな顔をするティア。

二人を見比べ、僕はちよつとした悪ふざけを思いついたので実行することにする

「ガイは女嫌いなんですか。ということはまさか男好き!? ルーク、ガイに近づいたら危険です! いつ取って喰われるか分かりません!」

「そうなのか、ガイ!??」

僕の悪ノリをルークは信じ、ガイから思いつきり距離をとった。

「誤解を招く言い方は止めてくれ! というかルークも信じるな!」

「いやー、性癖は人それぞれですよ? 早めにカミングアウトするのも一つです」

「ですよね〜。大丈夫、僕はガイのこと差別なんかしません」

ジエイドと一緒にガイに笑いかけると、「最悪だ…この2人…」とガイは呟いた。

「……とにかく、私のことは女だと思わなくて良いわ」

言いながらティアは近づいたが、即座にその倍ほどの距離をガイは下がった。

「……ガイには、なるべく近づかないようにするわ」

「すまない。君がどうこうってわけじゃないんだ……」

ガイはティアにフォローを入れたがやはり少し落ち込んでしまったようだ。

「大丈夫。ティアは美人ですよ？自信を持ってください。悪いのはガイです」

僕が寝めるとティアは顔を赤くし、「お世辞は良いの」と小さく言った。

「これからどうしますか、大佐？」

一息ついたところでティアが口火を切った。

「セントビナーに向かいますよ。そこがアニスとの合流地点になっています。生きていればですがね」

ティアの質問にジェイドが答える。わざわざ“生きていれば”などと付け加えるところがなんともジェイドらしい。

「……セントビナーってどこだよ？」

ジェイドの余計な一言に嫌な顔をしながらルークが質問すると、答えたのはガイだった。

「ここから南西にある城砦都市さ。ざっと二日ほどの距離かな？」

ルークは「二日も掛かるのかよ…」と愚痴をこぼしたが、僕ともう1人には今の受け答えが不自然に感じられた。

「おや？ガイはキムラスカ人なのにマルクトの地理を良くご存知ですな」

「卓上旅行が趣味なんだ」

ジエイドの問いにガイは即座に言い返した。……怪しくは無いが妙な回答だ。

「……なあ、フェル、“卓上旅行”って何だ？」

「行きたい場所の写真や情報を集めて、部屋の中でニヤニヤしながらその場所のことを妄想すること」

ルークが訊いてきたので僕は親切に教えてあげる。

「げっ！なんかそれってキモいな……」

「ちよっ！だから誤解を招く言い方は止めてくれ！ルークも信じるな！フェルはティアに対する扱いと俺に対する扱いが違いすぎないか！？」

慌ててガイが止めに入る。嘘を教えるつもりは無いのですが……とりあえずガイの疑問に答えておきますか。

「違いますか、それが何か？」

僕の答えにガイは絶句した。

「…いや、何か？じゃなくて！　なんで俺だけそんな扱いなんだ？
何か君を怒らせるようなことしたかな！？」

必死ですね。そのわりに「何か？」のところで僕の真似をしている
あたり芸が細かいというか何というか…。

「いえ全然。ガイは良い人だと思いますよ？」
「ならどうして!？」

なんかガイが泣きそうな顔して問い詰めてきた。

「周りを見てください」

僕が言うとガイはまず、ルークを見、ティアを見、イオンを見、最
後にジエイドを見た。

「えーと、つまりどういうことだ？」

「ガイ以外イジリ甲斐がある人がいない」

「おいっ!！」

僕はフェミニストなんですよ？

……ガシャン、ガシャン、ガシャン……

こちらに近づいてくる足音が聞こえる。数は…10人、一部隊です
ね。

ガイで遊んでいた僕が表情を改めたのを見て、ルークとイオン以外

に緊張が走る。

「…いたぞ！導師イオンは渡して…「魔神拳・双牙」」

僕は術技を放ち、二条の衝撃波で隊の先頭と一番後ろにいたオラクル兵を黙らせる。

一般的な隊列では先頭、ないし最後尾にそれぞれ隊長、副隊長を置くのがセオリーだ。だから最初に指揮系統を潰しておく。

結果、比較的冷静で後退しようとする2名、混乱しながらこちらに突撃してくる5名、ただ呆然と立ち竦む者1名に分かれた。

「炸裂する力よ、エナジーブラスト！」

「ノクターナルライト」

後退しようとした2名が音素の爆発とナイフで倒れる。

「魔神剣！」

さらに一番近づいてきていたオラクル兵をガイが剣圧で倒す。これで残り半分…。

残る突撃してきた4人のオラクル兵を僕達4人がそれぞれ止める。非戦闘員で体力がないイオンと、一応剣は構えているが、恐怖で剣先が定まっていないルークの元に敵を行かせるわけにはいかない。

その時、呆然と立ち竦んでいたオラクル兵が叫び声を上げながら、ルークに突っ込んでいった。

「ルーク！」

「ルーク、戦いなさい！！！」

ガイが声を上げ、ジエイドが叱咤する。

僕は何も言わず、相手をしていたオラクル兵を殴り倒し、即座にルークの元に駆ける。

ガイも相手を倒し、ルークの元に走るが、あの位置では間に合わないだろう。

「ルーク！」

叫びながら斬りかかれそうになったルークをティアが突き飛ばす。ルークは驚いた顔でティアに視線を向けながら尻餅をついた。

僕はティアとオラクル兵の間に強引に横から体を入れ、左手で上段からの一撃を受け、右手で殴り飛ばす。

左手の肘辺りを切られ、鮮血が宙を舞う。さらにティアが相手をしてきたオラクル兵が好機とばかりに斬り込んできた。

「フェル！？」

叫び声はルークかティアか、それとも他の誰かか…。

痛みはあるが、僕は慌てず斬られた左手を振るい、自身の血で相手の視覚を奪うことでオラクル兵に隙を作る。

「輪曲旋風」

そのまま隙が出来た相手を上段回し蹴りで沈めた。

「今治すからじっとしてて」

ティアが“ファーストエイド”と唱えると徐々に傷が治っていく。

「大丈夫か！フェル」

ガイが僕に駆け寄るなり、心配してくれる。

「ティアに治してもらっているから大丈夫。僕よりルークを」

僕が言うとガイは未だに地面にへたり込んでいるルークを見、「すまない」と言いながら駆け寄っていった。

「ティア、今はこれで十分です」

「何を言っているの、まだ完治してないわ」

ティアは抗議するが、今は止血さえしてもらえれば十分だ。

「ジエイド、とにかく移動しましょう。増援は厄介です」

追手があれだけのはずがない。追撃がかからないうちにさっさと移動した方が良いだらう。

ティアだけでなく、ガイも僕に何か言いたそうな顔をしたが、ジエイドの指示で僕たちは移動することになった。

「ルーク、隣いいですか？」

僕が聞くと、「ああ……」とルークは小さく答えた。

時刻はすでに夕刻を通り過ぎ、夜の帳が下りている。焚き火を中心にみんなバラバラに座り、思い思いに時間を過ごしていた。

僕はさつきまでティアの治療を受けていた（もう大丈夫だと言ったが無視された）が、ルークに訊かなければならないことがあり、移動してきたのだ。

「……もう、怪我はいいのか？」

ルークは俯いたまま、蚊の鳴くような声で訊く。

「傷は塞がりました。若干痺れが残っていますが、明日にはそれも取れるでしょう」

「……そうか」

それっきり、ルークは何も言わない。

「……人と戦う、いいえ、人を“殺す”のが怖いんですか？」

「っ！ 悪いかよ！ ああ、そうだ。怖いよ！ 何でそんな簡単に人を殺せるんだよ！？」

泣きそうな顔を僕に向ける。

「生きるため」、「守るため」、「目標を成すため」、理由は人によって様々です。ですが、まとめると人は自分のエゴのために人を殺すのでしょね

僕の極論に絶句するルークから目を離さず、僕は続ける。

「そして、僕も同様です。好き好んで人を殺したいわけではありませんが、必要なら躊躇いません」

「何でだよっ！！フェルまでそんな事言うのかよ。ガイが言った、フェルは追っ手のオラクルを気絶させただけで、一人も殺してねえっつて」

ルークの言うとおり、僕はオラクル兵を誰も殺していない。あくまで意識を絶つ程度だ。でもそれは、僕が優しいわけでは決してない。「それが僕の“エゴ”です。オラクルには昔お世話になったので殺したくなかった。そして、僕には彼らを殺さずに止めることが出来るだけの力があつた。ただ、それだけのことです」

ジェイドが僕の行動に何も言わないのは僕の實力ゆえにすぎない。彼が何も言わないのと同様に、ジェイドが自分の相手に止めを刺そうが僕もとやかく言う気はない。

「だから僕が優しいわけでも、ジェイド達が特別に冷酷なわけでもありません」

僕はきつぱりと断言した。

「ルークが戦いたくないなら、戦わなければいいと僕は思います」

僕は言いたいことは言えたと思い、踵を返した。

「待ってくれ、フェルは…人を殺したこと、あるのか…？」

僕の背にルークは問う。

「ありますよ。大勢、ね…」

僕は自嘲の笑みを浮かべながら答える。

「後悔してねえのか…？」

「もちろんしていますよ。あの時もっと上手くやれたらと思うことばかりです」

常に最善を選べない以上、後悔するのは当たり前だ。けれど……

「しかし“たら”“れば”に逃げ込んでも無意味だと思ってます。後悔を否定しませんし、出来るはずがありませんが、いつまでもそれに囚われるのは逃げにすぎません」

泣こうが喚こうが死者は何も語らず、何もしてくれはしない。

「後悔したなら次に繋がる行動をする、それが償いだと僕は考えます」

あるいはそれさえも自身の罪からの逃避なのでは……と不安に思うことがあるが何もしないより意味があると僕は思う。

「殺した者」は“殺したこと”を全て受け入れ、その上でどうするかを決める責任があると僕は思っています。いずれにしても僕の考えにすぎませんがね」

振り向かず、僕はルークの元を離れた。

翌日、ルークは「自分も戦う」と宣言した。ガイとティアも警告したが、ルークは曲げなかった。

僕にはルークの決心の大半は“自分の弱さを認めたくない”という感情。それ故に守ってもらおう立場を良しとしないように見えた。けれど、そんな決心ではいずれ大きな“後悔”を残すだろうと思う。

願わくば、彼が“後悔”せずに済みますように……願いながら、僕はおそらく無理だろうなと思いつつ、一つ息をついた。

第五話 戦うこと、そして・・・（後書き）

第五話 お届けとなりましたトイボックスです。

戦闘とシリアスはやはり難しいですね。とはいえエアビスでは外せない要素です。うまく表現できるようになりたいです……

第六話 城砦都市

ゴトゴトと身にかかる振動、流れ行く景色。馬はいななき、御者の鞭切る音が聞こえる。

そこに香る……人参の匂い……、

途中まではわりと風情を語っていられたましたが、さすがに人参まみれの馬車の中では無理がありましたね……

「職務怠慢甚だしいです……」

「あはは……」

元導師の僕と現導師のイオンは顔を見合わせ、ため息を吐いた。

“城砦都市セントビナー”、その名の通り都市をぐるつと高い壁で仕切り、城門は1つだけ。守るに易く、攻めるに難いという人口約25万人のマルクト帝国第2の都市だ。

アニスとの集合場所であるセントビナーに到着した僕らが見たのは、その城門にオラクル兵が敷いていた検問だった。どうやって中に入るうかと相談していると、エンゲープからの馬車があっさり検問を越えて行った。

そこで、街道を少し戻りエンゲープからの馬車に乗せてもらい、検問を突破した。しかし……、

どれだけザルな検問なんだろう……。

馬車の荷を全く点検しないなど検問の意味がないではないか…と僕は頭を抱えた。

よく考えればダアトにいたときも保守派に何度か襲われたことがあった。あの時はどこぞの大詠師が手引きしていると思っていたが、単にあっさり侵入されていただけかもしれない。

「イオン、ダアトに戻ったら警備計画の見直しを」
「ええ、必ず」

2人そろってもう一度ため息を吐いた。

「2人ともそんなところで怪しい密談は止めて、マルクト軍基地に行きますよ？」

「怪しいのはジェイドの頭の中でしょう？」

馬車から降り、イオンと話していた間に行き先の説明が終わったように、ジェイド以外はすでに歩き出している。

「いえいえ、貴方ほどではありませんよ？」

冗談めかしに言いながらジェイドの目は笑っていない。

「ま、“今”は良いです。とにかく行きますよ？ アニスと合流しなくては始まりませんから」

「僕はいいです。その辺を見て回っていますから」

別に僕が付いていく理由はない。というかマルクト軍基地に民間人

である僕が行っても仕方ない。

「ちょっと待ってくださいっ」

イオンが止めるが、僕は手をひらひらと振りながら歩き出す。

「…自由な人ですね。このまま消えられると困るのですが？」

「宿で合流しましょう。出発は明日になるでしょうし」

イオンの顔色はあまりよくない。あの様子では今日中に出発は無理だろう。

「それと話があるのなら今晚伺いますよ？ “バルフォア博士”？」

後ろで絶句した気配を感じながら、僕はその場から離れた。

みんなから離れた僕は店を覗きながらグミやボトル系、食材など旅に必要なものを買い揃えた。

決して、軍の基地に行っても面白くないと思った…だけで付いて行かなかった訳ではない。

タルタロスが奪われ、ローテルロー橋が落ちている以上、キムラスカへはカイツールから海路を使うことになる。ここからでは結構な距離があり、旅の準備は必要不可欠だ。

けれど、導師の格好をしているイオンを筆頭にオラクル兵が町を見回っている中で買い物に行かせるのは問題があった。

死霊使いの二つ名で有名なジェイド、現オラクル所属のティア、マルクトでは目立ちすぎる容姿のルーク、ルークの子守で忙しいガイ。そこで僕が買い物をしたほうが良いだろうと判断したのだ。

もともと僕も髪型や雰囲気などは違うとはいえ、当然イオンとそっくりだが、さして問題にならないことはこの2年で知っていた。

“導師イオン”の顔をはつきりと覚えている人間などほとんどいないのだ。人前に出るのはほぼ式典の時だけだったのだから当然ではあるが。

教団の人間やオラクルであってもせいぜい服装などでしか判断できないようだ。

おかげで誰にも正体がばれることなく、世界中を旅することが出来た。

「もつともイオンと並んでいるところを見られれば、さすがに怪しまれますか……」

髪色や髪型など違いはあり、声も意識的に変化させてはいるが、顔の造形は双子というより全く同じ。身長はブーツの底が厚いので実は僕の方がいくらか高い。

世間知らずで鈍感なルークは気づいておらず、ティアとガイはそっとしてくれているのでありがたい。けれど、ジェイドは僕の背に鋭い視線を向けていた。

「大体、あの“バルフォア博士”を誤魔かすことなど最初から不可能だったのでしょね」

ジェイド・カーティス大佐、元ジェイド・バルフォア博士　フォ
ミクリーの生みの親。

はじめてイオンに出会ったときに“レプリカ”について概要を説明され、その後、世界を回りながら自分で調べた。

第七音素を用いてレプリカを生み出すフォミクリー技術。生体にも応用可能で、人間のレプリカさえ可能にする。

その実例が“導師イオン”、そして“聖なる焰の火”も……。

ヴァンの計画の全容は把握しきれませんが、フォミクリーが根幹を支えているのは間違いないでしょう。

ユリアの預言に詠まれた、鉱山の町の消滅から繋がる行く末。歴史はもうすぐ動くだろう。

「そんな中で、僕に何が出来るかまだ見えませんが、それでも出来ることをしなければ」

そう呟きながら僕は宿に向かう。

とりあえず、ジェイドに説明しておくでしょう。

宿の人にイオン達が泊まっている部屋を聞き、中に入ると意外な光景が広がっていた。

「いいですか？そもそも音素とは……」

「……もちつと、簡単に説明出来ねーのかよ！」

「やれやれこれでもあなたのレベルに合わせているつもりですが？」

ルークがジェイドと向かい合って、音素についてだろっ勉強を教えられていた。

「イオン、体調は大丈夫？ ……それと珍しいですね。ルークが勉強、しかもガイじゃなくジェイドに教わっているなんて」

横で苦笑しながら二人を見ていたイオンとガイに話しかけた。ティアは椅子に座り、本を読んでいた。

「おかえりなさい、僕なら大丈夫ですよ」

「お、おかえり。結構買い込んだんだな」

「おかえりなさい」

ティアも挨拶してくれた。“おかえり”などほとんど言われたことがなかったので少しくすぐりたい。

「まあね。はい、これはガイ、こっちはイオン、それとティアにも」

買い物袋の中から小さな紙袋を3つ取り出し、それぞれ3人に渡す。

「良い香りですね……。心が落ち着きます」

「可愛い……」

イオンに買ってきたのは小さなポプリ。ティアにはチーグルが描かれた櫛。どうやら気に入ってもらえたみたいだ。

「で、俺のは…何？」

「厄除けのお守り」

僕が答えるとガイはなんとも言えない顔をし、イオンとティアは苦笑した。

「あと胃薬。これからの旅に必要なかと思って」

薬屋のおじさんが良く効くと太鼓判を押してくれた品だ。別に嫌味で買ってきたわけではなく、客観的に見て必要だと思ったただけだ。

「ありがたいが、このパーティでの俺のポジションって……」

「おや？ フェル、おかえりなさい。それとガイ、子守りが一段落ついたのでコーヒーをお願いします」

「何が子守りだ！ほんと嫌味な奴だな。あ、ガイ、俺には紅茶！甘めで！」

2人の台詞を聞き、ガイはがつくりと肩を落とす。

イオンが「頑張ってください…」と気の毒そうに慰めた。

第七話 城峯都市で紡ぐ言葉

あの後、ちょっとしたお茶会を楽しんで今は夜。

僕は足音を立てずに宿を抜け出し、街の北にそびえる大樹　ソイルの木の前で夜風に当たっていた。

この大樹はどれくらいの間この場所で世界を見てきたのでしょうか。

背丈は周りの建物より遥かに高く、見上げてもここからでは天辺が見えない。樹齢何百年、ひよっとすると千年単位かもしれない。

「この大樹の前では、人の営みなど、ちっばけなものだと思いませんか？　ジェイド」

振り向かず僕が問いかけると、苦笑が返ってきた。

「ばれてましたか」

「ばれていないと思ってましたか？」

間髪入れずに僕が言うとジェイドは苦笑を深めた。

「それはともかく、あなたに訊きたい事があります。あなたは“何者”ですか？」

昨日と同じ問い。しかし、昨日は僕という“人間”について、今日は僕と言う“存在”についての問い。その問いが意味することは大きく異なる。

「…僕は、フェル・フォーヘンです」

それだけは変わらない。生まれたときから、ずっと……。

「フェル！」

誤魔かしたと思ったのだろう。ジェイドが大きな声を上げたが、僕は首を横に振った。

「そして、かつて“導師イオン”でした」

「なっ！？では、あなたがオリジナル……」

ジェイドが絶句した気配が伝わる。

「そう、被験者は僕の方です。入れ替わったのは2年半ほど前。レプリカ情報は導師をやっていたときに“健康診断”と言われ、妙な音機能にかけられたことがあったのでそれでしょう」

「なるほど…。ピオニー陛下はあなたの正体をご存知なのですか？」

「ええ、その上で色々便宜を図ってもらっています」

現マルクト皇帝ピオニー・ウバラ・マルクト九世陛下は一言で表すと豪放磊落^{じゆうほうらいらく}。彼の協力のおかげでスムーズに旅が続けられた。

「では、オラクルの動きを貴方はどう見ていますか？そして彼らに指示を出しているのは誰だと思いますか？」

その言い方や雰囲気から、どうやら僕も黒幕候補に入っているらしい。

「実行部隊を指揮しているのはタルタロスにいたことから六神将ですが、六神将に指示を出しているのは大詠師モースか、主席総長のヴァン、もしくは両者が判断しかねます」

モースの目的は間違いなく預言の遵守。ヴァンの目的はそれを超えたところにあるだろうが、詳細は今をもってしても不明。ヴァンがモースを利用してするのは確実で、あちこちで妙な動きをしていることも知っている。

しかし、フォミクリーの生みの親であるジェイドとヴァンが結託している可能性もありうるので下手な情報を明かす気はない。

「では、最後に1つ。…貴方の目的は何ですか？」

ジェイドから隠し切れない殺意を微かに感じる。

「預言による犠牲を減らすことです」

導師の頃から変わらない、いや、より強くなった決意。

世界には様々な人が、想いが、営みが、歴史がたくさん存在することをこの2年半で実感した。

「今まで“預言の遵守”という大義の名の下に多くの犠牲が黙認されてきました。僕はそれを少しでも減らしたい。ただそれだけです」

「……つまり、当座あなたの目的は“戦争を止めること”でかま

「ませんか？」

「ええ、元々ピオニー陛下に打診したのは僕ですしね」

僕が答えるとジェイドは小さく息を吐き、肩の力を抜いたようだった。

「……らしくないですね。緊張してたんですか？」

僕は振り返り、苦笑する。

「当然でしょう？正直、あなたを敵に回したくありません」

チーグルの森でのことを言っているらしい。

「まあ、そういうことならいいです。それではバチカルまでよろしく願います」

幾分穏やかな顔でジェイドが言う。

「いえ、バチカルまでは行きませんよ？」

「は？」

ジェイドが呆けたような声を出した。

「ご一緒したいのは山々なんですが、他にも用事があります。海路の入り口、カイツール軍港でお別れすることになるでしょう」

ジェイドは少し考え込むような顔をしたが、ため息を吐いた。

「大事な用なのでしょうね。分かりました。では改めてカイツール軍港までよろしくお願いします」

「こちらこそ」

言いながら僕はジェイドと握手した。

「では、宿に戻りましょう」

そう言って、僕は先に歩き出す。三十路みでじを過ぎた軍人と並んで歩く趣味はない。

side ジェイド

「しかし、あのイオン様がレプリカとは……。言われてみればあなたより体力などの能力が劣化……」

現状のレプリカ技術ではレプリカはどうしてもオリジナルより能力が劣化してしまうのだ。

ビュッ！

突然風が鳴き、気づいた時には私の顎下ギリギリにフェルの手の平が止まっていた。

今の音はフェルの掌底でしたか……。

アンチフォンスロットにかかり、身体能力が低下した今の状態では反応さえ出来なかった。

「イオンをレプリカ扱いしないで下さい。イオンはイオンとしてこの2年半生きてきました。なのに“劣化”しているなどと彼を侮辱することは僕が許しません」

フェルの声は決して大きくなく、むしろ呟く程度の小ささだった。しかし、その言葉に込められた想いは殺気を滲ませるほどに、強い。

「…すみません」

私は冷や汗を掻きながら、それだけ言うのが精一杯だった。

「いえ、僕も過剰反応してすみません」

言いながら、手を下げ、宿に向かって再度歩き出す。

「ただ、彼らにも人格があります。それだけ忘れないで下さい」

歩きながら彼が紡いだ言葉が風に乗り、そして消えた……。

私が為したことは、あのまま彼に殺されても文句は言えなかったでしょうね。

第七話 城峯都市で紡ぐ言葉（後書き）

第七話となりました トイボックスです

しかし、話が進んでないですね……さくさく進めたい気もするんですがなかなか出来ません。どうしても会話パートが多くなるのはご容赦ください。設定が。。。

誤字報告、感想、御意見等、ありましたらよろしくお願ひします

第八話 再会は敵として（前書き）

2つに分けようかとも思ったんですが、中途半端になりそうなので
まとめました。

そしたら文量が結構な量に。

第八話 再会は敵として

時に苛烈に、時に穏やかに。流れ行く水流は様々な表情を見せる
陽の光は水面を輝かせ、周りの景色を鮮やかに写す

「おっ、宝箱発見！おい、ブタザル！火い吹け！」

「はいですよ！久しぶりの出番ですよ〜」

ミュウが火を吹き、宝箱を覆っていたツタが燃える。そして周りも
.....

「.....この」

「ちょっと、ルークにミュウ！不必要なところまで燃やさないで！」

ツタは百歩譲って我慢するとして、自然景観を破壊する1人と1匹
を放っておけようか、いや出来ない。

「良いじゃん！草なんてそのうち生えてくるってーの」

「そうですね〜」

「.....じゃない」

「おい、ルーク！あんまりやりすぎると火事になるぞ？」

ティアとガイがルークを止めようとする間にジェイドとイオンは冷
や汗を流しながら、そつと後ろに下がった。

「へっ！すぐそこに川があるんだから大丈夫だったの！」

「もし火事になってもすぐ消せるですよ！」

騒ぎながらルークは宝箱を開ける。

僕はその後ろにそっと近づく。……ティアとガイも退避したようだ。

「だったら、まずお前らが消えろおおおおお!!!!!!」

「どあああああああ!」

「ですの〜!」

ルークとミュウを川の方に思いっきり投げ飛ばした。

セントビナーを出て、カイツールに向かうために僕達はフーブラス川を訪れた。しかし、橋が落ちており、仕方なく歩いて川を歩くことになったのだ。

川の水量は結構なもので、深いところはどれくらいの深さかわからない。しかし浅いところはせいぜい膝下くらいなので渡ることは出来るが、

「どわっ!」

「ちよっ!ル!」

ポチャン!

足場が良く滑るので注意しないといけない。ついでにしょっちゅうこけるルークの隣は危険だ。今のガイのように巻き込まれる。

「最初にルークを濡らしたのはフェルでしょう?」

「…ジエイド、人のモノローグを読まないでください」

惘然として、ジエイドを睨むと肩を竦められた。全く、油断も隙もありませんね……。

「油断する方が…くっ！」

ボチャン！

言いかけたジエイドを川の深みに投げ飛ばす。

「油断する方が悪いんですね？」

空中で体勢を立て直し足から水面に落ちたジエイドに向かって勝利の笑みを浮かべる。

「…やってくれましたね」

悔しそうに声を絞り出すジエイド。モノローグを読むならそれを利用するだけです

心の中でガッツポーズを取っているとジエイドの周りに第四音素が集まる。まずいつ

「荒れ狂う流れよ……スプラッシュ！」

「飛葉後歩！」

大人気ないジエイドの水系譜術を術技を使って後方に緊急回避。

「よくも避けましたね…以下省略です」

後退した僕に向かって連続して同様の譜術が飛んでくる。

「ちょっと、それは別の世界の技能ですよ!？」

「はっはっは！私に不可能はありません」

高笑いをしながら詠唱を破棄して連続で譜術を放ち続けるジェイドに対して、僕は蛇行しながら走り回った。

「やめる2人とも！うわっ！」

「喧嘩はダメですよ!…ですよ!」

「あーもう、お前らうぜーっての!…どわあ!」

金髪使用人と一応聖獣、赤い髪の間知らずが巻き込まれたようだが無視。僕は意地でも濡れたくない!

「こうしていても埒があきませんね…。なら、」

あの顔は絶対良くないことを思いついた顔だ!!

「蒼き命をたたえし母よ、破断し清冽なる産声を上げよ!アクアレイザー!」

ちよつとおおおお!あんだ、そんな技撃てないはずでしょう!!
心の中で盛大なツッコミを入れつつ、回避……出来ない。

「はっはっはっ!かわしてもかまわないですよ?」

僕がかかせないのを分かっているながらジェイドが笑う。ならっ!

「フェル！？ やめてくれええ！」

“飛葉後歩”で下がりつつ、びしょ濡れの金髪使用人を射線上に投げ飛ばす。

ドバツシャン！！

ガイは水柱に轢かれて吹っ飛んでいった。

「やれやれ、オーバーリミッツも切れてしまいましたか…」

ジエイド肩を竦め、眼鏡のブリッジを上げる。

「“やれやれ”じゃないですよ？色々ツッコミ所がありますが…と
りあえず最後の一撃みたいなことは今後しないで下さい」

最後の一撃も十分回避は可能だったが、僕の後ろにはティアとイオンがいたのだ。回避すれば確実に2人が被害にあっていただろう。

「非戦闘員を巻き込もうとするとはどういう見ですか？非人道的
です！」

「ガイを盾にした人の台詞ではないと思いますが？」

「彼は戦闘員ですから。名誉の戦死で二階級特進です」

「部下を盾にするような行為は軍法会議ものですよ？」

「死人に口無しです。会議では“彼は祖国のために勇敢に戦いました”と証言しましょう」

side ルーク

「……おい、良いのかよ？ガイ。何か2人で凄いこと言い合ってるぞ？」

2人から少し離れたところに俺達は避難していた。

俺、ブタザル、ガイのは全身ずぶ濡れ。一方ティアとイオンは川を普通に渡っただけなので膝下まで濡れている程度だ。

「下手にツツコミに行くと傷口が開きそうだからやめとく……」

ガイはティアにファーストエイドをかけてもらいながら小さく呟いた。ガイが小さく見えるのは濡れて髪が張り付いているせいじゃねえと思う。

「ははは……。災難ですね。ガイ……」

イオンの台詞も過去形でないところがなんとも生々しい。

「はい、これで終わり。さて、ちょっと一言言ってくるわ」

ティアは治療を終えると未だに言い合っているフェル達の元に歩いていった。

「…なあ、ティアに何か言われたくらいであるの2人がやめるのか？」

「少なくともフェルはティアの事を気遣っているようですし、案外上手くいくかもしれませんよ？」

俺の疑問にイオンが答える。

しばらくすると3人がこっちに歩いてきた。見たところもう言い争

ってはいないようだ。ひょっとして上手くいったのか？

「ええと、フェル達はルークとガイの能力を見ていたんですって。なんでも、いざという時にどれくらい危機回避能力があるか把握しとく必要があるからって」

「言い包められてないかい！ティア！どわあああああ！」

ボチャン！

ティアがふらつき、前のめりに倒れこみそうになった。

その結果、詰め寄ろうとしていたガイは女性恐怖症を発動し、後ろに下がったため、あえなく水底に……一方ティアはフェルに手を掴まれ、倒れずにすんだ。

「良く滑るので気をつけて下さいね？ティア」

「ええ、ありがとう。フェル」

フェルがティアの背中を押したように見えたが、俺は何も見なかったことにして日記に記すことだけに留めた。

side フェル

そうこうしている間にフーラス川を渡り終えた。

「…………敵です！」

フェルが今までのふざけた様子を改め、鋭く警告の声を上げつつ、イオンを抱きかかえ横に飛ぶ。
次の瞬間、そこをライガが駆け抜けた。

ガイがライガに斬りかかるが、ライガはバックステップで回避する。

「…イオン様は返してもらおう、です…！」

ライガに乗った六神将の一人、妖獣のアリエッタが言う。

「アリエッタ！あなたなら分かってくれるでしょう？戦争は起こしてはならないんです！」

「イオン様の言うこと……アリエッタ聞いてあげたい……です。でも指示にはしたがわなくてはいけない……です」

「アリエッタ！」

イオンの言葉に僕の言葉が重なる。

「あなたは…誰ですか？今イオン様とお話して……ます。邪魔しないで」

「アリエツ…」

六神将妖獣のアリエッタ。

かつて僕が引き取っていた女の子で、家族。

何度も逢いに行こうかと思ったものの、彼女を巻き込むわけにはいかないと思い、導師職を追われて以来逢っていないかった。

そして、今は“敵”として僕の目の前にいる。

アリエッタの言葉を少し悲しく思いながら、イオンに目線で言葉を封じる。

「指示”よりあなた自身はどう思っていますか？」

「えっ？」

僕の言葉の意味がよくわからなかったのだろう、アリエッタは首をかしげた。

「戦争が起きれば多くの罪も無い人が傷つくでしょう。それに関してどう思いますか？」

「アリエッタ…難しいことは分からない、です…」

横に首を振るアリエッタ。

「分からない”のですか？それとも“分かるうとしない”のですか？」

僕は彼女の目を見ながら言葉を重ねる。

前者は考えた上での結論の1つだが、後者は考えようともしていない。

「…そんなこと言われても…」

「なら考えて下さい。考えた上で僕達に敵対するのなら僕が全身全霊を賭して相手をします」

本音を言うとは出来ることなら彼女と戦いたく無い。それでも戦うなら僕がやるしかないだろう。

「難しいことはアリエッタ分らない……です。でもイオン様と一緒にいたい！邪魔するなら……殺す、です！」

「“命”について考えもしないのに殺すなど軽々しく言わないで下さい。それにイオンはいつまでもあなたとられるわけではないありません。イオンに縋るのはやめて、自分で歩こうとしてください」

それが今の僕の彼女に対する願い。彼女ももう16歳。いつまでも誰かの庇護の下にいるわけにはいかない。

どれだけ魔物と心を交わすことが出来ようとも彼女は人間だ。彼女は人として自立しなくてはならない。

「アリエッタは……」

迷うような素振りを彼女が見せた途端、周囲から紫色の煙が吹き上がった。

「いけません！瘴気です！」

ジエイドが警告するとほぼ同時に、アリエッタとライガが気を失う。くそっ！

「危険です！下がって！」

ジェイドの声を後ろに聞きながら、体内の音素を活性化させ、瘴気を少しでも浄化しつつ瘴気の中を突き進む。

そのまま、まずアリエッタを担ぎ、少し離れたところに運ぶ。次にライガを引きずりながらアリエッタの元まで運んだ。

「ゴホ！ガハツ！」

少し吸い込んでしまったようだが、まあ大丈夫だろう…。

ジェイド達を見ると瘴気に囲まれていたが、ティアが譜歌を歌うと不可視の壁が生じ瘴気を遮った。

あれは、ユリアの譜歌？

疑問に思ったがとりあえず、みんなは無事だろう。

アリエッタとライガの様子を見るが、瘴気を吸い込み昏倒してはいるが大丈夫そうだ。僕はふうとため息を吐く。この様子ならそのうち目を覚ますだろう。さて、残る問題は…、

後ろを振り向きつつ、構えを取ると案の定、槍を構えたジェイドが立っていた。

「お、おい、ジェイド。何する気だ？」

ルークがやや怯えながらジェイドに問う。

「止めを刺すんですよ。今なら楽に息の根を止められます」

「無防備な相手にそんな」

「ですが、放っておけば彼女はまた襲ってきます。どいてください、フェル」

ルークの相手を止め、ジェイドは僕に槍を向ける。

「出来ない相談ですね。彼女を止めたのは瘴気です」

「ええ、その通りです。当然あなたが止めたわけではない」

今まで僕の相手は僕の流儀で処理し、ジェイドの相手はジェイドの流儀で処理してきた。だが、今回はどちらも当てはまらない。

「僕からもお願いします。彼女を殺さないで下さい！」

数秒睨み合っていた僕らに声を掛けたのはイオンだった。ジェイドは僕とイオンを交互に見たあと、ため息を吐きつつ槍を収めた。

「…今回は私が引きましょう。ですが、次はありません」

「ええ、分かっています」

「ありがとうございます。ジェイド」

僕も構えを解き、イオンは礼を言った。

そして、僕達はその場を離れた。

第八話 再会は敵として（後書き）

アクアレイザー

TOVの魔術

一列に水を噴射し、ターゲットを高く打ち上げる術

オーバーリミッツ（TOV版）

オーバーリミッツ状態ではすべての術、技を際限なく連続でき、さらに魔術の詠唱時間がなくなる。

ちなみに本文中の「以下省略」はTOVのリタ・モルディオがオーバーリミッツ中に魔術の詠唱破棄するとき用いる台詞。

第九話 軍港襲撃（前書き）

妙なところで、戦闘？です。

しかし、話が進みませんね。

第九話 軍港襲撃

フープラス川を抜けた僕はルーク達と共に国境の砦カイツールに無事到着したのだが、到着してすぐ砦の中から強い第七音素を感じた。そこでジェイドに「後はよろしくお願いします」とだけ言い残して、さっさとその場を離れたのだ。

音素の持ち主は確認は出来なかったが嫌な予感がしたので逃げ出すことにした。

しばらく時間をおいてから自前の通行証で砦を抜け、ここカイツール軍港まで来たのだが……嫌な予感は大当たりだった。

ヴァンの姿をカイツール軍港で確認することになったのだ。もちろん僕は隠れてやり過ごした。さすがに彼に見つかるわけにはいかない。

「移動しますかね。ここまで来ればルーク達もバチカルに戻れるでしょう」

踵を返し、当初の予定通りグランコクマを目指すことにする。セントビナーで辻馬車を拾えばいいだろう。

「……と思ったんですけど、嫌なお客さんのご登場ですか」

前方の空を黒く染める影。嘶きが木霊する。

「早々に逃したツケを払うことになるとは」

苦い思いを抱えつつ、僕はグローブからアイテムを二つ取り出した。

このタイミングで軍港を襲ってくるなら狙いは移動用の船？しかし、ヴァンもここにいますし、妙ですね。

いまいち狙いが解らない。イオンを確保したいなら警備の兵が詰めているここより、海上で襲った方がまだ成功確率は上だろう。

「とにかく、この場を切り抜けましょう」

取りだしたアイテムのうち一つを近づいてきた魔物の群れに向かって投げつける。そして群れの中心付近で輝き、魔物 グリフォン達は動きを止めた。

「我を取り巻く六つの星よ、万物を阻む光の盾となれ バリアブルヘキサ」

詠唱と同時に手に持ったもう一つのアイテムが大気に消え、不可視の壁が魔物の行く手を阻む。

最初のアイテムはアワーグラス。一定時間対象の体感時間を止める効果がある。

二つ目は超高純度のマナの欠片。譜術の触媒効果に優れ、詠唱時間を短縮出来る。

二つとも恐ろしく貴重で高価だが、今は気にしていられない。……

気にしないっいたら気にしない！気にしてたまるか！！

「浮き足立つな！負傷者の救助を優先しつつ、戦えるものは迎撃用意！！」

異常を察知し、指揮所からヴァンが飛び出してきた。そのまますぐにキムラスカ兵に檄を飛ばす。

キムラスカ兵達は突然の事態に戸惑いを感じながらも戦闘態勢を取る。

魔物よりも警備のキムラスカ兵の方が多い。冷静に組織戦を取れば負けはないだろう。

ヴァンは鋭い視線であたりを見回しているが、譜術を使ってすぐに僕は物陰に移動している。

「光の鉄槌…リミテッド」

そこに魔物の後方から光が走った。光は譜術の壁をあっさり打ち抜き、そのまま一隻の船の機関部に突き刺さった。

さすがに防御力が足りなかったようだ。

とはいえ、そうやすやすと船を沈めさせませんよ？

確かにエンジン部にダメージを負わされたが、船は爆散したわけではないので修理は出来るはずだ。

すると、アリエッタを乗せたグリフォンより一回り大きい魔物であ

るフレスベルクが急降下してきた。動きを止めていないグリフォン達もアリエッタに続く。

狙いは“船員”ですか

船は譜術のガードによりそう簡単に沈まない。しかしそれを動かす船員達が居なくては船は動かない。

「焼き尽くせ！シアリング・ソロウ！」

周囲の炎から音素を集め、火球をアリエッタに投げつける。

「…っ！避けて…！」

不意を突かれたアリエッタだったが、素早く指示を出しフレスベルクが急上昇させ、火球から逃れた。

一方僕はさっさと移動する。繰り返しになるがヴァンに見つかるわけにはいかないのだ。

「アリエッタ！誰の許しを得てこんなことをしている…！」

ヴァンはシアリング・ソロウの発射地点に視線を送ったものの、先にアリエッタを止めることを優先したようだ。

「総長……ごめんなさい……。アッシュに頼まれて……」
「アッシュだと……」

ヴァンが驚きを示した。

「…何だよ、これは！」

そこに第三者の声が響き渡る。

声の方に視線だけを向けると、軍港の入り口から見知った一団が入ってきたところだった。

タイミングの悪いっ！しかも何故に大声を出す！？

黙って援護すれば良いものを不用心にルークが大声を上げたようだ。そんなルーク達を見つけたアリエッタは即座にフレスベルクで飛んでいく。

「ルークー！！」

慌てて僕も物陰を伝いながら走り出すが、如何せん速度が違いすぎた。

ルークを庇うようにガイとティアが前に出て、迎撃体制を取る。

合わせてジェイドとツインテールの女の子がイオンを連れて後退した。

「光の鉄槌…リミテッド！」

アリエッタが放った光によってガイが、フレスベルクの羽の一撃でティアが弾き飛ばされた。

フレスベルクは駆け抜けながらルークを鉤爪で捕らえ、そのまま上空へ舞う。

「この人を返して欲しかったらコーラル城へ来い……です。来ないとこの人…殺す……です」

それだけ言い捨て、アリエッタは飛んで行ってしまった。

残されたみんなはヴァンと言いつつ合っていたが、僕は無言で、グロブから地図を取りだした。

コーラル城の位置を確認し、さっさと歩き出す。

下手な長居は無用だ。

さて、狙いはルークか。それともイオンの護衛を分散させることか。

どっちにしるこのままアリエッタを放置する気はない。

アリエッタを逃がしたのは僕の責任なのだから。

第九話 軍港襲撃（後書き）

マナの欠片

TOAの交易品。超自然的な力の権化ともいえるもの。力の流れを変調させる、高密度の結晶体。

本文中で補助アイテムとして使ってますが、そんな効力はありませんので、あしからず

第十話 コーラル城 前編(前書き)

ギャグパートを挟んでるせいか、ストーリーが進まないですね

第十話 コーラル城 前編

雑草に覆われた庭。錆び付き、寂びついた城門

門から扉まで延びる所々ひび割れた石畳

城の外壁は風雨に晒され、つる草が絡みつき、雰囲気に合わせてるように太陽は姿を消し、厚い雲が世界を薄暗く彩っている

苔むした門をくぐる。

長い間人が足を踏み入っていないのだろう。こういうところは絶好の魔物の住処と化す。

「先に進むのは少し面倒になりそうですし、仕方ないですか」

壁を背にし、僕は座り込んだ。

ルークを巻き込んでしまい責任を感じていたティアとルークをマルクトまで捜しに来たガイがルークを放置することなど無いだろう。

キムラスカに好印象を与え、和平交渉を進めやすくするためにジエイドも動きそうだ。

またイオンはその優しい人柄と、アリエッタのことで責任を感じているだろうことから救出を求めるだろう。そうすれば自動的に導師守護役と思われたツインテールの少女も付いて来るだろう。

しとしとと降る雨の中、僕はそつとコーラル城を仰ぎ見る。

「打ち捨てられたかつての栄華」といったところですか……」

「おや？ フェルは詩人、いや、景観を非常に楽しんでいましたよう
ですし、芸術家といった方が正しいですね」

やってきたジェイドが笑う。馬鹿にされているようで気に食わない。

「悪かったですね。僕の趣味です。芸術や文化は人が生きてきた、
伝えてきた歴史です」

ダアトという檻から出た僕は世界の広さ、深さに感動した。
そして、旅先で色々調べ物をする傍ら、本や絵画などを嗜んできた
のだ。

「別に悪いとは言ってますせんよ？フェルの被害妄想です」

「自分にその気が無くても、時に言葉は人を傷つけます。ジェイド
は相手を思う心を欠いているんじゃないですか？」

「いえいえ、フェルはそのくらいで傷つくような人じゃないでしょ
う？」

「生憎、僕はジェイド程神経が図太くありませんので」

「まさか、あなたには負けますよ。それはともかく、さつさと片付
けましょう」

ジェイドの言葉に僕はゆっくり立ち上がり、先へ進む。

side ティア

ルークを助けにコーラル城に辿り着いた私達は外壁にもたれかかったフェルだった。

「打ち捨てられたかつての栄華」といったところですか……」

私達には視線を向けずコーラル城を見て、ぼつりと呟くフェルを大佐はさっそくからかい始めた

「何でフェルがここにいるのかしら？」

カイツールで別れた彼がここにいる理由がまったく分からない。

「まったくだな。けど旦那は気にしてないどころかあの調子だし」

ガイも首をかしげる。

「まあ、ここにいるってことは私達と同じ目的だと思うわ。フェルがいてくれたら心強いし」

わざわざこんなところに観光しに来ないでしょうし、何より私達を待っていたようだし、間違いないと思う。

「だな。しかし……」

私とガイは顔を見合わせた。思っていることは同じだろう。

絶対に巻き込まれたくないと…。

「ね、ね、あのフェルって人何者なの〜？タルタロスに乗ってたよね？」

「そう言われればアニスはフェルの事知らなかったんだな。カイツールではフェルの奴いなかったし」

アニスの言葉にガイは掌を打ち合わせた。

「そっだよ！きちんと紹介してくれないとね！というわけで、ガイ呼んできて〜！」

アニスは小悪魔的な笑みを浮かべ、どんどん険悪な雰囲気撒き散らしながら進む2人を指差した。

「って、ちょっと待ってくれ！俺にあの間に入れと!？」

絶対に無理だと首を振る。

「大丈夫だよ〜。……たぶん…」

「今小さく“たぶん”って言ったよね？ 魔物でさえあの2人に近づかないんだぞ!？」

魔物はその辺の物陰などあちこちにいる。しかし二人の雰囲気から察せられるせいか辺りに潜んで遠巻きに見ているだけだ。

効果は聖気によって魔物を退けるホーリーボトルに近いが、ベクトルが百八十度違う。近づけば逝気《しょうき》に当てられる。

「うーん、がんばってね、ガイ」

「ちよつと、アニス！」

ギヤアアアア...

私も下手なことを行つて巻き込まれなくなつたけど、さすがにアニスを止めようとしたが遅かつた。

アニスはガイの腕に抱きつき、ガイは女性恐怖症からアニスを振り解いてフェル達の方に走つて逝つた。

そして、ガイの叫び声につられ、辺りに潜んでいた魔物が一斉にフェルとジェイドに飛び掛つた。

当の二人は言い合いを止め、冷静に背中を合わせて、襲い掛かつてくる魔物を拳と槍で振り払う。

そしてジェイドが詠唱に入つたのでその間フェルが牽制し、魔物を近づけさせない。

「燃え盛れ、赤き猛威よ。イラプション！」

地面から炎が吹き上がり、魔物を焼き払う。さらにジェイドの放つた譜術によって集められた第五音素利用し、

「紅蓮襲撃！」

フェルが炎を纏った蹴りで残りの魔物を焼き尽くした。

ちなみにガイは巻き込まれて消し炭と化していた……。

「……アニス？」

私が睨むとアニスは「てへっ」と笑い逃げていった。

「まあ、アニスですから」

ひたすら成り行きを見ていたイオンは苦笑するだけだった。

side フェル

ガイの尊い犠牲？によつてとにかく僕達の口論の幕は下りた。そして、ガイの怪我もティアが癒し一件落着。

「で、首謀者のアニス？ガイを二重の意味でしかけて何か用ですか？」

ジェイドの言葉にアニスは頬を膨らませた。

「ぶー、首謀者なんで酷いですよ。っていつかけしかけられてるって分かっててガイを巻き込んだんですか？」

「実行犯はガイですから。こんな所で騒げば魔物が寄ってくるのは当然だというのに」

ジェイドはやれやれと肩をすくめた。

「ま、それは良いです。それより用があるのはフェルさんの方です」
アニスはジェイドから僕に向き直り、笑顔を浮かべた。

「導師守護役のアニス・タトリン奏長です！よろしく〜」

「すみません、挨拶が遅れました。フェル・フォーヘンです。敬称はいらないので呼び捨てで構いません」

僕も笑顔を浮かべながら答える。

もつとも“今のイオン”の導師守護役である以上、モースやヴァンと繋がっている可能性が高く、油断は出来ない。

「分かりました。ところでずっと気になっていたんだけどフェルってイオン様にそっくりですよ〜？」

質問というより興味の割合が大きいようだ。ということはアニスはイオンがレプリカ（この言い方は嫌いだ）だと知らないのだろうか？

イオンはうるたえた様な表情をし、ジェイドは目を細めた。

「確かにそっくりだよな」

「ええ、本当に」

ガイとティアも同意する。やはり気になってはいたようだ。

「ええっと、それは…」

「でしょう？それが縁でイオンと友人になれたんですよ」

イオンを遮り、あえて彼女らの疑問を肯定する。

「もっとも髪の色とか声は違いますけどね。初対面の時にまるで兄弟のみたいって言われましたよ」

その上で、イオンとの相違点を挙げる。

「ええ、僕にとっては本当の兄のような存在です」

イオンの笑みは話を合わせているというより、本当にそう思っているようで少し面映い。

「はいはい、いつまでもこんなところで遊んでないでルークを助けにいきますよ？」

ジエイドが手を叩き、会話を止める。

これで僕に対する話は終わった。

「しかし、ルークもここによくよく縁があるな……」

「どういふことなの？」

ガイの呟きにティアが反応した。

「ん？ここは昔フアブレ家の別荘だったんだ。そして誘拐されたルークが発見された場所さ」

「やっぱー！ここが別荘なんてやっぱりルーク様ってお金持ち！…
…ところで誘拐ってどうということなの？」

表情を改めてアニスが訊いた。

「ルークは七年前マルクトに誘拐されたんだ。その時のショックで
以前の記憶を失っている」

「記憶って犯人の顔とか誘拐されたときの記憶ですか？」

僕はガイ達の会話を流し聞きしていたが気になる言葉があったので
訊いた。

「いや、以前の記憶全部さ。旦那様や家族のこと、それまでの思い
出、言葉や自分自身のことさえ全てだ。発見された時は赤ん坊と変
わらない状態だったらしい」

まさかという疑念が確信に変わっていく。隣でジェイドの顔色も変
わっていた。

「見つかった時、頭に大怪我を負っていませんでしたか？」

まず有り得ないと思うが可能性は全て潰しておく。

「いや、無傷だったと聞いているが？」

僕は「そうですか」と小さく答えた。

記憶とは知識や体の動かし方、思い出などそれぞれ脳の別々の領域
に保存されている。だから心理的ショックで全ての記憶を失うなど

医学的に有り得ない。仮に全ての記憶を失うとしたら、頭部に大怪我を負って脳が損傷した場合くらいだろうが、それも無い。

だとすると残る可能性は…“元々記憶が無い”。言い換えると生まれればかり。

そして、その条件に当てはまるのは、被験者と全く同じ容姿だが記憶は引き継げない“レプリカ”という存在だけだ。

僕はヴァンが当時何度も訪れていたファブレ家を調査に行った時に、預言に詠まれた“聖なる焔の火”であるルークに出会った。

その後、世界を回り、危険を承知でダアトにも何度か足を運んでいた。

ダアトではルークそっくりの人が“鮮血のアッシュ”として六神将として名を連ねているのを見て、僕はつきりアッシュがルークのレプリカでヴァンの駒だと思い込んでいた。

しかし、記憶に関することから事実とは逆だろう。

アッシュがオリジナルで、ルークがレプリカ。

僕はこの事実をルークに伝えるべきなのか判断出来なかった。

第十話 コーラル城 前編（後書き）

文章が長くなりそうだったので、2話に分けることにしました。
次回はコーラル城でアリエッタ戦とイベントの前倒しです。

ご意見、御感想、お待ちしております

第十一話 コーラル城 後編(前書き)

コーラル城でのイベントを一つスルーしている気がしますが、たぶん気のせいです

第十一話 コーラル城 後編

先に進むと天井に届くほどの巨大な譜業機関と、その内部に捕らわれたルーク、機関の前で腕組みをする仮面をつけた少年の姿があった。

「ルーク!!」

ルークを見つけた瞬間ガイが少年に斬りかかる。

最初の一撃こそ驚き、ガイの剣をかすらせたが少年もすぐに反撃を始める。

僕は2人の攻防を横目にイオンをアニスとジエイドに任せて、ティアと共にルークに駆け寄った。

この譜業機関は確かレプリカ情報を読み取るもの。やはり彼がレプリカですか

僕は苦い思いをしながらコンソールを叩き、ルークの拘束を解いた。

「ルーク、体に異常はない？」

「ああ…、つたく何なんだよ!? あいつらっ!!」

何をされたのか分からず不安と恐怖がない交ぜになった顔をしながら、ルークは中から這い出した。

僕はルークから視線を逸らし、ガイの方を見るとガイは少年 六神将“烈風のシンク”に蹴り飛ばされ、僕の方に吹っ飛んできた。

僕は足腰に力を込め、ガイを受け止めようとしたが、体格差はどうすることも出来ず2人して弾き飛ばされる。

「フエル！」

「ダメです！イオン様！」

僕に駆け寄ろうとしたイオンをアニスが手を引いて止める。

ルークとティアも僕に駆け寄ろうとしたが、ライガとフレスベルクが乱入してきた。

ライガはルーク達に突進して行き、ティアはサイドステップで回避したがルークはライガの体当たりを受け吹き飛ばされた。

ティアが応戦のためにナイフを投げつけたが、かわされ、ライガはルークの首根っこを啜えそのまま走り去る。

一方フレスベルクも、巧みにジェイドの譜術を回避しながらイオンに向かって急降下。

咄嗟にイオンを庇い割って入ったアニスは鉤爪に捕らえられ、そのままさらわれてしまった。

その時「離せ！！ゴラアアッ！！」という叫び声？が聞こえた気がする…。

一方、態勢を立て直した僕の目の前にはシンクが立ちはだかり、拳を突き出してきた。

僕はその拳を右手で取りながら、背中を向けるようにシンクの懐に入り、足を払いつつ投げ飛ばす。つまりは一本背負いだ。

「へえ、やるじゃないか」

投げられたシンクは空中で体制を整え、足から着地した。

「正規の任務じゃないんで、ここは引かせてもらつよ。そうそう、アリエッタなら今頃屋上だよ？振り回されてご苦労さま」

捨て台詞に皮肉を残し、シンクはそのまま去っていった。

シンクの言葉通り、僕達はすぐに屋上に向か：わず屋上に繋がる螺旋階段の踊り場で時間を潰していた。

屋上へは遮る扉などはなく、屋上から「この根暗ツタが！！」「アリエッタ：根暗じゃないもん！！」「だあー、もつうるさいっての！！」など怒鳴り合いが聞こえるが一切無視だ。

ついでに踊り場まで来て「ルークー！！」と大声を上げ、1人で突っ込んでいこうとした過保護な使用人は床で寝ているがそれも無視だ。

「やれやれ、こちらとは対照的に上はにぎやかですね」

ジエイドが苦笑しながら、カップを口に運ぶ。ティアとイオンも僕が入れた紅茶を飲みながら一息ついている。

このカップもティーポットも、茶葉もやたらに収納できる便利なグローブ内に保存してあったものだ。

「ほんと良い香りのお茶ね。でも、それよりあとどのくらい掛かりそうなの？」

「ん？あと少し。みんながお茶を飲み終わるくらいには終わります」

別にお茶を振舞いたくてこんなところで休憩していたわけではない。

僕はお茶をしながらグローブの譜陣を使って水を司る第四音素を集めていた。というのも、これからアリエッタと戦うために必要だからだ。もちろん人質について若干心配していたが、上の喧騒を聞く限り何の問題も無かった。

「さて、フェルの作戦を訊いておきたいのですが？」

ジエイドは飲み終えたカップを僕に手渡し、ガイに蹴りを入れて強制的に覚醒させる。

「作戦というほどではありませんが、僕がアリエッタを即効で無力化します。ジエイドはフレズベルク、ガイはライガの相手をお願いします」

ティアとイオンのカップを受け取り、まとめてグローブ内に収める。

「ティアはイオンのガードと2人の援護。アリエッタさえ止めれば、後はどうとでもなります」

僕は十分な音素を集められたのを確認し、肩や足首を軽くほぐす。みんなも準備万端のようだ。

「さて、行きますよ」

僕の掛け声で、全員残りの階段を一気に駆け上がり、屋上に躍り出る。

その勢いのまま、僕はアリエッタ、ジエイドはフレスベルク、ガイはライガにそれぞれ走った。

いきなり走り込んできた僕達にアリエッタは驚き、魔物に指示を出せない。

これも予定通り。人質を取られれば普通一刻も早く助けに来るものだ。そして人質を取っている側も気を張って待っている。

まして、シンクがわざわざアリエッタの居場所を伝えたことから、アリエッタがシンクに伝言を頼んだと見るのが自然だ。

居場所が割れているならすぐに助けに来ると思っていたに違いない。

にもかかわらず、僕達はなかなか現れず、元々それほど集中力が続かないアリエッタが気を張り続けられるはずがなかった。

だからといってアリエッタの性格上、人質を殺すと言う選択肢も取らず、結果人質と口論などという妙な状況になっていた。

こんな状況で彼女がとっさに的確な指示を出せるはずがない。

この隙に即効で決めます

「彼の者達より力を奪い尽くせ、アブソプション」

この譜術は通常、相手の精神力を多少奪う程度だが、あれだけの時間をかけて第四音素を集めたためにその威力は考えられないほど高まっている。

結果、譜術を掛けられたアリエツタは急激に精神力を奪われ、その衝撃で体がふらついている。

アリエツタの恐ろしいところは魔物を操る力とその譜術能力の高さだ。譜術を防いでしまえば、平均以下の体力しかない。

僕はふらつくアリエツタに音素が乗った拳を打ち込み、意識を絶った。

その後、ルークとアニスも合流し、アリエツタが倒されたことで混乱状態になったフレズベルクとライガを各個撃破し、戦闘は終了した。

辺りはオレンジ色に染まり、太陽が姿を消し始める時刻。

僕はアリエツタをイオンに任せ、またしてもカイツール軍港まで走る羽目になった。というのも戦闘後コーラル城内部に例の第七音素の持ち主、ヴァンの気配がしたためだ。

そこで、カイツール軍港で一泊することと、十七時にルーク1人でカイツール軍港の入り口まで来るようにジェイドに伝言した。

「言われたとおり一人で来たけど、何か用か？」

気配を探ったが第七音素は宿。周りにも誰もいないようだ。

「すみませんね、ルーク。手間を掛けて」

「いや、かまわねーけど」

呼び出したは良いものの正直この期に及んで僕は真実をルークに告げるべきか結論が出せていなかった。

そこで選択肢をルークに委ねることにした。

「ルーク、これから貴方に伝えることは貴方自身の根幹に繋がることです。知れば間違いなく否定したくなるでしょう。ただ、知らなければいずれ後悔するかもしれません」

ルークは驚き、僕の顔を凝視した。何を言われているのか良く分かっていないのかもしれない。

「それでも知る覚悟があるなら話します。知りたくないならそれも構いません。ただ、自分の選択には責任を持ってください」

.....。

ルークはしばらく、僕の言葉に考え込んだが、頭を掻きながら「とりあえず、聞いとく」と答えた。

「本当に聞きますね？」

ある程度は真剣に悩んだが、途中で諦めたようなルークの回答に僕は念を押した。

「聞くつて。で？」

それでも事の重大さが分かっていないようだが、これ以上伸ばしても仕方がない。

僕はフォミクリーの事、記憶のこと、そして…ルークがレプリカであることを告げた。

「ちょっと待ってくれ！俺がそのレプリカだったのか！？信じられるかよっ！」

「今説明したように、まず間違いありません。ですが、レプリカだろうと今ここにいる貴方は貴方自身です」

予想通り取り乱すルークに僕は言葉を重ねる。

「今の貴方の苦悩や不安、いえ七年前に生まれ今までルーク・フォン・ファブレとして生きてきた貴方は貴方だけのものです。それはオリジナルだろうとレプリカだろうと同じです」

僕はオリジナルとレプリカを差別する気はない。そこにあるのはどちらも1つの命であり、別個のものだと僕は思う。

大切なはその人の生き方だろう。

「黙れ、黙れ、黙れ！！ ようは俺が偽者ってことなんだろうが！信じねえ、信じてたまるか！！」

「偽者ではありません。ルークはルーク、それは変わりません」

自分がレプリカだと告げられた彼の気持ちは僕にはわからない。けれど、

「黙れっつてんだよ！フェルなんてどっか行っちまえ！！もう俺の前に顔を出すな！！」

ルークは僕を睨みつけ、剣さえ向ける。

「…分かりました。僕はこれで失礼します。ただ、最初に言ったように自分の選択には責任を持ってください。下手をすると貴方の選択で多くのものが失われるかもしれません」

ルークに背を向け、外に歩き出す。

「最後に。繰り返しますが、ルークはルークです」

僕は門をくぐり、カイツール軍港を後にした。

“自分は自分” それだけは確かなことだから……。

第十一話 コーラル城 後編（後書き）

これにてフェルはしばらくルーク達一行から離脱です。

アブソプシヨン

TOAの譜術。敵からTP15吸収、味方全員のTPを15回復する。

第一二話 歪な在り方（前書き）

前半は悪乗りしてしまった感がありますが、ご容赦ください。

たぶん今後もやります

第一二話 歪な在り方

窓の外を覆う壮大な滝と七色の架け橋

その力強さと美しさが見る人に畏敬の念を抱かせる

水上帝都グランコクマ　マルクト帝国の首都で大陸の最北端に位置する海上都市。

カイツール軍港を出た僕は辻馬車で当初の予定通り、ここグランコクマを訪れ、謁見の間で陛下を待っていた。

「よお、フェル。予定より遅かったな！」

陛下は左手の指を三本立て「キラッ」とポーズを決め、満面の笑みを浮かべる。

人払いをしてもらい、謁見室には僕と陛下しかいないが他の家臣が見たら……いつもやってそうなので何も言わないだろう。

「年甲斐もなく何やってんですか……」

ちなみに陛下は御年33歳。“皇帝”の役割に徹している時はともかく、普段は城の中で家畜のブウサギを飼育したり、城を抜け出し、一杯引つ掛けに行ったり、「公務かつたるい」とか言いながら日がな一日だらけたりと色々はっちゃけた御方だ。

「いや、この間お前に貰ったマンガに書いてあった」

旅券などを用意する代わりにマルクト領外に僕が出た時は、その名産品やら漫画などの娯楽品を土産として買ってくるように言われており、その中のひとつみたいだ。

「で、気に入ったんですか？」

「気に入ったんだぜ、取っちゃだぜ」

「取りませんよっ!!」

陛下は親指を立て、白い歯を輝かせた。

謁見のたびに思うが、この人にツッコミを入れるのは疲れる。

「ん？お疲れのようだな。一人旅は何かとしんどかっただろう。そんなお前に良い物を用意した」

言いながら陛下は王座の後ろから30?くらいの白くてふわふわしたものを取り出した。まさか…

「これぞ、某過保護としか思えない異世界冒険マンガから作り出した譜業機関!!収納は完璧、部屋を吐き出し、さらに映像付きで俺と通信出来、その上可愛い! お値段マルクト帝国の国庫の約二割!!」

「何考えてんですかッ!」

バツシイイイン!!

僕はグローブから巨大ハリセンを取り出し、思いっきり横に振りぬいた。

不敬罪？相手は皇帝？知るかつ！

「何、著作権に引つかかりそうなもの作ってんですか！？その上と
んだけお金使ってんですか！！」

「痛てて、殴ったね！親父にも…」

「だからマンガから台詞を引用しない！！」

折角なのでもう一度はたいておいた。

「まあ、そう怒るな。これはただのぬいぐるみだ。本物は予算決議
で落とされた」

再度親指を立てて白い歯を輝かせる陛下に、僕は本気でこの人が皇
帝でマルクトは大丈夫なのかと心配になった。

「冗談はさておき、首尾は？」

笑いを浮かべていた目に力が宿り、ふざけた雰囲気が一変する。

「イオンはカイツール軍港から船でバチカルに向かいました」

僕もおふぎけは止める。ここからは世界規模の話だ。

「それより、記憶粒子の放出量を弄られ、当初より各地のパッセー
ジリングはもちません。おそらくあと数年。何かの拍子にどこかの
セフィロトツリーが落ちれば、他も重大な影響を受けます」

僕達の星、惑星オールドランドは現在魔界クリフォートと呼ばれる元々あった大地を地核から発せられる記憶粒子の柱・セフィロツリーと、セフィロツリーが生み出したディバイディングラインという力場の浮力によって上空に浮上させている。

その大地は外郭大地と呼ばれ、僕達が生活しているこの大地のことだ。

魔界ではユリアシティという町以外には液状化した大地と瘴気しかなく、死の世界となっている。

例えるなら、安っぽい中身がスカスカなシュークリーム。カスタードが液状化した大地。その上に空間が空いており、皮が外郭大地。

そしてパッセージリングとは記憶粒子を制御する音機関であり、元々記憶粒子の放出が多い十箇所フォンスロットそれぞれにある。

これが壊れると外郭大地は崩落。当然多くの被害が出るだろう。

「最悪だな…だとするとやはり大地の液状化と瘴気がネックか。対策を練ってはいるが……」

顎に手を当て、難しい顔をする。

「現段階では問題がまだ多い。もう少し時間があれば良かったんだが……」

オールドランドの構造は、預言についてあちこち奔走していた時に知った。

そして、ピオニー陛下に伝え、マルクトで瘴気や外郭大地について研究を進めてもらっていた。

プロジェクトは十年を目処に立てられており、研究途中なのは仕方ない。

「タルタロスでイオンが六神将に捕らえられ、どこかに連れて行かれた」

僕はそのことが気にかかり、グランコクマへ向かう前に、あの時タルタロスがいた地点を中心に聞き込み調査を行い、目撃証言から行き先を知ることが出来た。

そして、第3セフィロトがあるシュレーの丘を訪れ、入り口に施されていたはずのダアト式封呪が解除されているのを確認しつつ中を探索。

結果、パッセージリングを見つけ、各地のパッセージリングの限界と記憶粒子の放出量を増やすよう術式が組まれているのを知った。

「すみません、僕では解除出来なかった…」

「いや、あまり気に病むな。むしろお前さんが気づいてくれたおかげで最低限の対策は打てる。責めるべきはそんな術式を組んだ奴と、外郭大地を作ったことで、安心しきった過去の人間だろう。二千年もあれば対策ぐらい見つかっただろうに」

言いたいことは分かる。過去の人間がきちんと問題点を伝えてくれれば対策も立てられていたかもしれない。それでも…

「…その件については学者連中に任せるしかあるまい。秘密裏にベルケンド、シエリダンにも協力してもらっている」

「そう、ですね。僕では何も出来ない…」

拳を力の限り握り締める。こんなことになるなら学識も深めておくべきだった…。

「預言についてだが、やはりアクセリユスの崩落は止められそうにないか？」

「難しいでしょうね。“聖なる焰の光”はキムラスカ王室に連なる者。しばらく行動を共にして誘拐という手も考えますが、そんなことをすれば戦争になる」

陛下は、「確かに」と小さく頷いた。預言による災害を減らすために戦争の火種を抱き込んで元も子もない。

「ならば民を移動させるしかあるまい。軍を派遣するが…」

「僕も行きます」

間髪入れない僕に陛下はため息を吐いた。

「…止めても無駄だろうな。派遣部隊をまとめるのに2、3日掛かる。それまで休め。宿はこちらで用意しよう」

「分かりました。御厚意に甘えさせてもらいます。それでは失礼します」

一礼し、僕は謁見室をあとにした。

side ピオニー

「……やれやれ」

一人になった謁見室で、俺は大きなため息を吐いた。

「奴は責任感が強すぎるな。あれで14歳か……」

フェルはヴァンの計画の全容を掴めないこと、それ以前にヴァンやモースを止められなかったこと、預言に躍らされる今の世界についてさえ責任を感じているようだ。

だからといって言葉で「お前に責任はない」と諫めようとフェルは決して止まらないだろう。

“一途で真っ直ぐ。妥協を許さず、目的、理想に向かい突き進む”

普通ならそんな生き方は出来ない。

どこかで必ず壁に突き当たり、歩みを止める。

そのことによって周囲を見回し、後ろを振り向き、時に周りの力を借りながら身の丈にあった自分の道を歩く。

しかし、彼は不幸なことに能力が高過ぎた。

壁に当たればその壁を、自身の力で、道具で、他者を使い打ち破る。

一時も立ち止まることなく、ただ突き進む、突き進んでしまう。

それ故に他者を利用、良くて信用することはあっても決して信頼はしない。

共に歩くのではなく、あくまで自分独り。

不器用を通り越して、酷く歪な在り方
…

「今まで誰も“フェル・フォーヘン”の心に触れてこなかったのだろうな。俺も人のことは言えんが…」

自嘲の笑みを浮かべ、俺は今までの自分の行いを省みた。

彼との関係はただの利害関係。彼を今までサポートしてきたが、それはマルクトにとって益があったからに過ぎない。

個人としては彼を好ましく思っている。何とか救ってやりたい。

皇帝としては優秀な駒だと思っている。それ以上の意味はない。

そして、優先すべきは皇帝としての顔。自分の後ろには民がいる。

「結局、俺も奴も役割に縛られているだけだな。その割合が違うだけだ」

「こんな俺でも思い出を共有し、支えてくれる幼馴染がいるというのに。ままならないものだな。」

現在導師イオンについている腹黒で眼鏡な友人を思い浮かべながら、ため息を吐く。

俺は部下を呼び、アグゼリユスへの派遣の準備を指示し始めた。

side フェル

僕は宿のベットに仰向けで寝転がった。

部隊編成が終わるまで2、3日。僕の用意はせいぜいアイテムの買い足しぐらいで、すでに済んでしまった。

ついでに買ってきた文庫本を読もうかと思ったが気分が乗らず、封をしたままテーブルに置いてある。

脳裏に浮かぶのは、しばらく行動を共にしたイオン達のこと。

ティアはこれからどうするのでしょうか…。

ヴァンが暗躍していることを僕は伝えなかった。

ヴァンと繋がっている可能性がゼロではなかった上に、繋がってなかったとしても、ヴァンの計画の全容が分かっている現段階で、いたずらに情報を与えても混乱するだけだと思ったからだ。

ガイは、色々大変でしょうね。

自分がいなくてもジェイドやアニスに弄られ、ルークのお守りが大変だろう。

思わず遠い目をしてしまったが、それもガイのポジション故だ。

アニスには何かあるでしょうね。

まず間違いなくイオンの動きを探るスパイだろう。しかし、裏があるように思う。

ジェイドはみんなを上手くまとめて欲しいですが…。

無理だろう。あの人はむしろ面白がって放っておくタイプだ。丸投げだからタチが悪い。

イオンは立派な“導師イオン”になっていましたね。

彼が努力したことはわかるし、彼が引き継いでくれて嬉しく思う。

反面、覚悟していたこととはいえ、かつての自分の役割を奪われた気がする自分も否定出来ない…。

最初は絶望しかなかったのに、いつの間にか僕は“導師イオン”になっていたのか、と。今更ながらそう強く思う。

“フェル”から“導師イオン”に、そして今また“フェル”に…さすがにもう一度“導師イオン”に戻る気はありませんが。我ながら数奇な人生を歩んでると自嘲する。

そして、

ルークはどう動くんでしょね…。

預言では“力を災いとし、キムラスカの武器となって、町と共に消滅す”と詠まれている。

ルークにレプリカだと告げたのは浅慮だったのかもしれない。

ことによると自暴自棄に陥っているだろう。それでも、何も知らずヴァンやキムラスカ王室に踊らされ、結果が預言に詠まれている通り“町と共に消滅す”では悲し過ぎる。

願わくばルークがレプリカであることを乗り越え、自分で未来を選べますように……。

ルークと共に行くことを止め、ルークが過ちを犯す可能性を優先し、その対処に動いている自分が願うのは偽善以外何ものでもない。

それでも僕は、そう願わずにはいられなかった。

第一二話 歪な在り方（後書き）

第一二話となりました。トイボックスです。

PVがぼちぼち10000アクセス、ユニークが2000に届きそうです。

読んでくださった方、本当にありがとうございます。

今のところ記念作品のネタを思いつかないので、特に何か書くことは考えてないのですがご要望あれば何かしたい気もしています。出来るか不明ですが……

その他、誤字報告、感想、御意見等ありましたらお願いします

第一三話 救出作戦（前書き）

中途半端ですが、文量的に二つに切ります

第一三話 救出作戦

死へと導く薄紫の瘴気が街を包み、人々は苦しみ喘ぐ

そんな中でも軽傷者が重傷者を、親が子どもを必死になって看病する姿が尊く見える

瘴気が噴出し、住民に多大な被害が出、預言に“消滅す”と詠まれている鉾山街アクゼリユス。

僕はアスラン・フリングルス少将率いる一個小隊共に救援活動に赴いていた。

アクゼリユスの総人口約一万人に対し、一個小隊とはいかにも少なくな思われるが、これはダアトとキムラス力対策だ。

預言が絡んでいることは本来なら、両者だけに伝えられており、マルクトには伝えられていないはずだった。

しかし、僕が陛下に預言を伝え、内密に軍を派遣してもらったという経緯があり、もしマルクト軍が介入したことがばれると外交上の問題となる。

そこで、アクゼリユスから少し離れた場所まで、タルタロスの同型艦で第五師団所属艦カンペーで移動し、そこから私服姿の一個小隊は民間の辻馬車を使ってここまで来た。

街に到着すると部隊は手はず通り散って行き、重傷者から辻馬車に順次乗せて運び出す。

一方、僕は数人のマルクト兵と共に、まだ中に取り残された人がいるらしい坑道に足を進めた。

「で、何で僕に付いて来るんですか？ アスランさんは部隊の指揮があるでしょう？」

「大丈夫ですよ。ブリーフィングはきちんとやっていますし、私がいなくても部下はきちんと動いてくれます」

言いながらアスランさんは僕の横に並んで歩く。

「いや、だからといって僕に付いて来る必要はないでしょうに」

「陛下にフェル殿を見張っておくようにと命じられましたから。曰く“奴は自分からヤバイことに首を突っ込むからストッパーが必要だ”と」

自覚がある僕は肩をすくめた。しかし、わざわざ“少将”に命じることではないと思う。

「それに、私も個人的に心配ですから」

アスランさんとはマルクト軍基地本部を見学させてもらった時に出会った。

それ以来グランコクマを訪れた時は食事を共にしたり、体術の相手をする中だ。

性格は真面目だが、けして堅苦しくなく、部下にも慕われている。まだ若い少将という地位にある通り、文武において非常に優れている。

最もアスランさんとの対戦成績は26戦26勝と僕が勝ち越しているが。

そして、彼は僕の事情を知っている数少ない人の1人だ。

「そんなお節介ばかり焼いていると婚期逃がしますよ?」

「フェル殿が人のお節介どうこう言えないでしょうに」

アスランさんの言葉に僕が肩をすくめるとアスランさんはほほ笑みを返した。

救助活動が始めてから3日。住民は9割以上搬送し、残った人々も今日中に搬送できるだろう。この3日間での死者は無し。マルクト兵達も疲れは見えるが、その顔は明るい。

そうこうしていると1人の伝令兵がアスランさんの元に走ってきた。

「失礼します!カンペーからの伝令です!オラクルに奪取されたタルタロスが接近中とのことです。到着予定は15:00です」

残り時間は約五時間。住民を搬送し、部隊を撤収させるとなるとギリギリのタイミングだ。

アスランさんは伝令を聞き、部下に作業を急ぐように指示を飛ばした。

「分かりました。アラルに出発準備をさせてください。14:00に撤退します」

了解しましたと敬礼し、伝令兵は駆けて行った。

「何とか間に合いそうですね。…フェル殿？何か考え事ですか？」

「いえ、キムラスカの部隊が見つかっていないと思って…」

僕が言わんとしたことを理解したアスランさんも苦々しい顔をした。

カンペーにはオラクル、キムラスカそれぞれの部隊の接近を探ってもらっていたのだが見つかったのはオラクルだけ。

首都バチカルからキムラスカの部隊が出たのは確認されており、予定ではオラクルとほぼ同時刻に到着するだろうとのことだった。

しかし見つかったのはオラクルのみ。

となると考えられることはキムラスカの部隊は足止めを受けているか、もしくは襲撃を受けたかだ。

キムラスカからはルーク・フォン・ファブレがマルクトとの親善大使として今回アクゼリユスに訪れると発表がされている。

レプリカであるルークが動く以上、彼を創り出したヴァンも何らかの手を打ってくるのは間違いない。

だとすると目撃者を減らすためにもキムラスカの先遣隊は襲撃されたとみる方が妥当だろう。

「“預言”による被害を出さないって誓ったのに……」

感情のままに壁を殴る。何度も、何度も……。

痛みよりも自分への無力さで噛み締めた奥歯が、ギリツと鈍い音を立てた。

「……フェル殿、神ならぬ私達では全てを救うことなど出来ません」

「……ええ、わかっています。わかっています。わかっています。わかっています。わかっています……」

僕は手を留め、目を閉じ、呼吸を落ち着ける。今は嘆くときではない。出来ることをしなければ……。

「ひとつ、やりたいことがあります」

目を開けた僕は、アスランさんに提案を投げかけた。

時刻は15:10。

タルタロスがアクゼリウスに到着した。住民は全員搬送済み、マルクト兵も既に撤退している。

僕は正面からタルタロスに向かう。隣にはアスランさん一緒だ。

「ダアトの方がこんなところで何をされているのですか？」

話し掛けた僕に、タルタロスからオラクル兵が困惑顔で降りてきた。

「無礼な。この方をどなただと心得ているのです！導師イオン様であらせられるぞ！」

アスランさんが声を荒げる。演技も一級品だ。

オラクル兵も慌てて姿勢を正した。

そう、今の僕の格好は“導師イオン”。

象徴的な音叉型の杖も持っている。

一方、アスランさんは“オラクル騎士団情報部”。

念のため黒いサングラスをかけてもらい、最低限、顔を隠してもらっている。

どちらも僕が何かの役に立つかと思い、ダアトから持ってきていた服で、グローブから取り出した。

「これは失礼しました！イオン様はマルクトにさらわれ、キムラスカに引き渡されたと聞いておりましたが、ご無事で何よりです！」

どうやら、タルタロスやキムラスカ兵を襲ったのは“導師イオン”の救出のためだったようだ。やはり、六神将は正確な事情を説明していないのだろう。

「ええ、心配かけましたね。僕は無事です。情報部からアクゼリユスの件を聞き、無理を言って慰問に来たのですが…様子がおかしいですね」

「はっ！我々もたつた今到着したばかりですが、街が静か過ぎると思います」

それはそうだろう、誰もいないのだから。

「ひょっとすると自主的に避難したのかもしれないですね。ところで貴方達はどのような指示を受けているのですか？」

「それが…任務明けでヴァン謡将がこちらに向かわれておりまして、指示を待っているところです」

オラクル兵は視線を彷徨わせた。

「わかりました。少し休ませてもらっても構いませんか？あと、僕のことはヴァンには内密にお願いします。それとヴァンが貴方達に指示を言い渡したら僕に教えてください」

「はあ、構いませんが、何でまた？」

「“導師イオン”の命に逆らうつもりですか！それとも全てを話さないと指示に従えないとでも？」

困惑を浮かべるオラクル兵にアスランさんは一喝した。

「いえ、申し訳ありません！すぐにお部屋にご案内します！」

「それと、脱出艇の発進準備も内密にお願いします」

僕の指示に再度困惑顔を浮かべたが、アスランさんに睨まれ、オラクル兵は何も言わなかった。

とりあえず、潜入成功。

タルタロスの一室で一息つきながら、僕は肩を回す。久しぶりにこの格好をすると変に肩が凝る。

「それで、これからどうするんです?」

「ヴァンはおそらくイオンとルークを連れてパッセージリングに向かうでしょう。その間に、タルタロスの脱出艇でオラクル兵に撤退してもらいます」

タルタロスそのものを動かしたいが、ティア達のことを考えると助けるのは魔界に落ちてからになる。その時フロート機能があるタルタロスがないと困る。

崩落に巻き込まれて命を落とす可能性もあるが、ティアにはユリアの譜歌がある。あれならば落下の衝撃を消すことが出来るはずだ。他のみんなも彼女と行動を共にする可能性が高い。

上手くいかないかもしれないが、少しでも多くの人を救うには他に方法がない……。

コンコン

「失礼します！ 先程ヴァン謡将が到着され、第14坑道に向かわれました。また、我々への指示は“タルタロスで待機せよ”です」
伝令を聞き、ギリツと異音が鳴るくらいに歯を食いしばった。

崩落するアクゼリユスで“待機”。それは“死ね”と同意だ。

タルタロスの件をうやむやにするつもりなのか、それとも他に意図があるのか知らないが……ふざけるなッ！！

怒りに吞まれそうになったが、アスランさんが僕の肩を優しく叩いて首を振る。そのおかげでどうにか気を落ち着けることが出来た。

「わかりました。でしたら、タルタロスの脱出艇で乗員はすぐに撤退して下さい。ここから少し北上したところにマルクト所属艦が待機しているので、保護してもらって下さい」

「は？……いえ、了解しました。すぐに撤退します！」

オラクル兵は一瞬、僕の言葉に聞き返そうとしたが、アスランさんに睨まれ即座に走っていった。その後、艦内放送で撤退指示が流れた。

とにかく、これでタルタロスにいるオラクル兵は助かるだろう。今回はこれが精一杯だ。

僕とアスランさんはタルタロスを制御するために、艦橋に向かった。

タルタロスは至る所がオートメイション化されており、動かすだけ

なら1人2人で事足りるよう造られている。

艦橋に到着すると、そこには既に誰もいなかった。素直に撤退してくれたのだろう。

「アスランさんは出力調整を。崩落後の操舵は僕が引き受けます」
当然のことだが、外郭大地が落ちればタルタロスも落ちるしかない。そこで、フロート機能の出力を制御し、落下速度を減速しつつ、魔界に軟着陸する予定だ。計算上問題ないと思うが、結局は出たとこ勝負になる。

「今更ながらアスランさんもこんな博打に乗る気になりましたね」

「まあ、不可能ではありませんしね。それに…分の悪い賭けは嫌いじゃないんで」

そう言って、アスランさんは笑う。全くこの人もよくやる…。

「イオン様っ!!!」

僕が苦笑していると、後ろから声を掛けられた。

第一四話 再会（前書き）

文量的にはそう多くないのですが、口調のせいか、私には苦手な夕
イプなせいかわ結構時間食いました。

第一四話 再会

驚いて振り返るとぬいぐるみを抱えたアリエッタが1人で立っていた。

何故ここに！？彼女はダアトで謹慎処分を受けていると聞いていたのに。

混乱する僕に対して、アスランさんはアリエッタに気づかれぬよう袖口から短刀を取り出した。

「兵隊さんがイオン様の命令で撤退だつて教えて……くれて。それで、アリエッタ……イオン様に会いたくて……」

瞳に涙を溜めながら途切れ途切れに言葉を紡ぐアリエッタ。

放っておいた罪悪感で胸が締め付けられるが、今はタイミングが悪い。

「……あなた、イオン様じゃない……です……!」

安堵の表情を浮かべていたアリエッタが表情を変え、音素が集まり始まる。

僕の格好は“導師イオン”だが、髪の色などは当然違う。六神将が崩落するはずのここにいるはずがないと高を括っていた。

「アスランさんはそのまま出力調整を続けて！ 時間がない……! 彼女は僕が抑えます」

短刀で斬り掛かるうとしたアスランさんを制しながら、アリエッタのところまで走る。

艦橋は広く、入り口のアリエッタとは微妙に距離がある。

しかも、タイミング悪く、近くで大きな音素を感じた。おそらくあれが崩壊を引き起こす！

「光の鉄槌…リミテッド！」

光が走る。回避は出来るが、ここで下手に避けて計器を壊すわけにはいかない。

「神竜撃…！」

迫りくる光に対して、僕は音素を込めた右ストレートを放ち、相殺した。

代償に衝撃で右手が痺れて、まともに動きそうもないが構っていられないっ！

「そんな！…だったら、歪められし扉…きゃあっ！」

第一音素を集めて譜術を放とうとしたが足場が揺れ、アリエッタは集中を乱してしまった。

失敗した譜術は暴発し、術者であるアリエッタに襲い掛かる。

「アリエッタ…！」

僕は叫びながら、アリエッタを突き飛ばした。今は敵だが、僕はアリエッタに傷ついてほしくない。

空中に不定形の第一音素による闇の球体が浮かび上がる。僕は衝撃に襲われ、不自然に息が漏れた。けれど、歯を食いしばり、何とか踏みとどまる。

「はあ、はあ…ッ、アリエッタ、攻撃を…、止めて、下さい…ッ！」

「な…んで？ どうして、アリエッタを助けた、です…？ そんな怪我までして…」

困惑し、ぬいぐるみをぎゅっと抱きしめるアリエッタに僕は笑いかけ、頭を撫でる。

「え…？」

「あなたに、傷ついてほしくないからです」

戸惑うアリエッタに僕は言葉を重ねる。久しぶりに撫でたアリエッタの髪は少し硬かった。

「え…、イオン…様？ でも……違う…イオン様じゃない。けど、けど……」

僕は混乱する彼女の背をぽんぽんと叩く。

「……アリエッタの知ってるイオン様です」

涙を流しながら、アリエッタは僕に抱きついてきた。

side アリエッタ

二年半前に突然導師守護役を解任された時は、ショックだった。

何かイオン様に迷惑をかけただろうか？……たくさんたくさん迷惑をかけた。

アリエッタはお仕事を覚えるのが遅くて、何度も何度もイオン様に教えてもらった。

だれど、上手く出来なくて…失敗ばかり。他の人に何回も何回も怒られた。

その度にイオン様が庇ってくれた。

それが嬉しくて、でもちよっとくやしくて、何かしようところがんばったけど…何も出来なかった。

イオン様は私の目から見てもたくさんのお仕事をしていて、いつも疲れているみたいだった。

だれど、アリエッタの前では弱音ひとつ言わないで、アリエッタが「大丈夫…です、…？」と訊くといつも笑いかけて、頭を撫でてくれた。

それが嬉しくて、でもちよっと悲しくて……

何か出来ることを探したけど…アリエッタに出来ることなんて、なかった……。

だから解任された時、イオン様に謝ることしか出来なかった。

だれど、イオン様は会ってくれなかった。

すぐに次の導師守護役が選ばれて、それがアニスだと聞いて、悔しくて、悲しくて…。

イオン様の隣にはアリエッタじゃなくて、アニスがいて、悲しくて憎かった。

アニスがいない時、アリエッタは会いに行った。

けれど、イオン様はアリエッタを避けているようで、アリエッタの知っているイオン様じゃないみたいだった。

アリエッタはイオン様に認めてもらえるように、ヴァン謡将やりグレットにお仕事を教えてもらい、一生懸命がんばった。

…だれど、イオン様はアリエッタを見てくれなかった。

アリエッタはわからなくなった。どうすれば良かったのか、これからどうすれば良いのか…。

だから、ヴァン謡将やりグレットが言うままに従った。考えても何もわからなかったから…。

だれど、「指示」よりあなた自身はどう思っていますか？」と知らない人に言われた。

その言葉は何故か心に残り、そう言った目も知っているような気がした。

だからヴァン謡将に聞いた。アリエッタはどうすれば良いのかわかって…。

すると、ヴァン謡将は「タルタロスでアクゼリユスに行くように」と指示をした。

そこでアリエッタはイオン様の格好をした人を見つけた。

イオン様を汚されたような気がして、攻撃したけど避けられた。もう一度攻撃したら、突然揺れて失敗してしまった。

痛いのはイヤ……です。

そう思ったときには突き飛ばされていた。イオン様の格好をした人はアリエッタの代わりに怪我をして、助けてくれた。

何で助けてくれたのか訊くと「あなたに傷ついて欲しくないからです」と答えて、アリエッタに笑いかけて、頭を撫でてくれた。

涙が出る、あとからあとから……

嬉しい、嬉しくて嬉しくて仕方ない…。

だって、この人がアリエッタの知っているイオン様だったから。

やっとイオン様の隣に帰って来れた……です

第一四話 再会（後書き）

第一四話となりました。トイボックスです。

しかし、私には書きにくいキャラの筆頭ですね、アリエッタは。心情のトレースが。。。

逆に描きやすいのはピオニー陛下。やりたいただけやれますし。

そして案外苦手なのがフェルという……どうしてこうなったんでしよう？

キャラがぶれないよう注意しながら頑張ります

第一五話 それぞれの責任（前書き）

シリアスです。

アクゼリユス崩壊はルークの浅慮がトリガーですし、ルークの態度はあんまりかと思えます。

とはいえ、ルークだけを責めればそれで済むかということ、そうではないと個人的には思うんですよね。

というかイオンもこっさりダアト式譜術解説してますし……

第一五話 それぞれの責任

崩れ行く建物。落ちていく大地

轟音と共に、全てが薄紫に染まる奈落へと堕ちていく…

「…イオン…様？」

泣きじゃくるアリエッタを引き剥がし、コンソールに向かう。

隣ではアスランさんが忙しなくパネルを叩いていた。

アリエッタを止めたとはいえ、タルタロスは崩落する大地に巻き込まれ、現在魔界に向かって落下中。

落下速度はフロート機能によってかなり下がっているため、このまま着地出来れば助かるだろう。

しかし周囲は落下物の嵐。譜術障壁を張っているとはいえ、このままでは間違いなく圧壊する。

僕も制御パネルを叩き、機体の操舵と並列し、各砲座を制御、回避不能な破片を打ち落とす。

さっきの譜術で体中が痛むが、ここで集中力を欠くわけにはいかない。

「…癒しの光よ、ヒール」

第七音素が渦巻き、傷が癒えていく。

「何も出来ないけど…イオン様、頑張つて……です」

「いいえ、おかげで集中できます。ここは任せてください」

僕は声を震わせるアリエッタに笑いかけ、パネルを叩き続ける。アリエッタの期待に応えるためにもここで下手を打てない。

「羨ましいですね。応援してくれる人がいて」

物凄い勢いで指を動かしながらも、アスランさんが軽口を叩く。

「お相手いないんですか？アスランさんなら引く手数多でしょうに」

だから僕も乗ろう。どんな窮地でもわずかに余裕を残すことで、適度に力を抜くことが出来る。

「パーティーやら見合いやらには行かされてるんですが、なかなか理想の女性に合えないんですよね」

「理想の女性ですか。早く見つけてくださいね？」

魔界の液状化した大地が近づいてきた。

「焦ってどうなるものでもないでしょう？」

アスランさんは静かな笑みを浮かべる。

「それもそうですね。ですが“ここぞ”ってときは、ですね？」

僕も同じような笑みを浮かべる。

「ええ。だから……」

だからこんなところで死ねない

アスランさんの言葉の後を僕も心の中で続けた。

船体が液状化した大地に着地すると同時に、瓦礫から逃れるために急速後退。

その間もぶつかりそうな破片を片っ端から撃つ落とす。

そして僕は大きく息を吐いた。

「離脱成功。やりましたね」

「ええ、上手く行ってよかった」

アスランさんが右手を上げるので、僕も右手でハイタッチを交わす。

「イオン様…すごい……です」

そこにアリエッタが抱きついてきたので、僕は苦笑しながら抱きとめた。

「ここらから、僕だけの力じゃなくてアスランさんがいたから上手くいったんですよ？ ほら、言うことがあるでしょう？」

アリエッタを引き離し、彼女の頭をばんばんと軽く叩く。

「ありがとうございます……です」

「はい、良く出来ました」

きちんとお礼が言えたアリエッタの頭を撫でる。

「いえ、最善を尽くしただけですから。それより、フェル殿」

「イオン様、“フェル”って？それに…アリエッタ訊きたいことが…たくさんある……です」

アスランさんを遮り、アリエッタが尋ねる。その目は不安からか揺れていた。

「今は“フェル・フォーヘン”と名乗ってます。それと、今は説明してる暇がないので少し待ってください。で、アスランさん何ですか？」

アリエッタは少し不満そうな顔をしていたが、とりあえず退いてくれた。

「レーダーに反応です。数は七。彼らも無事だったみたいです」

「一応、注意しながら砲弾を打っていましたが、無事で良かった。

…反応は七で間違いありませんか？」

「ええ、間違いありませんが？」

ティア、ジェイド、ガイ、イオン、アニスの五人は間違いのないとして、一つはルークでしょうね…。

「預言では“消滅す”と詠まれていたが、僕という前例もあり、生き残っていてもおかしくない。あと一つはヴァンが坑道に連れて行ったオラクル兵…？」

「とにかく、回収しましょう。放っておくと危ない」

僕はタルタロスを反応があった地点に向けた。

……移動中にリーダーから一つ反応が消えた。

崩落した外殻大地の上で途方にくれていたルーク達を回収し、魔界唯一の都市ユリアシティに進路を取る。

操舵はアスランさんに任せ、僕は甲板でルーク達と顔を合わせていた。ちなみに説明が面倒なので、僕は普段の格好に着替え、アリエツタはアスランさんがいる艦橋に置いてきた。

「みんな無事で何よりです」

「フェル!？」

ジェイドとナタリア王女以外が声を合わせた。

アクセリユスの崩落、ここ魔界の様子、そこに現れたタルタロス、そしてカイツールで別れた僕の登場、驚くのが普通だろう。

驚かない普通じゃない人もいます…。

「いえいえ、私も十分驚いてますよ?とにかく、助けて下さってあ

りがとうございます」

相変わらず人の心を読んでくる人だと僕は苦笑した。

「まずはお互いの状況の説明をしましょう、話はそれからです」

僕が切り出し、まずオールドランドの構造、別れてから今までの経緯を説明しつつ、ルークの様子を窺う。ルークの顔色は悪く、指先が震え、不安や恐怖に苛まれているようだった。

「なるほど、フェルの事情は分かりました。アクセリユスの住民も無事だったとは不幸中の幸いですね。さて……」

ジェイドが尋問するかのような目をルークに向けた。みんなもルークを見たが、決して好意的な目ではない。

移動し、僕は艦橋につながる扉を背もたれにしながら、彼らの様子を見る。

視線に怯みながら、ルークがアクセリユスに到着してからのことを話し始めた。

要約すると、みんなと別れた後、ヴァンとイオンと共にパッセージリングまで向かったらしい。

そしてヴァンの指示でイオンが入り口のダート式封呪を、ルークがあらゆる物質を分解可能な超振動でパッセージリングそのものを破壊した。

そのことによってアクセリユスが崩壊を引き起こしたとのことだっ

た。

また、ジェイド達は途中でアッシュによってルーク達のことを知り、慌てて追いかけたが崩壊に間に合わなかったらしい。

ちなみにナタリア王女は自主的にアクゼリユスに向かうルーク達についてきたとのことだった。

「……俺は……俺は悪くねえぞ。だって、師匠《せんせい》が言ったんだ……。そうだ、師匠がやれって！」

徐々にルークの声が大きくなり、同時にみんなの目が冷たくなっていく。

「こんなことになるなんて知らなかった！ 誰も教えてくんなかっただろっ！ それにみんな無事だったんだろ？ だったら良いじゃねえか！」

「…大佐？」

「艦橋に戻ります。…ここにいると馬鹿な発言に苛々させられる」

ルークから視線を外し、ジェイドが歩き出す。

「変わってしまいましたのね……。記憶を失ってしまっただけのあなたはまだで別人のようですね……」

ナタリア王女は失望のため息をついた。

「お、おまえらだって何もできなかったじゃないか！俺ばっか責めるな！」

「あなたの言う通りです。僕は無力だ。だけど……」

「イオン様！こんなサイテーな奴ほつといた方がいいです！」

アニスがイオンの手を引き、移動する

「ルーク…あまり幻滅させないでくれ」

「少しはいいところもあるって思ってたのに……私が馬鹿だったわ」

ガイとティアもそれぞれルークから離れていく。ルークはその度に必死になって自己弁護を計ったがすべて無視されていた。

「…て…い…ですね」

僕は小さく呟く。目の前まで歩いてきたジェイドが「何か言いましたか？」と聞き返した。

「“勝手な言い分ですね”と言っただけですよ」

「そうですね。彼の言い分は頭にくる」

誤解しているが、その意見には賛成だ。もっとも僕は“あなた達の言い分”に対してだが。

「みんなに聞きたいのですが、旅の間“ルークの話”をまともに聞こうとしましたか？」

静かに問う。みんな僕の言いたい事がいまいち分かってないようで怪訝な表情をした。

「ジェイド、旅の間ルークの言葉を馬鹿にせず、拾い上げたり、諫めたり、説明したことがありますか？」

僕は思う。ジェイドはルークをただの世間知らずのお坊ちゃんとして扱い、ルーク個人を見ていなかったと。

「ナタリア王女、ルークに記憶を失う前のルークを押し付けていませんでしたか？」

僕は思う。ナタリア王女は過去のルークばかり見、今のルークを見ていなかったと。

「アニス、ルークの地位に目が眩んでいませんでしたか？」

僕は思う。アニスはルークの地位だけを見、ルーク自身を見ていなかったと。

「ガイ、ルークを甘やかしてばかりではありませんでしたか？」

僕は思う。ガイはルークを守ろうとするあまり、ルークの成長を見ていなかったと。

「ティア、ルークに厳しいことばかり言っていますませんでしたか？」

僕は思う。ティアはルークを巻き込んでしまった責任感からか、ルークの力を見ていなかったと。

みんなは何も言わない。
僕はみんなを見回し、言葉を続ける。

「確かに前もって相談していれば今回の事態は避けられたかもしれない。けれどルークにはそもそも相談できる相手がいなかった。だからヴァン謡将の言葉に従う他なかった。違いますか？」

「フェルの言う通りだ！ 俺には師匠しかいなかった！ 俺が悪かったわけじゃねえ！」

「それも違います。ルーク、みんなを信じようと思いましたか？ それとヴァン謡将の言葉を自分の中で考えましたか？」

僕の問いにルークも黙り込んだ。

「結局、それぞれに落ち度はあった、それだけの話です。ルーク一人を責めて、自分の落ち度から目を背けるのはやめてください。そしてルークは自分の行動から目を背けるのはやめてください」

僕は扉から背中を離し、そのまま扉をくぐる。後ろから誰もついてこなかった。

そのまま艦橋の中に入り、イスに座りつつ、右腕で視界を閉じた。

我ながら偉そうなことを言いましたね…。

元を正せば、ヴァンとモースの暴走を防げなかったかつての僕、ヴ

アンを止められない今の僕の力の無さが招いた事態だ。

そのせいでキムラスカ兵やヴァンに連れられてやってきたオラクル兵は命を落とした。彼らをどうこう言える立場じゃない。

その上、ルークに“信じようと思いましたか？”とは…本当に呆れる……。

僕自身、ルークを信じず、被害を減らすことに終始した。先が予想出来ていただけ、みんなよりよっぽど質が悪い。

そしてこれからの預言も僕の正体も彼らに言うわけにもいかない。ティアやアニスを信じられない……。

僕が出来るのは彼らやマルクトを使いつつ、ヴァンの計画を邪魔する程度。

自分だけ安全なところにいるようでひどく気分が悪い…だからといってヴァンを直接襲っても返り討ちに遭うだろう。

「イオン様……」

「あと少して、ユリアシテイに着きます」

アリエッタが近づこうとした気配を感じたが、アスランさんが止めてくれたようだ。

僕は右腕を下げ、自分の頬を両手で叩き、気分を変える。

強がり得意だ。

「分かりました。それとアリエッタ？ 僕はフェルです」

アリエッタに笑いかける。きちんと、笑えていると思う。

「イオ…フェル様、無理しないで下さい……です」

「大丈夫です。まだ頑張れます。そう、やらないといけません」

こんなところで止めるわけにはいけないのだから。

第一六話 管理者の町で（前書き）

アクゼリユス崩落時にヴァンに連れて行かれたはずのアッシュって
どうしてユリアシティにいたんでしょね？ヴァンがわざわざユリ
アシティまで送ったんでしょ？

そしてアッシュよ、ルークともうちよいまともに話し合おうよ……

アビスはどうも自分独りで決めてしまう人が多くて、相談やら話し
合いをしなかったせいでややこしいことになってた気がします。

第一六話 管理者の町で

ユリアシティ ユリアの預言通りに歴史を導く監視者達の街。

だが僕から言わせてもらえば、世界の腐敗の温床だ。

預言や譜業といった過去の遺産に縋るだけで、自らは何も生み出さうとしない街…。

中には変わった人もいますが…。

ふと、導師時代に協力してくれた人達の顔を思い出した。

キンツ、カツ、キンツ……

そんなことを思いつつ、目の前の戦い…いや、八つ当たりを見る。

この場にいるのは目の前で争っているルークとアッシュ、今にも駆け寄って2人を止めようとするティアと、ただ見ているだけの僕で、4人。

ジェイド達はユリアシティのテオドーロ市長の元にさっさと向かい、アスランさんも同行している。

アリエッタは今もタルタロスで留守番中。

「アリエッタも付いて行きたい…です」と上目遣いに懇願され、少し心が動いたがポーカーフェイスで切り抜けた。

導師時代から思っていたが、本当に僕より年上なんだろうか…。

あれで16歳。オールドランドでは婚姻出来る年齢だが、想像出来ない、それにしたくない。

まあ、僕よりしっかりした人を見つけてきたら考えてもいいですけど…。

アリエッタには幸せな家庭を築いて欲しいものと、気分はすっかり兄か父親だ。

「通牙連破斬！」

脳内で脱線していると、アッシュの連撃が決まり、ルークが盛大に吹っ飛ばされた。

同じ流派だが、オラクル騎士団として数々の任務をこなしてきた“プロ”のアッシュと最近まで屋敷から出たことが無く、型を習っていただけの“アマチュア”のルークでは当然の結果だ。

「はっ！この程度かよ！！この劣化レプリカ野郎。俺は…こんな奴に居場所を奪われたってのか！！」

僕は大きく息を吐いた。よく考えたらここしばらくため息の回数が増えたような気がする…。

「劣化レプリカに分際で調子に乗りやがって、屑がッ！」

アッシュが気を失っているルークを見下し、ティアはルークに駆け寄った。

「ルーク！しっかりして。癒しの力よ、ファーストエイド」

ティアの譜術でルークの傷が癒える。

「アッシュ、やり過ぎよ！」

ティアが睨みつけたが、アッシュは眉間に皺を寄せ、鼻で笑う。

「知るかよ。先に剣を抜いたのはその劣化レプリカ野郎だろうが」
「だからって…」

「まあ、まあティアも落ち着いて」

アッシュの目の前まで歩きつつ、ティアを制した。

「2人が揉めるのは仕方がないことです。アッシュにだって言いたい事はあるでしょうし」

「あなたが、そんなことを言う…なんて…」

笑みを浮かべる僕を見てティアは青い顔をしながら、ルークを引きずって少し離れた。

「居場所も名前も奪われ、恨むのはわかります」

アッシュがそう思うのも無理はないだろう。僕も心のどこかでそう思っていることを否定できない。

「…お前、その顔…まさか、お前もなのか？」

「ええ、僕は元“導師イオン”です」

僕の言葉に「そうか…」と小さく頷いた。

「だからといって彼らを“レプリカ”と蔑むのは傲慢だと思いますよ？ 人は生まれを選ぶことは出来ません。彼らも僕達もそれぞれ心があり、1人の人間であることに変わりはありません」

すつと右足を後ろに引く。

「綺麗事だな。あいつが俺のパチ物であることに変わりはない」

「確かに彼らは僕らの情報を基に創られています。しかし彼らの心は彼らが育んだ彼ら独自のものです」

呼吸と、体内のフォンスロットを整える。

「その心とやらも人様の居場所を奪って得たものだろうが！結局どうあっても奴らはレプリカに過ぎねえよ」

上体を少しひねる。

「…アッシュ？」

「何だよ？」

「歯ああああああ食い縛れやつ!!」

「ぶごはああああ!？」

右の拳を固め、音素を乗せ、腰のひねりを加え、肩を入れつつ、渾身の右ストレートをアッシュの顔面に打ち込んだ。

アッシュは数メートル吹っ飛び、地面を何度かバウンドし、ごろごろ転がり、壁に轟音と共にぶち当たりやっとなまった。

アッシュの事情を考えて、穏便に接しようとしたというのに…。

聞き分けがないのでとりあえず一発殴っておくことにしたのだ。

「…さすがにやり過ぎじゃないかしら？ まったく、治療術を使う私の手間も考えてほしいわ」

肩をすくめるティアに必要ないと僕は手を振る。

「ティアには手間をかけませんよ。これで十分です」

僕はグローブからライフボトルを取り出し、アッシュに向かって投げつけた。

ライフボトルは放物線を描くことなく、一直線にアッシュの頭に直撃、瓶が割れ、中身が降り注ぐ。

「痛つ、てめえ、何しやがる!!」

アツシユ復活。使ったびに思うが、ボトル系にしてもグミ系にしても即効性が高すぎて、副作用がないか気になる。

「何って、あなたが彼らを侮辱するようなことを言うからでしょう？ これでも忠告しましたよ？」

激昂し、アツシユは僕に剣を向けた。

「ふざけるなっ！俺はレプリカ野郎に全てを奪われたんだぞ？今更馴れ合いなどできるか！」

「彼らは奪おうと思ってオリジナルの居場所を奪うわけではありませんせん」

その切っ先を無視して僕はアツシユの目を見つめる。

「オリジナルの居場所に収まった者が、平穩無事で健やかに暮らせると本気で思っているんですか？」

アツシユは訝しげな顔をするだけで何も答えない。

「彼らは周りから“昔のあなたなら”などと比べられ続け、今の自分を認めてもらうことは難しかったはずです。いかんせん能力は低下していますしね」

それは無自覚の悪意であり、彼らに対する存在否定。

そんな環境で過ごせば、イオンのように過度の優しさや責任感、自

己犠牲を育ててしまおうか、逆にルークのように傲慢な態度、他者への見下し、過度の依存、自信の欠如などを招いてもおかしくない。

「彼らも被害者です。悲劇の重さを比べ、どちらが重いかを決めてどうするつもりですか？」

アッシュの物言いはレプリカ云々というより、今まで溜め込んできた負の感情とヴァンを止められなかった焦りや怒りをぶつけているに過ぎないように思う。

「それにレプリカを創るフォミクリーは技術に過ぎません。結局利用した者にその責を問うべきでしょう？」

「…ちっ、とにかくヴァンを追う！それで良いんだろう！…ぐっ、離せ！」

アッシュは舌打ちをして剣を収め、ユリアシティの中に入っていくとしたが、僕が彼の服を掴んだため軽くつんのめった。

「納得したところで、気絶したルークを運んでください。あれはあなたの責です」

僕が笑いかけると、アッシュは舌打ちした。

ぶつくさ文句を言いながらルークを背負ったアッシュを先頭にユリアシティの門を潜った。

「おい、こいつはどこに捨てればいい？」

アツシユの口調は相変わらずだが、これくらいは見逃す。文句があるならいずれルーク自身が言っべきだろう。

「とりあえず、私の部屋に。あとは私が運ぶからアツシユは……」
「女性に重荷を背負わせませんよね？」

ティアの言葉でさっさとルークを下ろそうとするアツシユに釘を刺す。

「ちっ、ならてめえが背負えばいいだろうが！」

「自分より体格がいい人間を背負うなんてしんどいでしょう？ それとも疲れたんですか？」

軽く挑発すると、アツシユはルークを背負いなおした。扱いやすくて僕としてはありがたい。

「…口だけ野郎が！おい、さっさと案内しろ！」

ちなみにルークを背負うことくらい出来る。あくまで“しんどい”と伝えたただけだ。

「こっちよ」

ティアの案内でルークを彼女の部屋のベッドに寝かせ、市長がいる会議室に向かう。

扉を開けると、ユリアシティの市長でティアの祖父に当たるテオドロスを上座にジェイド達が席に着いていた。

「遅かったですね。おや、アッシュも一緒でしたか。とにかくこれで今後のことを話し合えます」

「俺はヴァンを追うために外殻に上がる」

「方法はご存知なのですか？」

「ああ、タルタロスを使う。お前らも手伝え」

僕は話し合うジェイドとアッシュの横を通り過ぎ、テオドロス市長の前に立った。

市長は僕の顔を見て、目を見開いた。

「まさか生きていたとは思いませんでしたよ、“導師イオン”。ヴァンからあなたは二年半前に病気で亡くなられ、混乱を避けるために代役を立てたと聞いていましたから」

周りが驚きの声を上げたが放っておく。

アクセリユスの一件でヴァンも僕の存在に気付いたはずだ。

アクセリユス崩落が詠まれていた秘預言を知っており、なおかつ被害を抑えようとする人間は僕くらいのもものだからだ。

そしてヴァンの計画も動き出し、いつまでも隠れてなどいられない。

「…約束を違えましたね？ アクゼリユスの住民は助けると約束したはずです」

冷静なつもりだったが怒気が少し漏れてしまった。しかし市長は顔色一つ変えない。

「あなたが“導師”であった時の話ですな。現在はあの時とすでに情勢が異なっています。預言遵守のために不確定要素は極力排しただけの話です」

分かっていたことだ。当時政治的なやり取りによって市長に了承させたが、納得など微塵もしていなかったことなど…。

それでも少しは期待した。そして今回も無駄だっただけの話に過ぎない。

「そうですね。今の僕にはあなたにどうこういう力はありませんね」「ええ、今のあなたはただの一般人ですからな」

殴り飛ばしたいが、何の意味もないので止めておく。そんなことよりやることがあった。

「資料の閲覧許可を頂けませんか？」

「…本来ならお断りするところですが、特例として許可します。資料室は好きに使ってください」

「ご厚意、感謝します。それでは失礼します」

ヴァンを何とかしなくてはならないが、パッセージリングや大地の液状化、瘴気などの問題を放っておけない。そしてここでしか調べることが出来ないことだ。

「僕はここに残ります。ヴァンの動きを探るならベルケンドに行く

といいと思います。あそこは彼の拠点ですから」

市長からジェイドとアッシュに視線を動かす。

「あと、アスランさん、すみませんが陛下によりしくお願いします。それと彼女への説明も。彼女が望むならマルクトに連れて行ってあげてください」

固有名詞をあえて出さず、アリエッタのことはジェイド達に知らせないでほしいことを言外に伝える。

「了解しました。彼女のこともお任せを」

伝わったようだ。これで調べ物に専念できる。

僕はそのまま会議室を後にした。

第一七話 かつての自分にさよなら（前書き）

期間が空いてしましまして申し訳ありませんでした

第一七話 かつての自分にさよなら

.....。

アッシュ達がタルタロスで外殻に向かってから数日。

僕は未だにユリアシティに留まっており、いつものように感動がない。

しかも窓から見える景色が悪い！！

ま、魔界だから仕方ないのですが.....。

うーん、と大きく伸びをし、肩を回す。机の上に広げた資料はこれ一通り目を通したことになる。

ここでまとめた資料をグランコクマに持ち帰れば、瘴気や液化化大地解決への大きな一歩となるはずだ。

「イオ...じゃなくて、フェル様、コーヒー入れた...です」

アリエッタがカップを両手に持って資料室に入ってきた。

「様”は余計ですと何度も言ったでしょう？」

苦笑しながら、隣の椅子を引く。

アスランさんにアリエッタのことは任せただが、彼女は自分の意思でここに残ることを選んだ。

説得は試みたものの、その意志は強固で僕も認めざるを得なかったのだ。

ちなみにアリエッタがやったことは目を潤ませて、上目使いに「フェル様は…アリエッタが邪魔、です…？」と言っただけだったりする。

繰り返しになるがアリエッタの方が年上であり、何かいろいろ駄目である。

「気をつける…です。お仕事、終わったですか？」

「ええ、ちょうど片付いたところです。さて、僕の用事は済みましたし、そろそろ外殻に戻ろうかと思いましたが…」

戻り方は市長に聞いており、今すぐにも戻ることは出来る。

しかしルークのことが気にかかる。ルークはアッシュとの戦いで気を失ったまま今も昏睡状態だ。

「アリエッタは…フェルさ…フェルについて行く…です」

彼女は置いて行かれると思ったのか僕の袖を掴んだ。

「ははは、大丈夫ですよ。今度は置いて行ったりしません」

僕は彼女の髪をくしゃっと撫でた。

これまでのことは資料をまとめながらアリエッタには説明した。

その時、彼女の口から「豚も髭も許さない…です…！」と聞こえた
気もしたが、きつと気のせいだと思う。きつと…たぶん…。

「とにかくルークが寝ているティアの部屋に行きましようか」
「です」

タイミングよく目を覚ましてくれているとありがたいんですが
…。

side ルーク

チッ、俺はヴァンを追う。あとはためえで勝手にしやがれ！

その声を最後に何かが切れる音がし、意識が体に戻った。

俺はベットから身を起こし、手を何度か握っては開き、開いては握
ってみる。どうやら自由に動くみたいだ。

「そつだ！セントビナーが危ねえっ！」

慌てて周りを見渡したが、ティアもフェルもない。

「ユリアシテイにいるはずだよな！？どこにいるんだよっ！」

とりあえず目についた扉をくぐってみる。外には淡く光る花畑が広
がっており、ティアが佇んでいた。

「…すげえな。花が光ってる」

花に目を奪われながら、歩くとティアは振り返って俺を見た。

「ルーク、目が覚めたのね。…この花はセレニアの花。魔界で唯一咲く花よ」

「セレニアの花っていうのか…ってそんなことより、俺、外殻大地に戻りたいんだ」

こんなところでゆっくりしている場合じゃなかった。急がないと！

「…いずれは戻るわ。でも、今は…」

そんな暇無いつてのっ！

俺はティアの肩をつかんだ。

「今じゃなきゃ困るんだよ！このままだとセントビナーが崩落するって、アッシュが…」

俺の剣幕に、ティアはたじろいだみたいだった。

「どういうこと？あなた、今まで眠っていたのに…」

ティアが疑問を浮かべる。時間がないってのに！どう説明すればいいんだ？そのまま言えば良いか！

「わかるんだよっ！あいつと俺は繋がってたんだから！」

ティアは少しの間、目を閉じた後、俺を静かに見つめた。

「…それが真実だとして、セントビナーの崩落をどうやって防ぐの？」

「あ、それは……」

そんなこと言われてもわからない。けれど、

「……そんなのわかんねえよ！でも、現に危ないんだ！せめて、俺たちが行かなきゃ……」

side フェル

「そしてまた同じ過ちを繰り返すと？」

扉をくぐり花畑の中に歩を進める。僕の声に二人が振り返った。

「フェル…それに何で六神将がこんなところにいんだよ！」

「すみません、ティア。ノックはしたのですが応答がなかったので勝手に上がりました」

ルークのことより先にティアに謝っておく。そして隣のアリエッタにも頭を下げさせる。

「ううん、それは構わないわ。フェルも用事、終わったのね」

「ええ、おかげさまで。さて……」

改めてルークの顔を見た。

「何、落ち着いてんだよ！セントビナーがヤバいんだぞ！」

ルークが怒鳴る。大声が外まで響いていたのでそれくらい聞こえていた。

「で？」

だから僕は端的に問う。声も視線も冷え切っていた。

ルークは口をパクパクさせたが、そこから意味のある言葉を紡ぐことは出来なかった。

「…はあ、つまりこれから“どうするのか？”ということですよ。どうしたいのか？”ではなく」

「だからセントビナーを崩落から守りに行くんだよっ！！」

察しが悪いルークのためにわざわざ説明したが伝わらなかったようだ。

ティアも僕と同じように表情を曇らせた。

「与えられた情報に踊らされ、自身の思考を放棄し、他者の言葉に盲目的に従う。…いい加減にしてください。またアクセリユスと同じ過ちを繰り返すつもりですか？」

僕に合わせてティアも口を開く。

「人の言葉にばかり左右されて、何が起きているのか自分で理解しようともしないで……。それじゃあ、アクゼリユスの時と同じよ」

さらに僕も続ける。淡々と……。

「情報の真偽も、対処法も、自身の心も、何一つ見えていない。ここにいるのはただの人形？」
「ルーク」は一体どこにいるんですか？」

ルークは息を呑み、瞳を揺らす。

「そして何をしようとアクゼリユスは戻ってきません。たとえ住民が無事だろうと、あそこにあつた個々の財産や形ある物は全て失われた。その咎をどう償うつもり？」

最後に僕は問う。

「“ルーク”はこれからどう生きていくんですか？」

ルークは、何も答えない……。

黙り込んだルークはしばらくして首を横に振った。

「……わからねえ」

ルークは、自嘲するような笑みを浮かべる。

「だっせえな、俺。……こんなことしか、言えなくて」

弱々しく綴る言葉は空疎だった先ほどの怒鳴り声とは対照的で……

「 アクゼリユスのこと、」

ルークは続ける。

「謝って済むならいくらでも謝る。俺が死んでアクゼリユスが復活するんなら……ちっと怖いけど……死んだって、いい」

“死んでもいい”など逃避に過ぎず、内容は相変わらず考えなし。

「でも現実はそのじゃないんだ。償おうたって、到底償いきれることじゃねえし……だから、」

ルークは、真つすぐな目で、前を見た。

「だから俺……自分にできることから始める。それが何かはまだわからねえけど……俺……俺、変わりたい……変わらなくちゃいけないんだ」

根拠もなく微塵も論理的でない。ただの感情の発露。

「ティア、ナイフ持っていたよな？ 貸してくれないか？」

怪訝な顔をするティアから受け取ったナイフでルークは自身の髪を切り落とした。

「これで今までの俺とはサヨナラだ。すぐには上手くいかないかもしれない。間違えるかもしれない。でも俺、変わってみせるから」
髪を切るなどといった行動に意味はない。

「だから、これからの俺を見てくれ。それで判断してほしい。そして」

「そして？」

ティアが先を促す。

「また間違えたら容赦なく見捨ててくれてもいい」

それでも“ルーク”自身の言葉と決意だった。

「……ルーク、わかったわ。でも見限ることはいつでも出来る。それを忘れないで」

ティアはルークを認めながらもしっかり釘を刺した。

そして“あなたは どうするの？”とでも言いたげに僕の顔を見る。

「髪を切るという行為もいくらでも繕える言葉にも意味などありません。ただ…その決意が本物であることを願います。そして一応、間違えそうになった段階で余裕があれば止めます」

間違えない人などいない。間違えそうになったら止めるのは当たり前のことだろう。

「もつとも、そのまま暴走して間違いを犯したなら遠慮はしません」

「ありがとう！二人とも。俺頑張るから！！」

ルークは顔を喜色で輝かせ、僕の手を握った。

そんなルークを見てティアは苦笑した。

僕も苦笑しながらルークの顔を見つつ、どこかで必要に駆られれば躊躇わず見捨てるつもりでいる自分に嫌気が差した…。

「…いつまで手を握ってる…ですか？」

終始無言だったアリエッタが低い声を出した。放っておかれて機嫌が悪いのでしょうか？

「ああ、悪りい…ってなんで敵のお前がここにいんだよ！！」

ルークがアリエッタに人差し指を刺す。僕はその指を掴み、笑顔を浮かべた。

「はい、人に指差さない。それに彼女は敵じゃありませんから。詳しいことはティアに教えてもらって下さい」

ここ数日の間にアリエッタのことはティアに紹介してあった。さすがにそう広くないユリアシティで彼女の存在をいつまでも隠しておけないと判断したためだ。

「痛っ！悪かった！もう指ささねえし、敵とか言わねえから、指離

してくれ!！」

「わかればよろしい」

僕は言われたように指を離した。素直って良いことですね

第一七話 かつての自分にさよなら（後書き）

第一七話となりました。トイボックスです。

とはいえ基本的には原作のままです。

ちよいちよい原作とルークのセリフが違い、多少原作より前向きと
いうか力を込めた言い回しにしています。

それはフェルが“どうしたいのか？”ではなく、“どうするのか？”
とルークに問うたためです。

この場で“変わりたいんだ”などと原作通り希望を口にした場合、
容赦なくフェルはルークを見限るつもりでした。

第一八話 預言への盲信（前書き）

日をまたぐ前に書き終えていたはずだったんですが、パソコンの前で寝落ちしていました。

第一八話 預言への盲信

「…それで、これからのことだけど」

ルークで遊んでいると、ティアが冷たい表情で口火を切った。

「もし本当にセントビナーが崩落するなら、それを止める手段を探さないといけないわね」

「なあ、魔界の人なら何か知ってるんじゃないか？ティア、どうだ？」

ティアはこくりと頷いた。

「心当たりはあるわ。…市長、私のお祖父さまに聞いて…」

「無駄だと思いますよ？あの人は預言遵守以外何も考えていない」

僕は二人の会話を遮る。

「僕が“導師イオン”、被験者であることはすでに知っていますね？」

「ええくああ>」

少し困った表情でうなづく二人。

「導師イオンをやっていたときに秘預言はすべて目を通しています。そしてテオドーロ市長とは面識がありました」

テオドーロ市長に初めて会ったときに言われた言葉は「余計なことはしませんように」だったのは今でも覚えている。

「彼は絵に描いたような生粋の預言遵守派。預言遵守派とは文字通りユリアの残した預言を守ることを至上命題とした一派です。彼らは預言遵守のためにはすべての犠牲を無視します。というより犠牲とは思いません」

誰がどれだけ犠牲になろうと彼らは一切気にしない。その先に詠われた“未曾有の繁栄”をただ求め続ける。

「そしてここユリアシティはユリアの預言を元に外郭大地を繁栄に導く監視者達の街です」

ついでなのでルークとティアに秘預言のことや、このユリアシティの監視者という役目を説明しておく。

「……だから大詠師モースは導師イオンを軟禁し、て戦争を起こそうとした……？」

「ヴァン師匠も……預言を知っていて俺に……？」

それぞれショックを受けた二人は声を絞り出す。

「その通りです。あなた達は、いえ、僕も含めてオールドランドに住むほとんどの人たちが預言に踊らされた人に踊らされているんです。事実、ホド消滅に関してあちこちで預言遵守派達が動いています」

否定してほしかったことはわかるが、現状から目を背けてもらって

は困るのではつきり断言する。

「待つて！ホド消滅はマルクトもキムラスカも聞く耳をもたなかつたつて言つてたわ！あれは嘘だつてことなの……？」

信じたくないのだろう。自分の祖父が故郷であるホドを消滅させた事件に一枚かんでいたなどと。

「……残念ながらそれはテオードーロ市長の嘘です。幼かったティアにはさすがに伝えられなかつたんでしょね。もつともヴァンは知つていたみたいですが」

少々内容がずれてきたので、一つせき込み、話を戻す。

「預言遵守派である市長が現段階で協力してくれるはずがありません。一方ヴァンはホド消滅のために預言を憎んでいたはずです。けれど預言通りアクゼリユスを落としました。何を考えているのかわかりませんが……」

ここ数日調べ物をしつつ考えていたのだが、結局わからなかつた。明らかに矛盾しており、彼の考えが読めない。

「……兄さんは、預言に　世界に、復讐するつもりなんだわ」

ティアが呟く。泣きそうな声で、首を振りながら……

「兄さん、言つてたもの。預言に縛られた大地など消滅すればいいつて！」

「ちょっと待つてください！そんなことヴァンが言つてたんですか

!？」

ヴァンは預言を憎んでいたことはよく知っていた。しかし“大地の消滅”？

「ええ、だから私は兄さんを止めようと外殻に行つたの」

フォミクリー、レプリカ、断片的なヴァンの計画についてなど“フェル”として集めた情報。

星の構造、第七音素、そして預言、秘預言など“導師イオン”として知っていたこと。

そして“預言に縛られた大地など消滅すればいい”というヴァンの言葉。

バラバラだった情報が繋がり、ヴァンの計画が見えてきた。しかしすぐに否定する。

いくらなんでもこれは酷過ぎる……これでは誰も救われない……。

「……とにかく、外殻に戻りましょう。セントビナー対策は一応ありますから」

僕はそう言うことしか出来なかった。

「おわっ!？」

「み、水ですよ!溺れちゃうですよー!」

「きゃっ」

泉の中に出たことに驚いて、ルーク、ミュウ、アリエッタは大いに

慌てていた。僕とティアがそんな二人と一匹を見て、くすりと笑う。

「大丈夫。濡れたりしないわ」

「あつ、付いてきていたんですね、ミュウ。いつもいるのかいないのかよくわからなくて」

「へ？」

ルークはおそろおそろの周りを確かめ、深く息を吐いた。

「……っはあゝ……びびったぜ……」

バックで「ひどいのですの〜!」と叫び声をあげているミュウがいたがルークは無視だ。

代わりにアリエッタがミュウの頭をな撫でていた。まあ、一応魔物だから相性がいいのだろう。

「セフィロトが吹き上げる力で、水が弾かれるんだそうよ」

「へえ……」

ティアの説明を聞きながら、泉から上がる。

ユリアシティから外殻大地を繋ぐ通路、今では解読不能の古の譜術
ユリアロードを通して僕たちは外殻大地に戻ってきたのだ。

繁茂する植物と徘徊する魔物、正常な水の流れがあまり頻繁に使用
されていないことを示す。

「あ、忘れていたのですがティアにお届けものです。ユリアシティ
であなたに渡してほしいと預かりました」

便利グローブから一冊の古ぼけた本を取り出し、ティアに手渡す。

「本？つてこれはユリアの譜歌!？」

慎重に本のページを捲っていたティアが驚く。

「元々ヴァンの部屋にあつたと言っていました。で、理解は出来そ
うですか？僕には無理でしたが」

「……女神の…慈悲たる…癒しの旋律…ホーリーソング…大
丈夫、理解出来たわ」

本を閉じ、どこにしまおうか困るティアから古書を受け取りグロ
ブの中にしまう。

僕は中身を隅々まで読んでも理解できなかったというのに、ティア
はページをパラパラと読み飛ばすだけで理解できたのが若干納得い
かない。

やはりユリアの血縁以外では習得不能なのだろうか？

「待たせてしまったわね。行きましょう」

一度は通ったことがあるはずのティアが先導する。僕はその後ろ姿
を見ながら、暇ができれば意地でも解読してやろうと誓った。

「ようやくお出ましかよ。待ちくたびれたぜ、ルーク」

静かな薄闇に、軽やかな声が響く。ルークがその声に思わず身を竦めた。

「へえ。髪切ったのか？ いいじゃないか、すっきりしてて」

耳に馴染んだ、でも少し懐かしい、その声。

「ガ……ガイ！」

ルークは呆然としながら呟いた。

僕はティアとアリエッタの手を引いて少し二人から離れた。

アリエッタは嬉しそうな顔を一度はしたが、ティアを見て少し表情を曇らせた。

理由はよく分からない。ユリアシティでは良好な関係だったと思っていたが違ったのだろうか？

「どうして…ですか？」

「二人の感動の再会ですからね。水は差さない。しかし……」

続く言葉は呑み込んだ。あれが“親友”というものなのでしょうね…… 僕には縁遠い話です。

ルークは最初目を合わせづらそうにしていたが、ガイが笑いかけ立ち直らせた。本当に羨ましい。

「……うん。ありがとう」

その声は僕たちも聞こえ、全員が、絶句した。鳩が豆鉄砲を食ったような顔とは、多分今の僕たちの表情を指すんだろつ。

数秒の沈黙の後、ガイがものすごい勢いで三步ほど後ずさった。

「るるる、ルークが、ルークが、あ、ありがとうだって……!？」
「わ、悪いかよっ!!」

動転しまくっているガイの言葉に、ルークは照れたように腕を振り回した。

「日頃の行いですね」
「うるせえっ!!」

ある程度話がまとまったらしい二人の元へ移動しながらそう言つとルークがささずツッコんだ。

「まあまあ、しかし男同士で怪しい関係なのはいただけませんよ？」
「はあ？どーという意味だよ？」

ルークを含め、僕の言葉の意味がわからなかったようだ。そこでわかりやすく爆弾を投下した。

「ガイはこんな人気のない場所でルークを想い悶々としながら独りで過ごし、片やルークは最初怯えた目をしながらガイを見つめつつ、最後には笑顔を浮かべた。つまり“愛”!!」

ガイとルークは吹き出し、女性二人は気持ち悪そうな眼をした。

「誤解を招くような言い方はしないでくれええええええッ！
！」

魂の叫びが二人分洞窟に響き渡る。

少しして走ってやってきた某眼鏡の大佐は何があったのかと首を傾げた。

第一八話 預言への盲信（後書き）

しかし、ガイはアラミス湯水洞なんていうモンスターがいる場所でいつまで来るかわからないルークを待つつもりだったんでしょね？

まあ、初登場時にタルタロスの甲板から飛び降りてくるような良く分からない行動を取った人ですけどね。どうしてあんなところにいたんだか……

第一九話 日頃の行い

仄かに漂う香の匂い

空気はどこか凜と張り詰め、鐘の音が街に響く

ローレライ教団総本山ダアト。この地に足を踏み入れるのは二年半ぶり。

辛かった記憶のほうが多いが、それでも胸に懐かしさがよぎる。

ジェイドと再会した僕らはジェイドからイオンとナタリア姫がダアトに軟禁されたことを聞き、ここまで救出にやってきた。

また、アニスはイオンとナタリア姫の状況を探っているらしく、アニスと合流することが先決だ。

とりあえずダアトの中心部にある教会に僕達は向かうことにした。宗教都市であるダアトの教会は荘厳で半端な大きく、先端は雲に霞む程だ。

「はー、でかいな、先が見えねえ」

ルークは先端を見上げ、呟いた。

「大佐　　っ!」

「えっ?」

響き渡る声の方を向いたルークは階段の上から飛び降りてきた影に踏まれた…。

影は当然ながらアニスで、何故か譜業で動くらしい謎の巨大ぬいぐるみ トクナガに乗っている。街中でトクナガを起動する必要性は無く、狙っていたとしか思えない。

「二人の軟禁場所がわかりましたよ。褒めて褒めて」

「それはご苦労様でした、アニス」

「えへへ」

楽しそうに二人は手を合わせた。

「何事もなく話を進めるなっ!!」

「あゝ!なんでこんなところに根暗ツタがいるの!」

「無視かっ!?!」

がばつと飛び起きたルークを無視し、アニスはアリエッタの前に立つ。

「前も言ったけど、アリエッタ、根暗じゃないもん!アニスの意地悪っ!」

アリエッタも大声を上げ、そのまま二人で口喧嘩を始めた。僕はその様子を一步下がって見る。

「どづしたの?どことなく嬉しそうだけど」

するとティアが僕の顔を見て小首を傾げた。

「いえ、二人の楽しそうな様子が見れたので、ね」

「…喧嘩してるけど？」

ティアは苦笑しながら喧嘩を続ける二人に視線を向けた。

「あの二人は昔から喧嘩友達ですよ。けれどコーラル上では確かな負の感情が見えてました。僕がダアトを離れてから関係が悪くなっていたそうですから」

まだ少し、ぎすぎすしているところもある。けれど二人の表情は明るい。

「フェル…貴方のせいじゃないわ。貴方がアリエッタを大切にしているのは私でもわかる。アリエッタもきつと…」

ティアが辛そうな顔をする。ルークを心配してユリアシティに残ったように、余計な苦勞を背負い込む人だ。

「気にしないで下さい。それよりアリエッタと仲良くしてあげて下さい。一応ティアと同じ年ですし」

そんなティアに僕は笑いかけた。彼女に余計な心配を掛けたくはない。

「もちろん。ユリアシティで何度か話したけど、大丈夫だと思うわ」

ありがとうございませすと僕は軽く頭を下げた。

「お喋りはそれくらいにして行きますよ」

ジェイが手を叩いた。アリエッタは言うことを聞き黙ったが、アニスはここぞとばかりに口撃を続けたため、

ゴツッ！！

ジェイドに拳骨をもらった。

「なにしゃがんだゴラァ！！ この陰険鬼畜メガネが！！」

アニスが表情を一転させドスの効いた声を上げる。本性出てますが、いいんでしょうか。

「これはすいません。つい手が出てしまいました」

黒い笑顔で返すジェイド。どっちもろくでもない。

アニスもそれ以上は何も言わず、僕たちは見なかった振りをして歩き出した。

アニスの話ではイオンとナタリア姫はオラクル騎士団本部地下一番奥に軟禁されているとのことだ。

そこまで行くためにはオラクル騎士団員以外は通行許可証が必要となる。

「ふむ、オラクルの三人だけで行かせる手もありますが、警備は厳重でしょうしね」

ジエイドがメガネのブリッジをあげ、僕の顔を見た。

「フェル、何か良い案はありませんか？裏ワザとか」

「裏ワザって……、わかりましたよ。何とかします」

僕はため息を吐いた。全く人を何だと思ってるんでしょうか？

「本部入り口付近で待っていて下さい。くれぐれも目立たないように」

ルーク、アニス、一応アリエッタを順に見、釘を刺した。

僕はみんなと分かれ、教会への階段を上る。

そして重厚な扉を開け、教会の中に入った。

教会は一般人も入れる場所で、ミサがある日には信者で溢れ返る場所だ。最も今日はミサもないのでがらんとしているが。

演壇では一人の男性が背を向け、祭壇を掃除していた。

「どうかされました……導師イオン!？」

「久しぶりですね、トリトハイム。ご無沙汰してます。あとその呼び方は勘弁して下さい」

振り返り、目を見開いて驚くトリトハイムに僕は苦笑を浮かべた。

「お元気そうだなによりです。して本日はどのような御用件で？」

「話が早くて助かります。実はオラクル騎士団本部への通行許可書が必要なんです」

僕がそう言うと、トリトハイムは懐から木札を取り出し、渡してくれた。

「ありがとうございます」

僕は木札を抱え、頭を下げる。

「いえ、また何かありましたらいつでも」

「ええ、本当にありがとうございます」

僕は再度一礼し、教会から離れる。

ここまで僕が教会に入ってからわずか数分。

トリトハイムは留まれば留まるだけ僕が危険になると思い、気を使ってくれたのだろう。

かつてと同じように余計な事を聞かず、黙ってサポートしてくれるトリトハイムには感謝の念が絶えない。

その気遣いをありがたく思いながら、僕は本部に向かった。

入口には二人の兵が立っていたが通行証を渡すとあっさり引いてくれた。

僕たちはそのまま地下に降り、地下から奥へと進む。

途中、ルークがアニスにこの場所について説明を求めた。

アニスはめんどくさそうに説明すると、ルークがお礼を言ったためにアニスだけでなくジェイドも目を見開いて驚いていた。

「る、ルークにお礼を言われた……」

「……驚きましたね」

啞然としながら言う二人に、ルークは「そんなに俺が礼を言ったら変なんだろうか……」と不貞腐れた。

日頃の行いって大事ですよ

その後、話し声に気付き身を隠した僕らの前をリグレットとモースが何やら話しあいながら通り過ぎていった。

しかし僕は「豚、殺す……です」と突撃しようとしたアリエッタを羽交い絞めし、譜術を防いでいたため聞いている余裕がなく、詳細不明だ。

「まったく、少しは落ち着きましたか？ 僕たちはパーティなんですから独断先行は禁止です。わかりましたね？」

「はい……」

アリエッタはしゅんと小さくなる。

そうこうしつつ一番奥の部屋に辿りついた僕らは扉を開け、中に飛び込んだ。

「ナタリア！イオン！無事か？」

「……ルーク…ですわよね？」

部屋の中ではナタリア姫が所在なさげに椅子に腰かけ、イオンは堂々と紅茶を飲んでいた。

イオン、落ち着き過ぎだと思えますよ。

「悪かったな、アツシュじゃなくて……痛てえっ！」

僕は卑屈なことを言うルークの後頭部にチョップを入れる。

「二人とも無事で何よりです」

ルークが文句を言ったがいつも通り無視しておく。

「ありがとうございます。また助けてもらいましたね。すみませ
……あっっ」

イオンにはタルタロスで注意したにも関わらず謝ってきたのでデコピンを放っておく。前回より威力は二割増しで。

「謝罪はいりません。ほら、しゃんとして下さい。謝り癖がつきま
すよっ。」

イオンが涙目で無言の抗議をするが、気にしない。

「さっさとここから離れますよ。ダート港にアッシュが置いて行ってくれたタルタロスが停泊しているので、話はそこで」

ジェイドの指示に従い、僕たちは外まで走り出した。

第一九話 日頃の行い（後書き）

アビスのシナリオブックを見ながら書いてるのですが、読みなおせば読み直すほどダアトの警備がザルすぎますね。

本編でも通行所はモースの名前を出さただけであっさり手に入りますし、番兵も疑いもせずパーティ全員通してくれますしね。

トリトハイムの許可書だろうとマルクトの軍団長であるジェイドを通していいんでしょうかね？

中は中でドラの音で部屋から飛び出してきますし……

第二十話 要請と願い

ダアトから脱出した僕らは幸いにも追手に出会うことはなかった。

イオンはアクセリユス崩落をきっかけにキムラスカとマルクト間で戦争が起きぬよう導師勅命を発令するためにダアトに戻ったところ捕らえられたそうだ。

ナタリア姫に関しても戦争を始めるために必要だったのだろう。

戦争回避、そしてセントビナー崩落に関してマルクトのピオニー陛下に協力を仰ぐため、タルタロスは帝都グランコクマに向かうことになった。しかし、

「すみません、僕はラーデシア大陸で降ろしてください。シェリダに用事がありますので」

と僕は単独行動を申し出た。

「この非常時に何を言い出しますの！！」

ナタリア姫はお怒りのようで僕に叱責を飛ばすが、他のみんなは苦笑気味だ。

「まあまあ、落ち着けよ、ナタリア」

「ルーク！どうして落ち着けますの！？世界の一大事ですよ」

ナタリア姫は代表して諫めたルークの肩を掴み、前後に全力で揺さぶる。

あれはなかなかきつそうだ……。

二人の間にガイが仲裁に入ったのを横目に、僕はグローブから取り出した書類をジェイドに渡す。

「陛下に渡して下さい。必ずね」

ジェイドならきっちり渡してくれるだろうが、一応念を押しておく。

「わかりましたが、内容をお聞きしても？」

「僕がユリアシティで纏めた資料です。気になるなら読んで下さっても結構ですよ」

ジェイドは小さく頷き、パラパラと流し読んだ。

「なるほど……。確かに引き受けました。ところで、シエリダンへは一人で向かうつもりですか？」

ジェイドはアリエッタに視線を移す。その視線が怖いのかアリエッタは僕の背に隠れてしまった。

「今回は連れて行きます。アリエッタも構いませんね？」

振り返り、アリエッタに尋ねると小さく「はい」と答えた。

「そうですね。では私は航路の変更をしてきます。あ、そうそう過保護なものほどほどにしたほうがいいと思いますよ？」

それだけ言い、ジェイドは艦橋に向かった。

「ジェイドも中々にお節介ですね」

「そうかもしれないわね」

僕とティアは顔を見合わせ苦笑した。

「さて、ナタリア姫？貴方にも頼みたいことがあるので、いいでしょうか？」

ナタリア姫を含め、みんなが首をかしげた。

「何ですか？聞くだけは聞いてあげます」

ナタリア姫は無然としながら答えた。二人の説得も空しくおかんむりの様子だ。

「政治的な話が関わりますので、ちょっとこちらに」

怪訝そうな表情をしつつ、ナタリア姫はおとなしく僕に付き添い廊下へと出てくれた。

聞き耳を立てるようなことはみんなしないと思うが、念のため扉から離れたところで立ち止まる。

「グランコクマに着いたらセントビナーに向かわず、お一人で王都バチカルに戻り、インゴベルト六世陛下の説得をお願いします」

大きな溜息を吐き、ナタリア姫は呆れながら僕の顔を見た。

「先ほどの話を聞いていなかったのですか？ お父様は戦争を進めるモースを信頼しています。今更私が行ったところで……」

“先ほど”というのはダアトから逃げるときに第四石碑辺りで休憩をしながらルークが「バチカルへ行って伯父上をとめればいいんじゃないね？」等と話していた件だ。

「いえ、何も戦争を諦めさせてほしいとは言いません。ただ、時間を稼ぎたいのです。貴方の説得なら陛下も考慮はしてくれるはずですので」

そう、ここからは時間の問題となる。一日、二日でも稼げればそれだけで被害を抑えられる可能性は高まる。

そのためなら使える手はすべて使っておきたい。

「…わかりました。何とかお父様を説得してみますが、期待はせぬように」

「ありがとうございます。この恩は忘れません」

礼を言うと、何を大げさなとナタリア姫は不思議そうな顔をした。

タルタロスから僕とアリエッタは大地に降り立つ。

ここラーデシア大陸は赤茶色の台地が広がり、緑があまりない礫岩地帯だ。

そのため時に思いもよらぬ強風が吹き荒れることもある。

「僕達はこれからシエリダンに向かうわけですが…」

アリエッタを見、僕はため息を吐いた。

アリエッタは右手で僕の左手を握り、左手でぬいぐるみを持ち、不
安げに僕を見上げている。

「フェル、アリエッタ…何か悪いこと…したですか？」

上目遣いに少し怯みつつも表情には出さず、彼女の目線の高さに合
わせるため膝を折る。

ラーデシア大陸は肥沃な土地と言えず、生存競争もそれなりに厳し
い。

それゆえにここに生息する魔物もそこそこの強さを誇る。

そんな場所で左手を掴まれたままというのは不味かった。

この魔物が闊歩するオールドランドで徒歩移動する人は珍しく、徒
歩を選択する者は皆腕に覚えがあるものであり、手を握ったまま旅
をする人などあり得ない。

「手は放して下さい。アリエッタはそのままでも譜術で戦えるかも
しませんが、僕は基本的に近接戦闘なので困ります」

もっともこの辺り程度の魔物なら両手が塞がっていても勝てると思

う。

しかしもしもの時にアリエッタを守りきれるか微妙なところが不安だった。

「ごめんなさい……」

名残惜しそうに手を離すアリエッタに僕は「いえ」と笑いかけた。

「話は変わりますが、ルーク達のことをどう思いますか？」

唐突な僕の質問にアリエッタは面食らったようだ。

「えーと、ミュウは可愛い。それと……ティアは優しいです。……あとガイも気遣ってくれたです……ルークは……普通」

一番最初にミュウが来る辺りアリエッタらしいと思う。ルークは……もう少し頑張ってください。

「それで……大佐は……ちょっと怖い……。イオン様とは……ちょっと話しにくい……アニスはアニス」

ジエイドとイオンに関しては仕方ないだろう。徐々に慣れていってもらうしかない。アニスはアニスですから、大丈夫だろう。

「そうですか。あと僕達はヴァンと彼が率いる六神将と戦うことになります。それでも付いてきますか？」

「……フェルがそう言うのなら、アリエッタも戦う……です」

僕は首を横に振った。

「そうじゃありません。僕が聞きたいのはアリエッタ自身がどうするつもりなのかということですよ。僕に戦う理由を預けないで下さい」「彼女には難しいことくらい承知しているが、僕は言い切った。

答え如何によつてはこの旅に彼女を連れていく気はない。

「……………わからない……です。アリエッタ……六神将のみんなのこと嫌いじゃない……です。けど……」

僕は何も言わず、続きを待つ。

「……………けど……………うまく説明できないけど……………間違つてると思います……………ううん……………みんなもどこかで迷っているみたい……………でした。だから」

二年半という月日の移ろいを感じる。

「……………だから……………アリエッタに何ができるかわからないけど……………みんなを助きたい……………です」

僕の後ろを付いてきていただけだった彼女の成長を嬉しく思う。

「わかりました。これからよろしくお願いしますね？アリエッタ」「はい！……」

アリエッタは普段とは違い、大きな声で返事をした。

どうか、貴方はまっすぐなまま進んで下さい、アリエッタ。

第二十話 要請と願い（後書き）

なんだかんだで二十話となりました。トイボックスです。

フェルとアリエッタはしばらくルーク達一行から離脱、別行動になります。

今回、“政治的な話”と言いつつ、単純なことをフェルはナタリアに頼みましたがフェルの考えに関しては以降の話に持ち越します。

といっても、たいした話でも何でもないんですけどね。

第二一話 舞い上がる翼

ガチャガチャ、フォンフォンと鳴り響く用途不明の歯車や音機関達
たたら場からは金属を叩く音が響き渡り、店先では商人が声を張り
上げる

職人の町シエリダン。不可能を可能にするため、各々が失敗を糧に
夢を叶えようとする街。

「すごい……ですっ」

ダアトとはかなり雰囲気が違うこの街にアリエッタは驚いているよ
うだ。

シエリダンに着いてから見る物全てに興味津々の様子で、あっちへ
うろつろ、こっちへふらふらと慌ただしい。

「フェル、あれは何ですか？」

「走ると転びますよ？」

感情を表に出すのが苦手なアリエッタらしくらぬ様子に僕は苦笑し
ながらも、良い傾向だと思う。

「フェル、あれは……」

「すみませんが、ちょっと待って下さい。用事を済ませないといけ
ませんので、ね？」

駆け出そうとするアリエッタの腕を掴んで引きとめる。

可哀そうだが、ここまで来た目的は観光ではない。

街の中を進むとひととき大きな建物が併設された広場に出た。

広場では青と白のツートンカラーで流線型をした機体が二機鎮座しており、その前で三人の老人が言い争いをし、二人の若者がそれを止めるため四苦八苦していた。

「ええい、ほんと分からん奴じゃの！普通、初号機からテストするのが当然じゃろうが！」

「完成度が高いのは二号機じゃろうが！なら二号機のテストが先じゃ！」

「どっちでも良いよ。はよ、決めとくれ。ちんたらしてたらあなたの寿命が来ちまうよ」

「何じゃとこのババア」

「ババアとは何さ、くそジジイ」

「まあまあ、お爺ちゃん抑えて」

「そつっすよ。婆ちゃんもそれくらいで」

……相変わらず熱い人達だと僕は苦笑した。

隣のリエッタは彼らの様子に面喰らったようで僕の後ろに隠れている。

「お元気そうですね。シエリダンめ組の皆さん。それとギンジさんとノエルさんも」

僕が片手を上げながら、挨拶する。

「おう？フェルではないか！わしらは相変わらずじゃよ」

「それより見てくれ！遂に完成段階までこぎつけた飛艇アルビオール。お前さんが秘密裏にマルクトに資金繰りを頼んでくれたおかげで予定より早くここまでこれたぞ！」

「おや？後ろの娘っ子さんは誰かな？」

最初からモヒカン頭のイエモンさん、上下赤い服を着ているアストンさん、肩を出した格好のタマラさん。

三人とも六十五歳を過ぎた今なお現役、シエリダンめ組と呼ばれる技師達だ。

「お久しぶりっすね！フェル君！！」

「こんにちは。フェルさんもお元気そうですねによりです」

そして、イエモンさんのお孫さんのギンジさんと妹のノエルさん。

彼らは広場に鎮座する世界初の飛艇アルビオールのパイロットになる予定だ。

「すみません、皆さんに頼みたいことがあるんです」

アポもなしに訪問しておいて、なお且つぶしつけない僕の言葉にもみんな文句ひとつ言わず、先を促してくれる。

「お願いしたいことは二つ。一つ目は……」

そこでふと僕はアリエッタを見、ノエルさんに視線を移した。

「話が少し専門的になると思います。ノエルさん、良かったら彼女、アリエッタにこの街を案内してあげてきてくれませんか？」

ノエルさんは少し驚いたようだったが、笑顔を浮かべた。

「ええ、私は構いませんよ。行きますか？」

ノエルさんはアリエッタに視線を合わせて訊いた。

アリエッタは僕のほうを見、少しだけ迷ってから「お願いします……です」とお辞儀をした。

「承りました。アリエッタさんで良かったですか？それじゃ、行きましょう」

そのまま二人は連れ立って街に出て行った。

ノエルさんはしっかりしているし、アリエッタも若干ながら人見知りがマシになってきているので、きっと大丈夫だろう。

「やれやれ潤いが無くなってしまったわ。残ったのはババア一人か

…」

「黙れ、この色ポケジジイが！」

「えーい、アストンもタマラもやめんか！話が進まん！」

イエモンさんが手を叩いて2人を止めた。

「すまん、話を続けてくれ」

「いえ、まず一つ目ですがアルビオールを貸して下さい。期間は不明ですが何週間もかかると思います」

アリエッタの友達であるフレスベルグなどの飛行系の魔物を使えば、空を飛ぶことは出来る。

しかし、もともと人を背負って飛ぶなどあり得ない魔物達は人を背負ったままそう遠くまで飛ぶことが難しく、連続飛行能力では圧倒的な差がある。

「……すぐには無理じゃぞ？最終テストを行っておらんからの。その後でよければわし等は構わん」

の？とイエモンさんが二人に訊くと二人も構わないと返した。

「ただ使ってみての感想や改善点などあとで教えてくれるとありがたい」

アストンさんは技師らしく、次を見越したことを言う。

ちなみに実はこのアルビオールを制作依頼しているのはキムラスカ王国だ。

というよりシエリダンはキムラスカ領。

タルタロスなどのマルクトの軍艦もここで造られたものだが、それをダアトが買い取り、さらにダアトがマルクトに回すという間接貿易を行っている。

では、アルビオールを勝手に持って行っていいのか？と言われると良いわけがない。

とはいえアルビオールの完成予定はずっと先になっている。あくまで“テスト飛行”として少々借り受けるだけの話だ。

完成予定をどうして知っているのか？という疑問に対しては禁則事項である。

一つ言えるのは世界で初めての飛艇を造るには膨大すぎる金が必要だということ。

「もちろん。あともう一つはめ組の皆さんに作成して欲しい物があるんです。まずはこれを」

言いながらグローブから書類を出し、それぞれに渡した。

内容はユリアシティでまとめた液化化大地についてだ。

「ふむ、正直わし等の専門からちと離れとるの。こつこつのは忌々しいが、い組の専門じゃ」

苦々しそうにイエモンさんは言った。

ちなみにい組とはベルケンドの研究者でめ組とはライバル関係にある人達のことだ。

「でしょうね。彼らにも声をかける予定です。皆さんに作成して欲しいのは地殻の振動に対して逆の振動を与える装置です」

「なるほどね。逆の振動を与えて中和するってことね。それで大地の液化化を止めると」

さすがに一流の人たちだ。こちらの意図を即座に理解してくれる。

その後、地殻振動停止装置作成にあたっての問題点について僕達は話し合った。

結果、パーツは基本部分をシェリダンにある物を使いつつ、後日マルクトの最新艦（タルタロスと同型艦）を持ってきてそれに組み込むことになった。

また地殻の正確な振動周波数が分からないと話にならないので、そこはい組の力を借りることに決まった。

だがイエモンさんもアストンさんも相当ごねていた。

そしてアルビオールの最終飛行テストを見学させてもらったりしながらシェリダンに数日滞在した。

一号機のテストは気流に巻き込まれ、メジオラ平原に墜落という結果になってしまった。

幸い僕とアリエッタの二人で動力部と一号機パイロットのギンジさんを助けることが出来た。

一号機の動力部を移すことで二号機は完成。

パイロットはノエルさんだ。もともと二号機は彼女がパイロットの予定であり、またギンジさんが負傷したためでもある。

紆余曲折ありながら僕はアルビオールを借り受け、出発という運びになった。

「みんな気をつけての。こっちで出来ることはやっつくからフェルもよろしく頼むぞ」

「もちろんです。出来る限り早く届けます」

僕はイエモンさんと握手を交わした。

「お婆ちゃんもあまりお爺ちゃん達と喧嘩しないで下さいね？お兄さんは怪我を早く直してください」

「ノエルも気をつけてね」

「おう！さっさと直しておいらも空を飛びたいからね」

ノエルさんはタマラさん、ギンジさんに挨拶をしていた。

「嬢ちゃんも気をつけての」

アストンさんはアリエッタの髪を撫でていた。

アリエッタは「子ども扱いしないで……です」と文句を言いつつも振りほどこうとはせず、意外に仲良くやっていた。

「……それでは行ってきます（ね）（です）」「」「」

僕達三人は声を合わせて、アルビオールに乗り込んだ。

「行き先はベルケンド、グランコクマ、再度ベルケンド、シュレーの丘、シェリダン、セントビナーの順ですね？」

「ええ、お願いします。ノエルさん」

「了解です！！」

ノエルさんの返事を聞きながら、僕は今後の予定を再度頭の中で組み立てる。

まずベルケンドに行き、い組と交渉し振動周波数の測定器の製作に取り掛かってもらい、その製作期間の間にグランコクマに行って陛下に事情の説明および艦をシェリダンに送ってもらう。

その後、ベルケンドに戻り、装置を受け取ってシュレーの丘で周波数の計測。

同時にパッセージリングを操作しセントビナーの崩落を止める、ないし別の方法を考える。

そしてシェリダンに戻り計測結果を渡し、最終的にセントビナーの住民救助に向かうという予定だ。

こうやって列挙するとやらなければならないことは多々あるが、アルビオールの機動力があれば可能だと思う。

最悪の場合セントビナー崩落は止められず、救助も間に合わないかもしれない。

もちろんルーク達が間に合い、セントビナーの住人を避難させていれば問題無い。

しかしひょっとするとヴァンや六神将の妨害が入りうまくいかない場合も考えられる。

その可能性を考慮しつつも、僕は液状化大地への対処を優先させた。

アルビオールはタラップを閉じ、エンジンが回る。

そしてゆっくりとその体を空へと押し上げ、飛び立った。

少しでも多くの人を救う。たとえ小数を切り捨てても…

第二一話 舞い上がる翼（後書き）

ゲームよりアルビオールは早い目に登場することとなりました、二話です。

アビスでは移動手段が辻馬車と船なので、あちこち移動するには不便なんですよね。アッシュの移動速度はちよいとおかしいですが。

そこで暗躍？するためにアルビオールにご登場願いました。

さすがにゲームのティアとルークのように疑似超振動でワープ！というわけにはいきません。

というかあれ、どうやって移動したんでしょうね？音素に分解されてから再構成でしょうか？

第二十二話 目的（前書き）

昨日、投稿したつもりだったんですが、どうやら失敗していたようです。

とりあえず今回と次回はルーク視点のお話となっております

第二十二話 目的

side ルーク

タルタロスの一室で俺はいつものように日記を書いている。

フェル達と別れた俺達はローテルロー橋に向かった。

ピオニー陛下と面会するためにグランコクマに向かっている俺たちだけど、グランコクマはキムラスカとの戦争に備えるために封鎖されているらしい。

そこでローテルロー橋にタルタロスをつけ、そこから徒歩で行くことになった。

だけどその途中で防衛用の機雷に接触してタルタロスが壊れてしまい、修理のためにケテルブルク港に寄ることとなった。

事情説明のためにケテルブルクの街に行ったり、そこがジェイドの故郷だったり、知事のネフリーさんがジェイドの妹だったりと驚いたことばかりだ。

そんな中で一番驚いたのはジェイドがフォミクリーを生み出した経緯だ。

大切な人だったネビリム先生を生き返らせようとしたなんて……ジェイドにも色々あったんだな…。

「ルーク？何をこそそと書いてるんですか？」

「何でもねえよ！ジエイドは気にすんな！」

気配を消して後ろに立たないでほしい……。

「おや？見られて困るようなことでも？お仕置が必要ですか？」

嫌だ。絶対に嫌だ！何されるかわかったものじゃないっ！！

「そんなことより、何しに来たんだよ？」

とにかく話題を変えようと思った。

「いえ、もうすぐローテルロー橋ですから呼びに来たんですよ。さつさと下船の準備を」

それだけ言い、ジエイドは部屋から出て行った。

あぶねえ、秘密にしろって言われていたことを日記に書いてたってばれたらヤバかった……。

「そうそう、ルーク、約束忘れないで下さいね？」

怖ええええええええええ！！

扉からにゅっと顔だけ出したジエイドが笑っていた。

俺はかくかくと頷くことしか出来なかった。日記は書き直そうと思
う……。

タルタロスから降りた俺達はテオルの森で六神将と戦ったり、ガイがカースロットとかいうのに操られたり色々あったがやつとのこと
でピオニー陛下に会うことが出来た。

だけどガイはカースロット治療のために宿だ。

イオンが治療出来るみたいで本当によかったけど、カースロットは
本人がやりたくないことはさせられないらしい。

つまりガイは俺を殺したいほど恨んでいるということだ。

アクゼリユスのことだろうか、それとも俺は……、

俺がそんなことを考えながら、ぼーとしていると

「俺の国民を頼む」

陛下は頭を下げていた。俺がぼーとしている間に話が進んでいたみ
たいだ。

ぼーとしていたのがバレたのか隣からティアの視線が痛い。

「陛下、別件でフェル・フォーヘンから書類を預かっております」

セントビナーの話が終わり、ジェイドが切り出した。

一体何のことだろうか？みんなの方を見ても、全員心当たりがないよ

うだ。

そんな俺達を放置し、ジェイドは陛下に書類を手渡した。

戻ってきたジェイドにみんなが目線を向けたが、肩をすくめただけで何も言わない。

陛下はしばらく書類に目を通し、

「ゼーゼマン、これを研究室に頼む」

「御意にございます」

側近の人に渡した。何が書いてあったんだろう？

「陛下、彼とはどんな関係なんですか？身分証や旅券の工面までしておられたようですか？」

ジェイドが陛下に尋ねた。

「ん？あいつとの関係か……。一言で言うと政治上の付き合いだな。あいつのことは全員知っているのか？」

フェルのことか……。すげえ強くて、優しい奴だと思つ。

アクゼリユスでもフェルのおかげで誰も死なずに済んだし、こんな俺のことも気にかけてくれた。

本当に頼りになる仲間だ。あと……。、

「期間はそれぞれ違いますが、彼と行動を共にしています。そして

彼の正体も承知しています。陛下は？」

フェルが被験者イオンだったなんてユリアシティでテオドーロさんが言った時は本当に驚いた。

その上フェル自身はさっさと調べ物をしに行っちまうし、書庫を訪ねて訊いても「昔のことです」の一言だけで、調べ物の邪魔ですとか言ってみんなを追い出してたな。

アニスもしばらくショックを受けていた……結局、今のイオンを守るのが自分の導師守護役としての仕事だと言っていたけど……。

「もちろん知っていたさ。というよりあいつとは導師時代からの付き合いだな」

陛下は肩をすくめ、苦笑した。

「陛下、彼は何故、導師職を追われたんですか？そして彼の目的は何なんですか？」

「ふむ、お前らにもやはり何も言っておらんか……」

ジェイドの問いかけに陛下は難しそうな顔をした。

「当人には訊かんのか？ジェイド？」

今度はジェイドが難しそうな顔をした。

「陛下のほうを彼を御存知でしょう？彼は自らは何も言わず、こちらの問いには最低限しか答ええない。しかもその情報はごく限定的

で裏を読むことは困難です。厄介な人物ですよ、彼は」

ジェイドがため息をつきながら答えた内容に対して、俺はすごくムカついた。

「そんな言い方ってないだろ？フェルがやってることは正しいだろうが！アクゼリユスの時だって…！」

「ルーク！あなたは変わるのではなかったんですか？確かに彼のやっていたことは私たちにとってありがたい物でした」

そこで一旦言葉を切り、ジェイドは俺に冷たい目を向ける。

「ですが、これからもという保証はない。一方的に“フェルのやっていることなら間違いない”と思いつ込むのは危険です。それではアクゼリユスの時と何も変わらない。あの時は“ヴァン師匠の言うことなら間違いない”と信じ込んだ結果でしょうが！」

ジェイドの言葉に俺は何も言えなかった。…結局俺は、何も変われてないのかよ……！

ジェイドもそれ以上何も言わず、陛下に向き直った。

「で、質問に答えていたただきたいのですが？……何をニヤニヤしているんですか？」

陛下は笑顔を浮かべていた。

「いや、お前が人に助言するなど珍しい光景だと思ってな」

「何を馬鹿なことを…」

ジエイドは心底嫌そうな顔をしたが、陛下は続ける。

「どーでもいい奴が何を言おうが、お前は流すだろうが。ルークもそうへこむな、こいつはお前のことを気に入っているからこそ苦言を呈したのだろうからな」

「陛下！」

「内容については自分なりに考えろってこつた。誰かを盲目的に信じるのではなくてな。せつかくのジエイドからの助言だ、大切にしろよ?」

ジエイドが大きな声を上げたが陛下は無視する。

「私のことは良いです。さっさと質問に答えて下さい」

やれやれと陛下はまた苦笑した。

「さて、フェルのことだったな。先に言っておくが俺も詳しいことは知らん。お前らと同じで最低限の事情しか聞いていないからな」

陛下はそう前置きした。

「先にあいつの目的だが、“世界の理不尽さから解放する”ことだ」いきなり話が大きくなり、俺には陛下の行っている意味がよく分か

らなかった。

「どうやら俺だけではなく、みんなもピンと来ていないようだ。」

「仰っていることが解りかねるんですけど、具体的にどういうことなんですか？」

ティアがおずおずと質問した。

「うむ、導師時代のあいつにとって“世界の理不尽さ”とは預言だった。預言とそれを遵守することを命題とした政治を正そうと躍起になっていたのさ」

陛下は続ける。

「あと半歩というところまでいったものの遵守派に暗殺されかけ、数日意識を失っていたらしい。意識を取り戻した時は今の“導師イオン”が立てられていたこともあり、あいつはダアトを出た」

俺達は黙って陛下の話を聞く。

「預言に対するあいつの立ち位置は変わらんが、ヴァン謡将の計画、さらに瘴気や液化化大地といったこの星が抱える問題を含め、“世界の不条理さ”と戦っているんだよ」

俺は正直途方もない話だと思う。どれだけのことをフェルはやってるんだろっ……？

「……いくら元導師だからといって問題が大きすぎるのではありませんか？ 個人でどうこう出来る範囲を軽く超えているのではなくっ

て？」

ナタリアが首を傾げると、陛下は頷いた。

「ああ、だからマルクトは秘密裏に協力しているのさ。マルクト以外にもあいつに協力している人間は多い。導師時代のコネクションは伊達ではないのだろうか」

「私は初耳です。何故紹介して下さらなかったのです？」

ジェイドが何も聞いていなかったなんて意外だ。

「それはあいつが拒否したからだ。フォミクリーの研究者は裏でヴァン謡将と繋がっている可能性があると言ってたな」

「…なるほど、合点がきました。しかし時々陛下の勅命で瘴気などについての書類が回ってきていましたか？」

陛下は「まあな」と頷いた。

「あいつが拒否する理由はわかるが、あいつ以上に俺はお前のことを知っている。知恵を借りるのは当然だ」

陛下はニヤリと笑い、ジェイドも合わせて苦笑した。

第二十二話 目的（後書き）

二十二話となりました。トイボックスです。

次話は夜にでも投稿したいと思います。

第二十三話 それぞれの都合

side ルーク

フェルの目的について陛下が話し終えた。

ジェイドにフェルの言うことを鵜呑みにするなと怒られたばかりだが、やっぱり大丈夫だと思う。だって世界のためには一生懸命なんだし。

「わたくしはフェルについて詳しく知りませんが、信頼出来る方の方ですよ。これなら指示に従っても大丈夫そうです」

そんなことを思っているとナタリアがおもむろに口を挟んだ。

フェルからの指示って何のことだ？

「ちょっと」

「少し…」

ナタリア言葉に陛下とジェイドが反応する。

お互いに顔を見合わせてから、ジェイドが口火を切った。

「フェルからの指示というのはどういった内容ですか？」

「バチカルに行って、お父様を説得して欲しいと言われましたの。」

「上手くいかずとも戦争開始を遅らせることが出来るだろう」と

陛下とジェイドはもう一度顔を見合わせた。

「ふむ、セントビナーの住民救出を引き受けてくれた借りがあるから訊くが、今バチカルに行くということが何を意味するかわかって言っておられるのか？ナタリア姫」

ナタリアは首を傾げた。

「どういうことですか？確かに説得することは困難だと思いますけれど……」

「…キムラスカの宣戦布告理由はマルクトがアクゼリユスを崩落させ、ナタリア姫とルークを亡き者したからだ」

ティアは何かに気付いたみたいだったが俺もナタリアも首を傾げた。

何が言いたいんだろう？

「…すまんが、これくらいが最大限の譲歩だ。あとは自分で考えてくれ」

陛下のその言葉を最後にナタリアが何度尋ねても答えてくれず、俺達は城を後にした。

ナタリアは最後まで教えてくれなかった陛下に対して文句を言いつつ、ジェイドに説明を求めたが、「私もマルクトの軍人ですので」と教えてくれなかった。

仕方なく、もやもやしたものを抱えながら宿に向かう。

ナタリアには悪いが、俺はガイのことが気になっていた。

ガイ……俺は何をしちまっていたんだ……？

宿に着くとイオンが待っており、「治療は終わりました」と笑った。

正直怖くてどうしようもないけど、ガイに会わないわけにはいかない……。

ガイに話を聞くとガイの本当の名前はガイラルディア・ガラン・ガルディオスで壊滅したホド出身のマルクト貴族だったらしい。

そして家族はホド戦争の時に全員殺されており、それを指揮したのが父上だったそうだ。

ガイはファブレ家に復讐するために家に入り込み、その機会を探っていたのだと話してくれた。

「だから俺はルーク個人を恨んでいたわけじゃない。だがお前を殺そうとしたのも事実だ。その上で俺はルークに付いて行きたいと思っているが、こんな俺をお前は今も信じてくれるか？」

ガイはまっすぐ俺の目を見て尋ねた。

ガイにそんな過去があったなんて初めて知った、いや知ろうともしていなかっただんだな、俺は……。

反省しつつも、俺の答えは決まっている。

「俺はガイを信じる！ いや、信じてくれ、かな……？」

そう俺が言つとガイは笑った。

「はは、どっちでもいいさ。これからもよろしくな？ ルーク」

俺もガイに合わせて笑った。

仲直りとはちょっと違っけど、俺はガイと前より近付けた気がしてよかったと思う。

「ところで、ナタリアは何を難しい顔をしてるんだ？」

しばらく笑いあった後、ガイはナタリアの顔を見て口を開いた。

ガイが訊くとナタリアは陛下との話で出たことを説明した。

最初はやらかい表情をしていたガイだったけどフェルの指示の話になると表情を一変させた。

「ということですよ。ガイ！ 聞いてまして！」

ナタリアに怒鳴られたガイは生返事をしながらジェイドの顔を見た。

ジェイドは肩をすくめただけだったけど……。

「……悪いことは言わない、バチカルに戻るのには止めておいたほうが

いい」

ガイが真剣な顔で言うとナタリアは首を傾げた。

「キムラスカは預言を遵守するためにホドを滅ぼした過去がある。今回も同じだ」

それは俺にも分かる。だからナタリアが説得に行くんじゃないのか……？

「だが戦争には大義名分がある。それが君とルークの仇打ちだ。アケゼリユスで死んだことになっているんだからね。にもかかわらず君がマルクトから正式に帰国し、ルークも生きていると発言すれば大義名分はなくなってしまふ」

俺はまだいまいちピンとこなかったけどナタリアは何か気付いたみたいだ。

一体どういうことだ？

「だが戦争は起こさなくちゃならない。だとするとダアトのように秘密裏に身柄を抑えるか、最悪暗殺……」

「暗殺！？いくらなんでもそれは……」

俺は思いもよらず大声をあげていた。

「いや、ホドでは王室に繋がる俺の母上ごと滅ぼされている。それ

にアクゼリユス崩落が預言に詠まれていた以上ルークが死ぬはずだったことも承知していたことになる。ならばナタリアといえど安全とは限らない」

「だったら何で陛下もジェイドも！いや、そもそもフェルは何でそんな指示を出したんだよ！ナタリアがヤバかったかもしれないのに！！」

俺がジェイドに掴みかかろうとすると、

「止めて！大佐を責めても仕方ないでしょう？」

ずっと黙っていたティアが止めた。その上……、

「ルーク、ティアの言う通りです。責めるべきは私の浅慮ですわ」

当のナタリアまでが俺を止めた。

「何で……」

「ピオニー陛下も大佐もマルクトの利益のために何も言わなかったんですわ。私がどうなるうとマルクトには関係なく、むしろ時間を稼げればフェルが動く可能性が高い」

冷静な顔をしながらナタリアは続ける。

「よしんば彼が間に合わなかったとしても、キムラスカ第一王女は社会的に死ぬことになり、のちに後継者問題でもめることは必至。下手をするとキムラスカが割れる可能性さえある。いずれにしてもマルクトにとっては益になります」

そうですね？とナタリアが視線を向けるとジェイドは「ええ」と認めた。

「ガイに言われるまで気づかなかった自分が恥ずかしいですわ……」
そしてナタリアは弱々しく笑った。

「…そしてフェルはナタリアを犠牲にしても時間を稼ぎたかった」
ティアが小さく呟き、

「もしくはナタリアの命を重視していなかったか、ですね」
ジェイドが続ける。

「……そんな…フェルはあんなにすごくて、優しくて…！」
俺は認めたくなくて声を上げたが、誰も答えてくれなかった。

第二十三話 それぞれの都合（後書き）

第二十三話となりました。

フェルは単純に“全てを救う”なんてことを考えてはいません。

というより“全てを救う”ことを理想としつつ、実現不可能なら極力被害を小さくしようとしています。

ナタリアファンの方には申し訳ありませんが、“戦争の理由をでっちあげ、一方的に戦争を仕掛けようとしてくる国の姫”を犠牲にするかもしれないことについてフェルは躊躇しません。

この辺はかなりドライですが、元導師で政治家だったフェルなら普通の感覚ですね。ナタリア個人ともほとんど面識ないですし。

第二十四話 たとえ愚かだとしても……

行き交う人たちに活気はなく、どことなく疲れが見て取れる街に響く声は専門的で、喧騒とはどこか異なる

ベルケンド 人口約25万人というキムラスカ王国第二の都市ではあるが、研究者が非常に多く観光客などは全く訪れない街だ。

元々はキムラスカ・ローレイ教団双方が研究資金を出し合っていた街だが、現在はヴァンの拠点となっている。

そして目的であるベルケンドい組の人たちは第一音機関研究所にいたと思うが、以前の調査でヴァンもここで研究していることをつかんでおり、目立つ行動は避けたい。

そこでアルビオールは少し離れた場所に待機し、ノエルさんとアリエッタには留守番をしてもらっている。

もっとも目立たないためだけではありませんが……。

一番身近なアリエッタにさえ、いや、いちばん身近だからこそ今も昔も隠し事が多い自分に呆れる。

「すみません、ヘンケンさんとキャシーさんをお呼びできてもらえませんか？ ネレスが来たと言えば伝わりますので」

音機関研究所の入口付近の廊下を歩いていた若いアシスタントに言

伝をお願いします。

ちなみにネレスとはここでの僕の偽名だ。

待っていると廊下の奥から見知った研究者　シユウさんが歩いてきたので僕は頭を下げた。

「…ネレス？　検診にはまだ早いですが、どこか……」

「こんにちは、シユウさん。別件で訪れただけです。体は今のところもっていますよ」

心配性なシユウさんに苦笑しつつ、僕は答えた。

「それなら構いませんが……ヴァン謡将と六神将のリグレットが奥の研究室にいるはずです。用が済んだらすぐに離れた方が……」

そう言っつてシユウさんは控えめながら警告をくれた。

シユウさんはベルケンドにいる僕の協力者の一人で事情もある程度説明している。もっとも面倒事には極力巻き込まないとの約束の上でではあるが。

「あと少しでも体調を崩したり、異変を感じたらすぐに顔を出して下さい。それと……あまり無理はしないように」

「わかりました。それと僕のことにはあまり心配しないで下さい。自分で選んだことですから」

僕は再度苦笑した。

「…そうですね、私が今更言うことではなかった」

シユウさんは何も悪くないのに頭を下げる。

「いえいえ、謝られるようなことは何も。お心遣い感謝します」

僕がお礼を言うとシユウさんは眉を顰めた。

「社交辞令など私には要りません。貴方は……」

「すまん、ネレス。少し待たせたの」

シユウさんが言葉を続けようとしたその時、片手を上げながらベルケンドい組と呼ばれるヘンケンさんとキャシーさんがやってきた。

本当はもう一人スピノザさんという人がいるのだが、彼はヴァンに協力しているとお二人から聞いている。

「ああ、待ち人が来ましたが……とにかく何かあれば訪ねて来て下さい。それでは私は失礼します」

そう言っつてシユウさんはヘンケンさん達とは逆の方向にさっさと歩いていってしまった。

相変わらず良い人ですね。ホント。

シユウさんは僕に時間を取らせないために切り上げてくれたんだと思っつ。

「ん？今のはシユウか……まあ良い、いつものように場所を移すぞ？」

いつしかすっかり密会場所になってしまっていたベルケンド知事邸に移動した。

そしてめ組に渡したものと同じ資料を渡し、現状とこれからの予定を説明。

その後、振動周波数の測定機の作成を了承してもらえた。

第一段階終了、ですね。

ベルケンドからアルビオールでグランコクマにやってきた僕らとピオニー陛下はすぐに面会してくれた。

またアルビオールはマルクトから秘密裏に資金を回してもらったため現物をマルクトの技師が現在調査しており、ノエルさんも立ち会う予定だった。

しかしパイロットに会ってみたいという陛下に要望されたことと、アリエッタを一人にするわけにもいかなかったことにより二人とも同席している。

そして……、

「いやー、ノエルだったな？美人パイロットとはまったくフェルも羨ましい奴だ。どうだ？俺に乗り換えんか？」

「お褒め頂き、ありがとうございます……その、ですが……」

次にアリエッタの顔を覗き込み、

「お嬢ちゃんは可愛いな。どうだ？このまま城に留まらんか？」

「…あ、アリエッタは……」

一般人に過ぎないノエルさんは“皇帝陛下”に対してどう答えて良いのか分らず笑顔が引き攣っている。

一方アリエッタも周りに陛下のようなタイプがおらず、今まで接したこともなかったので、すっかり怯えてしまっている。

「はっはっは！可愛い女の子はいつでも大歓迎だ！」

かたや陛下はご機嫌。一国の皇帝が大声でそんなことを宣言しないでほしい……。

「おお！そうだ、この間良い物を作ったんだ。それをやるっ」

ごそごそと王座の後ろから白くて丸っこい物体を取り出した。

王座の裏は物置じゃないでしょうに……。

ツッコミたいことは色々あるが今は我慢だ。

あれでも一応皇帝であり、今回の頼み事は最新鋭の軍艦一隻。

下手にツッコんで機嫌を損ねるのはよくない。

「どうだ！この愛らしい顔立ち！癒し効果抜群のもちもちポンポン！これぞ、水の都に相応しいアイドル、アリ 社長！！」

「アホですかっ！！」

高らかに宣言する陛下の目の前に移動した僕はグローブからハリセンを取り出し、陛下の頭を叩いた。

ああ、わかってましたよ！ツツコまざるを得なくなるくらい！！

「ええい、何をする！？不敬だぞ！！」

「今の流れでどこに敬意を払えと？」

「俺個人の存在に！！」

ふんぞり返る陛下に対して、僕はハリセンを横殴りに振り抜いた。

「ふっ、見える！私にも敵が見えるぞ！！」

陛下は上体を反らしにやりと笑った。

でも、甘いですよ……？

僕は振り抜いた勢いそのまま体を回し、裏拳を放つようにもうひと振りし、

「ふべえろおおお！！」

陛下を吹っ飛ばした。

さて、いつものように悪ふざけを終えた陛下は表情を改めて、僕の説明を聞いてくれた。

ノエルさんとアリエッタの二人は急激な変化に面食らっていました。

「ふむ、わかった。すぐにアラルを向かわせよう。ただし人員は最小限、シエリダンでは当然匿ってもらえるな？」

戦争開始間際に敵国であるキムラスカ領に入るのだから、陛下の懸念はもつともだ。

「もちろん技師の方々に話は付けてあります。あの街なら数人程度どうとでも匿えますよ」

アラルもタルタロスと同型艦である以上、動かすだけなら数人いれば事足りる。

「うむ、ゼーゼマン。勅命だ、すぐに人員を見繕え！一時間以内だ」
即座に側近であるゼーゼマン氏に指示が飛んだ。

「しかしお前さんも無茶を言う。戦争前に最新鋭艦を貸せとはな…」
「戦争は起こさせません」

僕は即座に陛下の言葉を遮る。

何も知らない兵士達を“未曾有の大繁栄”などという偶像のために
死なせる気など毛頭ない。

「絶対にさせません。手はあります……。だから行きます」

僕は陛下に背を向け、外に向かう。

ここでの用件は終わり。すぐ次へ向かわないと……。

アリエッタとノエルさんも慌てて陛下に一礼し、走ってくる。

「そのためにナタリア姫の犠牲も厭わない、か……」

そこに陛下が声をかけてきた。

「効果がわからずとも打てる手は打っておく、それだけの話です」

僕は背を向けたまま歩みを止め、陛下に答える。

無視してはいけない。

犠牲を織り込んだ行動に対して無視や言い訳などしていいはずがない。

「僕はいつまでも机にかじりついていられる学者でもなければ、命令を聞いていれればいい軍人でもありません」

僕は続ける。

「まして気ままに旅が出来る冒険者でもありません。…ただ利益を求め、そのために小数を犠牲にする愚かな政治家です」

僕は自嘲の笑みを浮かべながら、さらに続ける。

「今も昔も、たぶん未来もね……」

隣で僕の顔を見、言葉を失う二人にちらりと視線を向け、僕は外へと歩を進めた。

第二十四話 たとえ愚かだとしても……（後書き）

フェルsideに戻りました、第二十四話です。

ちなみにベルケンドでの偽名“ネレス”は単純にネームレスからです。

もっとも以降登場することはありませんが。

しかし、ピオニー陛下は良いキャラだと個人的に思います。ネタもシリアスも万能に使えるので。

それとネタが古いのはあまり気にしないでください。

第二十五話 変わらない者、変わっていく者

グランコクマからベルケンドに戻った僕達は振動計測機を受け取り、すぐにシュレーの丘を目指している。

またキャシーさん達の安全を考え、シエリダンに行きの船まで送り届けておいた。

これである程度は大丈夫だと思う…。

そして移動中、アリエッタとノエルさんが僕に何か言いたそうだったが、目を閉じ体を休めることで黙殺しておいた。

今更何を言われても僕は変わらない…変わるわけにはいかない

……

「見えました、シュレーの丘です。アリエッタさん、フェルさんを起こして降りる準備をしてください」

「はいです」

二人の声を聞き、僕は目を開けた。

「目は覚めましたよ。アリエッタは大丈夫ですか？疲れてませんか？」

「大丈夫。フェルが寝ている時に少し寝たから……」

答えを聞き、僕はアリエッタの髪を軽く撫でた。

「内部には魔物もいるでしょう。お手伝いお願いしますね」
「はい!!」

アリエツタは笑顔で返事を返してくれた。

「ではノエルさん、この後もシェリダンに戻ってもらうことになるかと思えます。少しの間ですが、仮眠をとりつつ待機しててください」

「わかりました、お二人とも無茶をなさらずに。……着陸態勢に入ります」

ノエルさんも笑顔を浮かべてくれた。

気遣うことで会話を逸らす……我ながら最低のやり方だ。

心の中で自嘲しながら、僕も二人に笑顔を向けた。

シュレーの丘には創生歴時代の遺跡が隠されており、その奥のパッセーリングがここでの目的だ。

入口の封印を解き、遺跡に入った僕とアリエツタを待ち受けていたのはフォニックゴーレムなどの創生的時代の魔物達の大群だった。

中に入った途端わらわらと次から次へとわいてきたために一度離脱したのだが、どうやら遺跡から外へは出て来ないらしい。

「えと……どうする、です?」
「そうですね…」

あれだけの数がまとめて集まってくるのは少し異常なので、おそらく先に訪れたヴァンが指示を出しておいたのだろう。だとすると…、

「さて、どうしたものでしょうね…突っ切るといのは現実的ではありません」

そんなことをしたらどれだけのダメージを受ける羽目になるかわからない。

「だからといってあの数をいちいち相手にするのも面倒ですし…」
幸いあそこから出てこないようなのでここから譜術で地道に倒していくという手もあるが、どれだけ時間がかかるかわからない。

「あの、アリエッタにお任せです」

僕が悩んでいるとアリエッタが袖を引いた。

「いや譜術で倒すにしても時間が…」
「お任せです」

アリエッタは繰り返す。こんなにはつきりと意見を述べるのは初めてではないだろうか…?

「…わかりました。ではアリエッタは譜術で道を切り開いて下さい。

あとは僕が……」

「アリエッタにお任せ、です！」

さらに珍しく、大きな声をあげて主張してくる。どうやらあくまで独りでやりたいらしい……。

「……アリエッタのこと、信じてくれない……です？」

アリエッタは悲しげに表情を歪ませた。

「いや、信じていないわけではありません。ただ……」

「信じてないです？」

何度も繰り返され僕はとうとう根負けすることになった……。

「……分かりました。お任せしますが、危ないと思ったら即座に参戦しますからね？」

「ここは譲れない。」

「大丈夫、です」

にっこり笑い、アリエッタは魔物達ぎりぎりまで近付き、目を閉じた。

「始まりの時を再び刻め……倒れて……ビッグバン……！」

アリエッタが集めた七つの音素が混じり合い、次の瞬間敵の真ん中で大爆発を起こす。

後には敵の残骸が転がり原形をとどめている機体は一つもない。

「はぁー、終わった、です」

大きく息を吐いたアリエッタが振り返って小さくガッツポーズを取った。

「…………ご苦労様でした。しかし…なんとというか…凄まじいですね…」

啞然としながら僕は言葉を返すのがせいぜいだ。

これだけの譜術を使える者など世界にもほとんどいないと思う…。

「いっぱい練習したです。さあ、行く…です」

アリエッタは誇らしいげに言いながら、僕の手を取りパッセージングのある奥へと駆け出した。

先に進む僕らに対して他には何も襲って来なかった。入り口で全部だったらしい。

その後しばらく、最奥にあったパッセージングに到着した。さて…

「あれ？動かない…です？」

そうパッケージジリングにはユリアの血統にしか反応しないユリア式封呪がかけられており、起動できない。しかし…、

「アリエッタ、下がって下さい。あとあまり心配しないで下さいね」
気合いと共にダアト式封呪を展開、強引にユリア式封呪を掻き消した。

ダアト式とユリア式は全く別系統の封印ではなく似通った部分がある。

そこを起点に力ずくで打ち破ったのだ。

もっとも通常では不可能であり、ごく最近ヴァンの手で一度解呪されていたから出来たに過ぎないが。

「……くっ!？」

目の前が真っ暗になり片膝を付いてしまう。

額には嫌な汗が流れ、呼吸も乱れる。

「フェル!?!しっかりしてっ!?!」

悲鳴じみた声を上げたアリエッタを片手で制しながらゆっくりと呼吸を整える。

さらに外気から音素を呼び込む。

気休めに等しいが何もしないより幾らかマシなはずだ。

オロオロしているアリエッタに向かって笑いかける。きちんと笑え

ているだろうか？

しばらくして何とか立ち上がる事が出来た。

「もう大丈夫なんです！？」

半分以上泣いているアリエッタの頭を撫でつつ、グローブから薬の入ったカプセルを取り出しそのまま飲む。

「…ええ、落ち着きました。大丈夫ですよ？」

それでも心配顔なアリエッタの頭を撫でて続け、慰めた。

原因はパッケージリング起動時に流れ込んできた瘴気だ。

パッケージリングは魔界に繋がっているおり、こうなることは予想はしていたし、若干の対処も用意していた。

しかし思ってた以上に体へのダメージが大きい。

僕の状態を考えると意識を保っていられるのは後一回。倒れる覚悟でさらに一回。その次は…、

「本当…ですか？ 無理してない…ですか？」

「ええ、けど早くやることやってアルビオールに戻りましょうね」

アリエッタの頭をポンポンと軽く叩き、僕は起動したパッケージリングの前に立った。

さすがはヴァン、手抜きなしですね。

画面には指示変更不可の文字。このままでは新たに操作は出来ない。僕はキーボードを叩き、ヴァンのプログラムを解析……解除完了。戦闘では厳しいがこういうことなら僕の方が上だ。

ついでに他の全セフィロトとをリンクさせ……ようかと思ったが思いとどまった。

下手に遠隔操作でまとめて起動させると耐久年代ギリギリのセフィロトが連鎖倒壊を起こすかもしれない。

とりあえずシュレーの丘とザオ遺跡のパスセージリングをリンクさせ、シュレーの丘降下と同時にザオ遺跡も降下するよう指示を書き加える。

シュレーの丘があるルグニカ平野と崩落により連鎖的に崩落する危険性のあるザオ砂漠は今のうちに降下させたほうが無難だろうという判断だ。

司令がうまく伝わるのか、2つとはいえ連鎖崩壊しないのかなど若干賭けの要素もあるが、回っている時間と体力が惜しい以上仕方ない。

その後グローブから振動計測機を取り出し、振動数を計る。すぐに計測が開始され、程無くして終了した。

「よし、ここでの用事は終わりました。戻りましょう」

「わかりました…です。けど戻ったらフェルは休まないとダメ…です！」

怒った調子で言うアリエッタに僕は苦笑する。

「そっだ、アリエッタ、少し重要なことを言いますからよく覚えておいてくださいね？」

「わかりました…です」

僕はアリエッタに話しながらシュレーの丘を後にした。

第二十五話 変わらない者、変わっていく者（後書き）

第二十五話となりました。

パッセージリングは多いので、イベントが少ないパッセージリングはまとめていきます。

あと少しずつアリエッタは明るくなってきており、皆さまのゲームでのイメージとズレてくるかと思いますがその辺りはご了承ください。

第二十六話 合流

シユレーの丘を出た僕達はシエリダンへと舞い戻った。

シエリダンには、ベルケンドから送ったキャシーさんとヘンケンさんの二人も無事到着していた。

まあ、ヘンケンさんとイエモンさんがぎゃあぎゃあ揉めてはいたが、作業は順調のようだ。

僕はヘンケンさんに計測結果を渡し、作業を続けてくれるようお願いしてからシエリダンを後にする。

なんだかんだあっちこっち回ることになったが、次が今のところ最終目標地点、崩落が懸念されるセントビナーだ。

間に合うか微妙だと思っていたが、アルビオール予想以上の速度とノエルさんのそののない操縦のおかげで若干早く予定を消化できた。そして僕達は崩落前にセントビナーに辿りつくことになった。

ルーク達も到着しており、ちょうど住民の避難活動を行っている途中のようだ。

ルーク達は空を舞うアルビオールを見て、ポカンとしている。

避難作業続けましょうよと言いたいところだが、こんな物を初めて見

れば仕方ないのだろう。

「ノエルさん、街の中央部に着陸を。その後住民をグランコクマに送って下さい」

一方ジェイドは住民を誘導し、着陸場所を開けてくれたようだ。

僕はそこに降りるようノエルさんに指示を出す。

「了解！ これより着陸態勢に入ります！」

アルビオールから降りた僕ら、いや僕に対してルークが複雑そうな顔で迎えた。

その隣では目を輝かせて、子どものようにはしゃいでる人が若干一名いたので足元に落ちていた石を投げつけ黙らせておいた。

まったくこの忙しい時に、空気を読んでください……。

「子どもや女性、病人、老人などはこのアルビオールでグランコクマまで送ります。ティア、アニス、それにアリエッタは誘導をお願いします」

それぞれの顔を見ながら僕は指示を出した。

次にガイのほうに視線を向け、

「ガイはすみませんが北から街を回って残っている人がいないか確認して下さい。僕は反対から回ります」

「フェル…その、…お前は……」

そこにルークがおずおずと切り出してきたが、僕は無視する。

おそらくナタリア姫の件だろうと当たりがつくが、相手にしている暇はない。

「ジェイド、マルクト軍および全体への指示をお願いします。ナタリア姫とルークはジェイドのサポートを」

「やれやれ、突然こんなもので現れて一方的に指示ですか……的確な指示で嫌味に感じますねー」

冗談めかして言いながらジェイドは苦笑し、皆も合わせて苦笑した。

「とにかく動きましょう。アルビオールでしたか？これのおかげで予定より早く終わりそうです」

ジェイドの声で全員動いていった。

そんな中でルークは僕の顔をちらちらと窺っており、動きにも機敏さを欠いていた。

「ルーク！文句や疑問は後です！今は動く時ですよ？」

「わ、わーてるよ！ちよつとアルビオールに驚いてただけだって……」

僕が声をかけると、はっとしたようにルークが慌てた。

「そういうことしておきますよ。さあ、行って下さい」

僕が再度急かすとルークも走っていった。あれなら大丈夫だろう。

避難活動に参加してからすでに二時間。

避難状況は七割ほど完了し、崩落までに間に合うだろう。

僕はふっと大きく息をつき、気持ちを入れ直した。

気が緩み始めたときこそミスを犯しがちだ。ここで余計なミスを犯すわけにはいかない。

もともと、すでにここまでくれば懸念することは一つしかないわけだが……

「フェル、俺のほうは見回り完了だ。残っている人はもういないよ」

「了解です。こっちも終わりました。僕はアルビオールに戻りますので、外はジエイド達のほうをお願いします」

追加でガイに指示を出し、僕はアルビオールの着陸場所に戻る。

避難誘導を始めた当初は長蛇の列をなしていた場所だったが、今では百人前後残っているだけだった。

その列の中に見知ったピンクの後ろ姿が幼い子の相手をしたり、怪我をしている人に治療術をかけている様子が見て取れる。

アリエツタの成長を嬉しく思いつつ、少しさびしくも思う。

「フェル、手が空いたならサボってないで手伝って」

ティアに指摘され、結局気を抜いている自分に気付く。

苦笑しながら、僕はティアのほうへと駆け出した。

「まったく…フェルらしくないわよ？」

「すみません、ちょっと嬉しかったものですから」

僕が言うとティアはアリエツタを見て笑った。

「そうね。私も少し意外だったわ。私達と別行動している時に何かあったの？」

「…少しね。ただ僕も注意しておきますが、ティアも彼女が無理しないように見ていてくれるとありがたいです」

ティアは少しだけ難しそうな顔をする。

「彼女を大事にしているのはわかるけど、もう少し信頼してあげたらどうかしら？」

「信頼しているようにはティアから見えませんか？」

僕が逆に尋ねるとティアは小さく頷いた。

「……アリエッタだけじゃないわ。私達のことも、ひよつとするとピオニー陛下のことも……」

言いつらそうにしながら言葉を続けたティアに対して、僕はまた苦笑した。

「別に頼りにならないとかいうわけではないんですけどね。ただ……っ!?」

言葉を切り、僕は離陸しようとしていたアルビオールの前に飛び出た。

そこに、音素の凝縮体と思われるレーザー砲が降り注いだのだった。

「っ!このっ!」

間に合った僕はレーザーを音素を込めた両手で受け止めた。

しかし勢いが強く踏ん張りきれない。このままではアルビオールに僕ごと激突してしまう。

「させない!」

そこでダアト式封呪を展開し、勢いを削ぎつつ、両手に力を込め…、

「はあっ!」

上空へとレーザーの軌跡を逸らした。

労力を考えると左右どちらかに逸らしたかったが周りにはまだたく

さんの方がいるため出来なかったのだ。

「フエル!?!」

ティア、アニス、アリエッタが声を上げ、周りにいた住民たちから悲鳴が上がる。

「僕のことは後です!ティア、アニスは住民を至急ここから非難させて!アリエッタはジェイド達に連絡を!急いでっ!」

「でも!?!」

ピンクの後ろ姿が遠ざかるのを視界の端に収めつつ、二射目のレーザーを同様の方法で逸らす。

残る二人はまだもたついている。

「急げっ!?!」

そこに三射目。今度は住民のほうに飛んできたので急いで走り込み、逸らす。

ここにきてやっと二人が動き出してくれた。

射手の姿は見えませんが、射角から雲の中に潜んでいるようですが……。

とにかく集中力を途切れさせず、ただひたすらにレーザーを逸らし続ける。

時間を稼ぐことが今の最善手だ。

第二十六話 合流（後書き）

第二十七話となりました。いつも読んでくださってる方々、本当にありがとうございます。

何やら中途半端なところで切れてますが、戦闘は以下次回です。

戦闘シーンは難しいですが……

あと人見知りのアリエッタが避難の手伝いをしていますが、前話で敬愛するフェルから仕事を頼まれたことにより、やる気やら自信やらが増加してるためです。

その他、ユリアシティで同年代のティアと話したりノエルと話したことなども影響しています。

もっとも大人の男性などには変わらず気後れしてしまいましたが、子どもや女性ならそれなりにがんばれるといったところですよ。

ではまた次回。

誤字脱字報告、感想お待ちしております

第二十七話 一方通行の想い、だけど(前書き)

文章が全部消えること、2回……

操作ミスは恐ろしいです

第二十七話 一方通行の想い、だけど

そして戦端が開かれて10分ほど経過した。

周囲の人たちはすでにこの場におらず、僕が守らないといけないのは後ろのアルビオールだけだ。

下手にアルビオールに飛び立たれていたらさすがに守り切れず、撃墜させられていただろう。

冷静なノエルさんの判断がありがたい。

「まったく……こんなになざるなんて！なんて面倒なんですか！あなたは！」

金切り声を上げながら空飛ぶ椅子に乗った男と、今まで攻撃してきていたであろう空飛ぶ妙な譜業兵器が雲の隙間から降りてきた。

「久しぶりですねー、被験者イオン。まさか生きていたとは。ヴァンも驚いていましたよ？」

「…デリスト響師、こちらはいろいろ忙しいので後にして下さい」
隣の譜業兵器からも分かるように彼は天才と呼んで差し支えないほどの能力がある。

それでも独善的で周りの迷惑を省みないところが昔から個人的に気に入らない。

「ふん、あなたがうろうろしているのは目障りなんですよ」

「なら僕だけを狙えばいいでしょう？セントビナーの住民を巻き込もうとしないで下さい」

こんなこと言っても無駄なことはわかっている。彼が止めるはずがないことも。

それでもこうやっているのは、会話を続けることで時間を稼ぐためだ。

「はん！偽善者のあなたなら身を呈してでも守ると思ってましたからね。仮に虫けらでもが死のうと私には何の関係もありません」

言ってることも、その金切り声も、何もかもが気に障る。

「さて、せこせここと回復は済みましたか？ なら…やりなさい、ガイザーデイストRX！！」

デイストの命令で譜業兵器が急降下してきた。

避けることは可能だが、アルビオールを背にしている以上受け止めるか弾くしかない……

とはいえ、かなりの質量がありそうなので受け止めるのも弾くのも困難だろう。出来てもこの一撃がせいぜいだと思う。

だとすると移動手段になっている脚部のブースター、飛行手段にな

っている肩のプロペラは破壊したい。

「ハハハッ！！これで終わりです！ぺしゃんこになってしまいなさい！」

体から余計な力を抜き、僕はすつと腰を降ろす。

チャンスはこの一度のみ……神経を研ぎ澄ませ！音素を練り上げろ！そして……決める！

自らを心の中で鼓舞し、タイミングを計る………今っ！！

「行きます、獅子穿孔！！」

留まるのではなく前に出る。

ダアト式を展開。

右手を突き出し、音素を獅子をかたどった闘気に変え、譜業兵器左舷下部に叩きつける。

譜業兵器は衝撃で態勢を崩し、よろめいたがそれでもアルビオールに当たってしまう。

そして、今の攻撃で右手が動かない………それでも！

「獅子穿孔弾！！」

構わず左手でもう一撃。左手も限界だ。

しかし譜業兵器の進路は少しずれただけ……だとしても！

「はああああ！牙狼連濤打！！」

譜業兵器の後ろに勢いのまま流れるように回り込み、必殺の連蹴りを放つ。

「カイザーデイスト！？」

譜業兵器は連蹴りでアルビオールから完全に外れ、そのまま民家の壁に突っ込んだ。

「ゴホっ、がはっ！……ノエルさん、ナイス判断です……」

一方僕も反動で弾き飛ばされ、壁に激突することでやっと止まった。衝撃は大きかったが、意識を気合いで繋いでいるとアルビオールは上空へと舞い上がっていった。

これで人質を取られることはもう無い。

「きiiiiiiiiい！何をやってるのです！動きなさい、カイザーデイストRX！！」

デイストがリモコンを操作するとガラガラと瓦礫を払いつつ、譜業兵器が立ち上がった。

装甲は所々ひしゃげ、プロペラ、ブースターから煙が立ち上がっているがまだまだ動けそうだ。

そして、レーザー砲を動けない僕に向けてきた。

「撃ちなさい！カイザーデイス…」

「砕けましてよ！ストロークエイカー！」

「荒れ狂う流れよ、スプラッシュ！」

デイストが右手を天に挙げ指示を出そうとした瞬間、声が響く。

飛び込んだナタリアが三条の矢を放つ。矢はレーザー砲に突き刺さって轟音を立ててへし折る。

さらに譜業兵器の上空から水流が降り注ぐ。

「トおおおおお！？」

「光の鉄槌！リミテッド！」

そして、驚きの声を上げるデイストを遮り、光が譜業兵器に襲いかかる。

「受ける雷撃！襲爪雷斬！！」

FOFの第六音素を用い、走り込んだルークがとどめとばかりに剣で切り上げ、空中で反転、雷撃と共に切り落とした。

「フェル！遅れてごめんなさい！」

そして壁に背を任せた僕の方には四人に譜業兵器の相手を任せたティアとガイが駆け寄ってきた。

「…っ、…酷い…」

僕の状態を見て、ティアは絶句する。

両手はダアト式を纏っていたとはいえレーザーの熱で火傷、それに攻撃の反動で罅が入っているか、もしくは折れているかもしれない。脚は両手ほどではないが、打撲くらいはしていそうだ。

その他、壁に激突したことで全身に細かい傷があり、出血もしていた。

「ティア、すぐに治療を！」

譜業兵器がこちらに来た時に備えて、僕らに背を向け仁王立ちになったガイが声を上げた。

はつとしたティアが慌てて譜術をかけてくれる。

「ごめんなさい。…命を照らす光よ、ここに來たれ。ハートレスサークル！」

ティアの譜術で痛みが和らいでいくが、心地良さに意識を保つのが辛い……。

「すみませんね…ティア……」

「しゃべらないで！重症なのよ？あなたは！こんなに無茶して！」

ティアは心配半分、怒り半分くらいの顔をした。

僕はそのまま眠ってしまいたい誘惑に耐えた。まだ気になることがある。

「…アリエツタは…どうしてます…？」

「街の入り口にいた俺達を全速力で呼びに来てくれてな、今は街の入り口で休んでるよ」

背を向けたままガイが答えてくれた。

「…そう…ですか…頑張ってくれたん…です…ね……」

僕は安堵し、意識を手放した。

side ティア

「…そう…ですか…頑張ってくれたん…です…ね……」

「本当…馬鹿……」

小さく呟いた後、フェルは意識を失ってしまった。

「気を失ったのかい？」

「ええ、これだけ無茶をやらかしておいて、気を失う瞬間までアリエッタのことを気にするなんて……」

そもそも、この怪我にしてもセントビナーの住人を守った結果だ。

フェルは攻撃を受けるのではなく、その身軽さで回避するタイプなのに……。

「フェルらしいといえばらしいけどね……やれやれ……」

ガイの顔は見えないが、困っているのはよく分かる。

「それで、怪我の具合はどうなんだい？」

「…命に別状はないわ。けど、間違いなく重症ね」

こうしている間にも四人はよく分からない譜業兵器に攻撃を加えており、譜業兵器からは煙が上がっている。

もうじき戦闘は終わるだろう。

「それと治療術をかけ終わったら医者に見せたほうがいいわ」

私は治療術をかけながら気を失ったフェルの顔を見た。

まだまだあどけない顔。

小柄な体躯。

身長も私とそれほど変わらない。

しかし背負っているもの、覚悟がこんなにも違う……

「……フェルにとって私達って、一体何なのかしらね……」

強くそう思う。こんなになるまで一人で背負わなければいけないほど私達は頼りにならないのかしら……。

「……俺には答えられないよ。……いや、俺は“フェル”がどういう人間かさえ捕らえきれていないところがある。ただ……」

「ただ？」

私が問い返すとガイは顔だけフェルの方に向け、

「俺は#フェルのことを仲間だと思ってるし、目を覚ましたらあんまり心配かけさせるなって文句を言ってるさ。な？」

そう笑って私に同意を求めた。

ガイの言う通りかもしれない。たとえフェルがどう思っていて
も……。

「……そうね、本当に、そう……」

聞いてくれるか、聞いても改めてくれるかは全く分からない。

それでも私達がフェルのことを心配しているというのを伝えるくらい許されると思う。

私達にとって間違いなく仲間なのだから……

第二十七話 一方通行の想い、だけど（後書き）

第27話となりました。読んでくださった方々に最上級の感謝を。

しかしあとがき書くのもこれで3回目。。。

とりあえずカイザーディストはナタリア、ジェイド、アニス、ルークの4人が片付けました。

今回はフェルの事情がちょっと明かされます。

また次回読んでいただけたら幸いです。

感想、誤字脱字報告お待ちしております

第二十八話 預言を超えるということ

side ジェイド

セントビナーで鼻垂れ馬鹿と馬鹿の作ったガラクタを蹴散らし（その時に馬鹿がふざけたことを言っていたので、次あったら本気でお仕置きが必要でしょうね）、アルビオールでグランコクマに戻ってくることになった。

陛下への報告と重症を負ったフェルを医者に見せるためだ。

フェルは現在処置室で治療中。

他の皆は処置室の前で待つとの事だったので、私は一人で陛下と謁見し、病院に戻ってきたところだ。

しかし……

やれやれ……。

私の口から苦笑が漏れる。

処置室の前ではルークとアリエッタが椅子にも座らずそわそわと歩き回り、その後ろをミュウがピヨピヨ。

ナタリア、アニス、ティア、イオン様はじつと処置室の扉を心配そうな顔で見つめ、一番落ち着いているかと思っていたガイも腕を組みながら壁に寄りかかり、右足で床をコツコツと叩いていた。

「皆さん、少し落ち着かれていますか？ 特にルークとアリエッタ、ついでにミュウ」

「…じゅめん」

「じゅめんなさいです」

私が言うと二人は謝り、とりあえず椅子に座ったもののすぐにそわそわし始め、一分後には立ち歩き始めた。

はあ…言ってもやはり無駄でしたね。

「…なあ、ジエイド？」

私が再度心の中で苦笑していると、ルークが不安そうな顔で私を見る。

「なんです？」

聞き返しながら、私はまたルークが馬鹿なことを言う気がした。

「フェルは大丈夫だよ…、もしものこととか…」

「もしもなんてないです！！」

アリエッタが大声を上げてルークを遮り、掴みかかった。

「私だって不安なんです！でも、そんなこと軽々しく口にしないで
です…！！」

「おっ、おっ…その…じゅめん…」

ルークが謝るとアリエッタは腕を離し、椅子に座り込んだ。

ルークの空気が読めないところは相変わらずですね……。

彼が変わろうと努力していることは分かるが、こういうところはまだ全然だと思う。

そして、アリエッタはやはりフェルに依存し過ぎですね、仕方ないでしょうが……。

フェルの怪我は命にかかわるほどではないが、今後も彼が無茶する可能性はかなり高い。

その過程でそれこそ“もしも”があった時、彼女はどうなるのだろうか……。

「はいはい、二人とも揉めない。病院ではお静かに。それとルークは後で“お話”しましょう」

ルークの顔が青ざめる。

「お話って…何の話だよ？」

「さあ？それは聞いてのお楽しみです」

ガイが何か言いたそうに視線を向けてきたので笑顔を返すと、目を逸らされてしまった。

失礼な話です

しばらくして処置室の扉が開いた。

医者の話では2、3日すれば目を覚ますだろうが、少しの間安静にしておいたほうがいいとのことだ。

ふむ、しかしやることは残ってますね…。

フェルが別行動中、何をやってたのかは陛下から少しだけ教えてもらっている。

フェルが動けない以上、残りは私達がやった方が良さだろう。

まずはシェリダンに向かい、振動停止装置がどの程度できているか確認。

その後、外殻大地を降下させるためにシュレーの丘とザオ遺跡以外の各地のパッセーリングを回らなければならない。

それとヴァン謡将の動きも気になる。

状況を整理すると、やることは結構残っている。

しかし、具体的にフェルがどのような意図で、どこにいたのか把握できていないのが辛い。

「……佐！カーティス大佐！」

「あ、すみません。少し考え事をしていました」

どうやら医師に呼ばれていたようだ。

思考の内に入り込むと周りへの注意が散漫になってしまうのが私の欠点ですね。

「大佐に少しお話が……」

「ふむ、分かりました。皆さんは先に宿に行っていてください」

ルークが少し渋ったがティアに「わがまま言わない」と叱られながら引きずられていった。

完全に尻に敷かれてますね、ルークは。

アリエッタも何か言いたげだったが、私が笑いかけるとお辞儀をして皆について行った。

皆がいなくなると医師は私を伴い、面会謝絶と書かれたフェルの病室に扉を開けた。

ベッドの上にはフェルが眠っており、顔色も悪くないように見える。

「で？私に話というのは？」

私が促しても医師は少し躊躇いを見せたので、「話とは？」「と再度促すと口を開いた。

「…医師として患者の情報を話すべきではないのですが…。私も陛下によって設立された研究所に出入りしております。彼のことを多少聞いております」

「前置きは結構。本題に入ってください」

本題に入らないことにやや焦れた私は医師を急かした。

「……彼の体のあちこちに複数の処理、それも認可されてない処理が見受けられました」

「…何？どういうことだ？」

予期せぬ言葉に私の言葉も荒くなる。

「術式を見るに処置された時期はここ3年以内。特に心臓に関しては働きを助ける譜業機関が埋め込まれており、もちろん未認可です」

「…副作用は？」

私がかくと医師は表情を暗くする。

「周りの細胞が半ば壊死しています。また心臓以外の臓器に関してもかなり無理な術式が施されています」

ほとんどが未認可の術式ですと医師は説明した。

「その上、手術によって低下しているであろう体力を薬品や体内に刻まれた譜陣によって強制的に回復しているようです。さらにここ最近、大量の瘴気を取り込んでいます…」

医療をかじっている私にはそれがどれほど異常なことか良く分かる。

「今のところ絶妙なバランスで安定していますが、いつどうなるか……」

すなわちフェルは生きているのが不思議だということだ。

side ルーク

宿に着いた俺はフェルのことが気になって全く落ち着けず、部屋の中をぐるぐると歩き回っていた。

アニスやティアがそんな俺を邪魔そうな目で見たが、それどころじゃない。

ジェイドにだけ話して何なんだろう……？

「おいおい、ルーク。旦那ならすぐ来るって、少し落ち着け」

そう言ってガイが苦笑した。

「仕方ないだろ？気になるんだから。くそっ！あの時もっと早く駆けつけることが出来たらフェルがあんな怪我しなくてすんだのに……」

「それはルークが気に病むことじゃないってフェルなら言うと思うです」

俺が言うとベッドに腰かけ、膝の上にミュウを乗せて頭を撫でていたアリエッタが首を振った。

「ルークの言っていることは別段おかしいことじゃないと思いますけど、どういう意味ですか？」

ナタリアが尋ねる。

「アリエッタはルーク達を全力で呼びに行きました。そしてルーク達も出来る限りのことをしたと思うです」

それは当然だ。色々なことがあったけど、俺はフェルのことを大事な仲間だと思っているんだから。

「ならそのことに対してフェルは絶対に責めたりしないです」

ナタリアの疑問にアリエッタは当たり前といった様子で答えた。

「へえ〜。アリエッタ、フェルのことよく見てるじゃん。ちょっと意外〜」

アニスと俺も同じ思いだ。フェルの後ろをずっとついて行ってるだけかと思っていたのに……。

「……よく見ていないと、またいなくなっちゃうかもです……」

「あ、ごめん…私そんなつもりじゃ……」

アニスは慌てて謝った。

そうだった、フェルは二年半の間アリエッタの前から姿を消してたんだ。大切な人が突然いなくなつて傷ついてないはずがないんだ……。

「ううん、アニスが謝ることじゃないです。フェルはアリエッタに謝ってくれたし、今は一緒にいてくれるから大丈夫です」

そう言つてアリエッタはにっこり笑つた。

コンコン……ガチャ

「やあ皆さん、お待たせしました」

ノックと共にジェイドが戻ってきた。

「ジェイド！フェルはどうなんだ！！」

俺が慌てて訊くとジェイドは呆れた顔をする。

「どつて…別に何もありませんよ？医師から説明された通りです。私への話は治療費や手続き上のことですよ」

「なんだ…良かった……」

わざわざジェイドだけ呼ばれたから何事かと思つたけど、大した話じゃなくて本当によかつた。

「それよりフェルが動けない以上、私達が動くべきでしょう」

呆れ顔だったジェイドが表情を改めてる。

「フェルが何をしていたのか、わたくしは知りませんが、とにかく戦争を止めることが重要ではなくて？」

戦争が始まったらどれだけの人が死ぬか分からない、確かに止めないといー！

「バチカルへ向かうのは危険だとしても、前線指揮をとっているであろうカイツールには向かうべきだと思いますわ」

ナタリアが言い終わるとガイが手を上げた。

「セントビナーの住民を避難させたことでエンゲーブは無防備だ。彼らも移動させられないか？」

エンゲーブの人達には世話になったし、絶対に助けたい。くそっ！やることが多い……。

「はい」とアリエッタが手を上げた。

「ん？何です、アリエッタ？」

ジェイドが聞くとアリエッタはポケットからメモ帳を取り出し、ペラペラとめくる。

「えーと、最初に行くのはザオ遺跡です。もしもの事態に備えたほうがいいだろう、とのことですよ」

「どづいうことなの？フェルから何か聞いてるの？」

ティアの質問にアリエッタはメモ帳を見ながら俺達と別れてからフェルが何をしていたのか、これから何をする予定だったのか一生懸命説明してくれた。

「なるほど、主戦場になるルグニカ平野を含めセントビナーからケセドニアまで外殻大地をリフトのように降下させる…ですか」

ジェイドは眼鏡のブリッジを押し上げながら呟いた。たぶんフェルの計画について難しいことを考えてるんだと思う。

「スケールの大きい話です。ですが、成功すれば戦争どころではなくなりますね…タイムテーブル的にエンゲーブに兵が迫るまでに降下するようですよ」

大地が降下することで戦争は止まるらしい。だったらわざわざカイツールにもエンゲーブにも向かわなくていいみたいだ。

「ええ、ほんと、すごい……」

俺もティアの呟きと同じ気持ちだ。

ナタリアを犠牲にしようとしていたことは今も納得いかないけど、フェルが先へ先へと考えていることはよく分かった。

「降下まであと約3時間。アリエッタの言う通り不足に事態に備え
ザオ遺跡に向かいますよ」

「ああくええくはいくはいです」

全員の返事が合わさった。…あれ？

「ちょっと待って、アリエッタも一緒についてきてくれるの？」

ティアが代表してアリエッタに尋ねる。

「はいです。もちろんフェルのことは気になります……」

アリエッタは少し目を伏せる。

「でもここにおいても何も出来ないから。フェルのためにアリエッタ
が出来ることがあるなら、やりたいから」

アリエッタは顔をあげ、ティアの目を真っ直ぐ見ながら答えた。

「そう、じゃあ一緒にがんばりましょう。大佐、構いませんよね？」

ティアがアリエッタに笑いかけながらジェイドに尋ねる。

「ええ、そのほうが私としても助かります」

「ありがとうございます。皆さん、よろしく願います、です！」

アリエッタはぺこりと頭を下げた。

第二十八話 預言を超えるということ（後書き）

第二十八話となりました。読んでくださった方々、ありがとうございます。

はてさて、ちょっとしたフェルのネタばらしですが平たく言うとペースメーカーをイメージしてもらえればいいのかと思います。

本来死んでるはずのキャラなので、無理やり生きているという設定にしました。

そしてまたしてもフェルは別行動。アリエッタは今回ついていきません。

それでは次回もまた読んでくだされば幸いです。

感想、誤字脱字報告お待ちしております

第二十九話 “生きる” ために

目を覚ましたらすぐそこに陛下がいた。

「…何をしてるんですか？」

「いや、別に何も」

言いながら陛下は移動し、隣のパイプ椅子に腰掛ける。

「そうですか…」

僕はゆっくりと身を起こした。

真っ白なシート、清潔な部屋…どうやらここは病室らしい。

僕は固まった筋肉を解すために肩を回した。少しだけ両腕が痛むが、これくらいなら大丈夫だろう。

さて…、

「とにかく目が覚めて良かった…ふべろー!!」

いけしゃあしゃあと、のたまう陛下をぐーで殴っておく。まったく…。

「何故殴る！？俺が何をしたッ!？」

「やかましいです！その手に持つてるのは油性ペンでしょうが!」

「それがどうした！まだ何もやっておらんわ!」

「いばることですか！いい加減くだらないことは止めて下さい!」

「何だと！？普通、寝てる奴がいれば顔にラクガキは基本だろうが！！！」

「そんな基本とつと捨てて下さい！！！」

……なんて会話を以下省略。

果てしなく不毛な言い争いをしていた僕達は何事かと思って駆けつけた看護師さんに「病院では騒がないで下さい！」と怒られた。

くそ、僕としたことが……！

お説教が終わり、看護師さんは「安静にして下さいね！」と注意を残し戻っていった。

「やれやれ、あれでは白衣の天使というより夜叉だな」

隣で恐ろしいことを言っているが僕は冷静にスルーしておく。お説教は勘弁だ。

「で、現状は？」

僕の簡潔な問いに陛下も表情を改める。

「お前さんがここに運び込まれてから二日経っている。それとセントビナーの住民に被害は出ておらん。ありがとう」

陛下は椅子から立ち上がり、頭を下げた。

僕は「いえ…」と首を振って答える。

「それとお前さんの代わりにジェイド達が向かった。アリエッタも付いて行ったようだぞ？」

そういうことなら現状、僕が動く必要はないだろう。

「その様子だとこうなることは予想通りというわけか？」

「ええ、倒れる可能性があったので。やるべきことはアリエッタに話し、ジェイド達に伝えるようお願いしていました」

もっとも一緒に着いて行ったのは彼女の意思ですが…と僕は続けた。

倒れる直接の原因となったのはパッセージリング起動時に流れ込んできた瘴気が予想より多かったためだ。

セントビナーでの戦闘はトリガーになっただけで、戦闘がなくても倒れている可能性は僅かながらあった。

そこでシュレーの丘から移動する間、アリエッタにこれまでとこれからやることを教えておいたのだ。

「そうか…それとお前さんの体のことだが……」

「……陛下は僕の体について報告を受けているわけですね……」

陛下は神妙な顔で頷いた。

「他の人は？」

別に知られても今更なので、さして不都合はないが、誰に知られたのかは把握しておきたい。

相手によっては面倒事が起こるだろうから。

「お前の治療に当たった医師、そして俺と俺に報告してきたジェイドの三人だ」

ふむ、アリエッタやルーク達に知られていないのなら何ら問題ありませんね。

「なぜ黙っていた？お前さんの無茶は今更だが、そんな体調ならば後は俺やジェイド、ルーク達に任せることは出来んのか？」

陛下の問いに僕は首を横に振った。

「僕から無茶を取ったら死体しか残りませんか？」

.....。

沈黙が流れる。口火を切ったのは陛下のほうだった。

「...ずいぶん言い方だな。誤魔化さず詳しく説明しろ」

怒りさえ滲ませた声で陛下は尋ねた。

「や、体調のことを知られた以上誤魔化す気は毛頭ありませんよ？」
僕が苦笑すると「さっさと説明しろ」と陛下が促した。

「では、まず、陛下は秘預言をご存じですか？」

「ああ、人の死期に関する預言だったな……おい、ちょっと待て……」

陛下は気づいたようなので、僕は頷いた。

「お気づきの通り、僕はすでに秘預言以上に生きてるんですよ。無茶をしてね」

だからさっきの言葉に繋がるのだ。無茶をしなければとうに死んでいるのだから……

「いや……しかし、お前さん秘預言はヴァン謡将の襲撃ではなかったのか？」

導師職を追われる原因となったヴァンの襲撃。

秘預言が間近に迫っていることを知っていた僕も当時はそう思っていた。しかし……

「いえ、あれはどうやら違ったみたいです。僕の死因は病。ヴァンの襲撃がなくても数ヶ月後には命を落としていたはずですよ」

秘預言は通常よりはるかに詠み取るのは難しい。

元々詠むこと自体が禁止されていたために洗練されていないせいだろう。なので、秘預言には多少幅が生じたと考えられる。

「ダアトを出た僕はしばらくして体に不調を感じました。そこでヴァンの拠点を確認がてらベルケンドに行き、診察を受けたんですよ」
その時の医師がシュウさんだったわけだが、そこはどうでもいい。

「で、すぐに入院するようになると言われたんですが……」

入院し、延命治療を受けるといふ選択肢は僕には無かった。

「断つてからは薬などで騙し騙しやってたんですが、そのうち体があまり動かなくなってきた……」

比例するかのようにはヴァンが思っていた以上に着々と準備をしていること、レプリカ技術、ルークの存在、パッセージリングについてなど様々なことが少しずつ見えてきて、のんびり寝込むわけにはいかなかった。

「結果として未認可だろうと見えそうなものはすべて使ってもらったことになったというわけです」

シュウさんは強固に反対したが……。

「…事情は分かった。何故その時に全て俺に任せなかった？何故お前がそこまでしてやらねばならなかった？」

陛下の言う通り、全てをマルクトに任せ自分は退くという選択も考えはした。けれど……、

「理由は三つ。現在でさえヴァンの計画全容を把握しているわけではなく、当時はさらにマルクトを動かすほどの情報を得ていなかったこと」

ヴァンの情報隠蔽はほぼ完璧だった。あの段階でマルクトを動かせる可能性は低かった。

「二つ目は不測の事態に対して、国ではなく個人が動いたほうがいいと判断したこと」

これは今も変わらない。

個人のほうがフットワークが軽いのは当然だろう。

「そして三つ目は……“生きていたかった”からですね」

何だかんだ言っても三つ目の理由が一番大きい。

「どういう意味だ？それでは矛盾しているだろうか？」

陛下は怪訝そうな顔で訊いたきた。

「入院して治療を受けても完治はせず、余命を伸ばすことしか出来ないと言われました。徐々に動かなくなる体を抱え、寝ている日々など僕は耐えられません……」

ひたひたと迫る死に怯えながら独りで過ごしているなど考えただけでぞつとする。

「それより痛みも苦しみも責任も全て背負って自分の足で立っていたい。僕の中でそれが“生きる”ということなんですよ」

ただのエゴに過ぎないが、曲げることなど決して出来ない。

「……一方で自分が倒れた時のために最低限のことは伝えていた……というわけか……」

「ええ、自分のエゴで世界を危機に晒すわけにはいきませんから僕は小さく頷いた。

第二十九話 “生きる” ために（後書き）

二十九話となりました。何時も読んでくださってる方々、ありがとうございます。

話自体は進んでません。フェルの考え方の回です。

フェルはじつと余生を過ごすというタイプではなく、最後の最後まで突っ走ろうとする人間です。

気高い生き方とも言えなくもないですが、周りからすると心配の種類ですね。

その上行動力、実力があるのである種、迷惑かもしれません。

さて、次回は話が進みます。というかちよいと飛びます。

楽しんでいただけるよう精進したいと思います。では。

誤字脱字報告、感想お待ちしております

第三十話 最善の手

透き通るような青空

陽光にきらきらと反射する水面

通りを歩く人たちはどこか焦りや不安が見えるのに、太陽はただただ世界を光で満たす

目を覚ましたときには、すでにイニスタ平野の降下は完了していた。結果戦争は両軍がぶつかり合う前に片づいたらしい。

今は“イニスタ平野の消失”という噂が広まり市内ではちょっとした混乱が起こっているようだ。

陛下から「しばらく動くな！」と厳命された僕は病室の窓際に座り、この一件について考えごとをしていた。

「予定通り最善の手を打った、ですか……」

戦争での犠牲者数を仮定すると、世間に混乱や不安が蔓延しようと被害は圧倒的に少なくなったといえる。

「それでも0ということはありませんでしょうね……」

ゆっくりと大地を降下させたとはいえ、亀裂から落下し亡くなった

人もいるだろう。

そして、振動停止が終わっていない。魔界に降ろされてしまった兵士達や連動して降下したケセドニアの人々は今頃瘴気に苦しんでいるはずだ。

考えられる中で一番犠牲の少ない方法だったと思う。けれど…本当に最善の方法だったのか？他にもっといい方法はなかったのか？という今更な疑問は尽きない。

「フェルさん！お願いです、皆さんを助けて下さい！！」

物思いに耽っていると突然ノエルさんが部屋に駆け込んできた。

「あ、あの、私のせいで怪我してるフェルさんにこんなことを頼むのは心苦しいんですけど！アリエッタさん達が捕まって！あの捕まったのも私のせいで…！」

「ストップ！ノエルさん少し落ち着いて下さい」

僕は焦って断片的なことしか言えないノエルさんを鋭い声で制した。

「二分で着替えて準備します。ノエルさんは部屋の外で待って下さい」

立ち上がり、着替えが仕舞われている棚を開く。

「は、はい！」

ノエルさんは慌てながら部屋の外に出ていった。

断片的な情報だったが“アリエツタ達が捕まって僕の力が必要”だ
ということはわかった。動く根拠としては十分すぎる。

「…勝手に出ていったらまた陛下に怒られるでしょうね」

一応“心配しないで下さい”とだけ書き置きを残しておく。まあ怒
られるだろうが、それは甘んじて受けよう。

身支度を終えた僕は病室から抜け出した。

飛行譜石を奪われ飛べなくなったが、海上なら進めるというアルビ
オールに乗り、僕はバチカルを目指す。

ノエルさんの説明によると、ルーク達はザオ遺跡で待機する班と自
由都市ケセドニアに向かう班に分かれたらしい。

前者は有事の際にパッセージリングの操作。後者は降下に際し魔界
の説明や注意を権力者であるアスターにするためだそうだ。

「その後、合流してからイオン様がダアトに一度戻って調べたいこ
とがあるとおっしゃったので…」

ダアトにみんなを送り、ノエルさんは待機していたときにオラクル
兵に捕まったらしい。

「しばらくダウトで拘束されていたんですが、アッシュさんに助けてもらいました。その時に皆さんがバチカルに連れて行かれたとおっしゃられて…」

「ふむ、アッシュは他に何か言ってますでしたか？」

顎に手を当てながら僕は訊いた。

「私が捕まったりしたからナタリアがヤバいことになったんだぞ！と……それで私、どうすればいいのか、わからなくて……」

グランコクマの僕に助けを求めたらしい。

「はあ……アッシュは何がしたいんでしょうね……」

アッシュの境遇は知ってるし、ナタリア姫を大切に想っていることは分かる。だが……

「すみません、私のせいでフェルさんにも迷惑をかけてしまってます……」

落ち込んでいるノエルさんは操縦桿を握りながら謝ってくる。

「気にしないで、と言っても気にすると思いますが、人には出来ることと出来ないことがあります」

オラクル兵に捕まったらしいが、民間人のノエルさんが逃げきるなど出来るはずがない。

「それに、ノエルさんが知らせてくれたからこそ僕もこうやって動

くことが出来ているんですよ？むしろ感謝してます」

実際に投獄までされ不安や恐怖に苛まれたはずだ。

助けられた時にそのままシエリダンに戻っていたとしても全く不思議ではない。

にもかかわらず僕を呼びにきてくれたのだ。どこを責めることができるだろうか？

「ノエルさんは何も悪くない、僕が保障します。もし次誰かがあなたを責めるなら僕が言い返します。それにみんなは僕が助けますよ。だから、ね？」

正直状況はわからずバチカルでは臨機応変に…言い換えると行き当たりばったりで動くしかない。

それでも僕は自信を持ってノエルさんに言い切る。

「はい…お願いします」

少し顔を赤らめてノエルさんは操縦桿を握り直した。

アルビオールをバチカルに乗り付けるわけにはいかないのだから近くの海岸に降ろしてもらおう。

アルビオールはとりあえずベルケンド付近で待機してもらうことにしたが、危なそうならすぐに移動するようにと言っておいた。

「すでに何かが起こってますね……」

バチカルに入ろうとした僕が見たものは出入り口を固める多数のキムラスカ兵達。

「街から聴こえるざわめき、キムラスカ兵達の戸惑っている様子、極めつけは外ではなく中に向けている警戒……。なるほど」

状況から推測するにみんなは脱走中。手引きしたのはアッシュといったところだろう。

「なら出入り口の確保ですね」

独り言を言いつつ、音素を集める。

数も多いので譜術の方が手っとり早い。

「ピコレイン！」

第七音素を具現化。キムラスカ兵の頭上から大量のピコピコハンマーを落とした。

ハンマーを受けたキムラスカ兵達はばたばたと気絶していく。

「こういつ時に傷付けず無力化出来る良い術なんですが……」

導師時代にダアトの書庫で見つけた魔導書で習得した譜術だ。

だが使っておきながら、何で第七音素でこんなことが出来るのかはいまいち疑問だ。

「まあ、使えるなら何でも構いませんね。とりあえず中に入って…
必要なくなりましたね」

気絶したキムラスカ兵の向こうから見知った一団が走ってくる。

「フェ…<フェル!!>」

先頭のルークが声を上げようとしたところにアリエッタが声を被せた。

「おっと…!!」

アリエッタは走る勢いそのまま抱きついてきたので柔らかく受け止める。

「怪我はもう良いんですか…!!」

言いながらペタペタと僕の体中を触る。

「ええ、もう大丈夫ですよ。そっちも色々あったようですね」

僕はアリエッタの頭をそつと撫でた。

そこに視線を感じたので視線を向けるとジエイドだった。

「再会を喜ぶのは後です。バチカルから出るのでしょうか?」

僕がジェイドに視線を合わせて訊くとジェイドはため息を吐いた。

「ええ、バチカル市民やアッシュが兵を止めてくれてますが、一刻も早く離れた方が良い」

アッシュの名が出た瞬間ナタリア姫の顔が不安げに揺れた。

「ベルケンドでアルビオールが待機していますのでそれで脱出を。少し僕も時間稼ぎに参加してきますので」

アリエッタから離れ、街の方に向かう。

その袖をアリエッタがぎゅっと掴んだ。

「アリ……」

「行かないでは言わないです……ただ、帰ってきてください、です」
言いかけた僕の言葉をアリエッタが遮る。

僕はアリエッタの頭を軽く叩いた。

「ええ、約束しますよ。それでは行ってきますね」

「はい、行ってらっしゃいです」

アリエッタに笑いかけ僕は街の中央に走り出した。

後ろから「フェル！あんまり無茶……」「ちょっとルーク！邪魔したらダメでしょ！」「ルーク、超々空気読めてない」「はっはっは、お子様ですね」とか後ろで何か聞こえた気がしたが、気のせいだろう、きつと。

第三十話 最善の手（後書き）

第三十話となりました。読んでくれた方々、ありがとうございます。

話はちょっと飛び（フェルがすでに降下させてるからですが）、ゲーム中の偽王女騒動です。とはいえまだ次に続くんですけどね。

何か若干ノエルさんにフラグを立ててる気がしますが、まあ良いでしょう。

ではまた次回、読んでくだされば幸いです

第三十一話 命の価値

side アツシユ

「ちーごちゃごちゃと鬱陶しい！」

ナタリア達を逃がすために時間稼ぎをやっているが、キムラスカ兵は増える一方だ。

「これでまた捕まってやがったら叩き斬ってやる！」

毒づきながら目の前のキムラスカ兵を斬り捨てた。

相手をしたキムラスカ兵はかなりの数だが、ナタリア達を追っていた奴らも多い。

市街のあちこちから市民達の抗議の音が響き渡っている。

漆黒の翼の連中は上手くやってくれているようだ。しかし不安なのは変わらない。

「ドジ踏んでねえだろうな、あの屑は！」

キムラスカ兵へ剣をふるう。八つ当たりなのは分かっているが向かってくるこいつらが悪い。

「…ザコが近寄んじゃねえ！ 碎け散れ、咬牙鳴衝斬！」

剣を地面に突き刺し音素を展開。俺を取り囲んでいた奴らをまとめて吹っ飛ばした。

「とはいえそろそろ引き時か…ちッ!!」

見るとまたしても滑車から降り立ったキムラスカ兵達が俺の方へと向かってきたところだった。

数はおよそ10人。別の昇降機も動いていて、まだまだ増えそうだ。

「全てを灰燼と化せ！エクスプロード!!」

第五音素をまとめ、譜術を紡ぐ。

そして火球が向かってきたキムラスカ兵達の真ん中に炸裂した。

隊列は乱れ、ダメージから移動力はがた落ちだ。

あくまで譜術は敵の足留めに使っただけだ。威力が足りなかったわけではない!!

その場を後にし、俺も出口に向かって走り出した。しかし…、

「悪いが、ここは通行止めだ」

出口に向かう途中で六神将の一人黒獅子ラルゴが待っていた。

「悪いと思ってるならそこをどきやがれ!!」

俺は剣を握り直す。

「そもいかん。総長からお前を見かけたら捕まえるよう言われているのでな」

ラルゴは肩に担いでいた大鎌を両手で握り、構えを取った。

ち、雑魚とはいえやり合った後だからな。消耗してる状態で長期戦は厳しいか…なら一撃で決める…

「どうしてもここを通りたいのなら…力付くで押し通るんだな！」
「望むところだ！」

俺は下段に剣を構え駆け出した。

対するラルゴは大上段の構え。

勝負はこの一瞬！！

……
……
……

結果から言えば俺は無傷で未だ立っている。

一方ラルゴは地に伏せ、気を失っている。誰がどう見ても俺の勝ちだろう。

しかし、戦いの後にここまで虚しい気持ちになったのは初めてだ…

敵とはいえお前のこと嫌いじゃなかったぜ……。

出口まで後少し。

周辺にはキムラスカ兵が多数転がっており、その中心に一人佇む姿。

「遅かったですね、ナタリア姫たちは無事脱出しましたよ？」

俺は無言で走り寄り、馴れ馴れしく片手を上げるそいつに大上段から斬りかかった。

「ちょっと！？何するんですか」

慌てた風なセリフを吐きながら、あっさりと避けやがった。ちつ……！

「酷いですね、退路を確保しつつあなたの援護までしてあげたというのに」

「余計な御世話だ。しかも何だあの譜術は！！元導師イオン！！」

俺は怒鳴りつけた。

援護は確かにありがたかったが、あれは……何とというか酷かった……。

俺とラルゴがぶつかるその瞬間に「ピコピコハンマー」「という楽しげな声が響き、ラルゴの頭上から馬鹿みたいにでかいピコピコハンマーが落ちてきたのだ。

ラルゴはそれに強打され、気絶。

勢い余ってフェンスに激突してしまった……。

敵とはいえあんな冗談みたいな方法でやられたラルゴには同情するぜ……

「元導師イオンって……。あ、結局ユリアシティでは名乗りませんでしたね。フェルと言います。以後よろしくお願いしますね？」

「てめえの名前なんざどうでもいい。援護するにしても他にやりようはなかったのか？」

俺が言うとフェルは「あれが一番手っ取り早かったもので」と笑った。

ユリアシティでも思ったがこいつ性格悪いだらう……。

「こんなところで時間を潰している暇はないでしょう？ベルケンドに向かいますよ」

「ああ……」

言いたいことがないではないが、おそらく無駄なので俺はフェルの指示に従い出口へ向かう。

だがその前に……、

「……ひとつ訊きたいことがある」

俺はどうしても聞いておかなければならなかった。答え如何によつては本気で戦つつもりだ。

「ナタリア姫のことですね？」

「ああ！本気でナタリアを犠牲にするつもりだったのか？」

俺が訊くと「ええ」とあっさり頷きやがった。

「何故だ！ナタリアは他の馬鹿な王族たちとは違う！国のためにその身を犠牲にしても役に立とうとするような奴なんだぞ！なのに……」

「一人一人の犠牲で大勢の人を助けることが出来る可能性があるならば僕はそれを選ぶ。ただそれだけの話です」

フェルは静かに答えた。

「ふざけるな！ナタリアはこの世にたった一人なんだぞ！人の命を何だと思つてやがるッ！！」

俺が大声を上げててもフェルの様子は変わらない。

なんて涼しい顔してやがる、こいつ……

「この世で最も尊いもの。同時にこの世で最も値引きがきくもの。僕はそう思ってます」

あまりの言い方に俺は思わず剣を抜いた。それでも奴の様子は変わらない。

「例えば自分にとってかけがいのない命と他人の命。天秤にかければ前者に傾くのはごく自然なことです」

剣を抜きながらも奴が言わんとしていることは分かる。だが……！

「本来、命は等価なはずなのに前者を選ぶということは、後者より価値を認めているということ。そして僕にとってナタリア姫の命とは後者だった。ならば後は数の差です」

フェルはどこか遠くに視線を移した。

「けど、出来るなら“選ばないでいい”方法を探してます。全員が幸せになれるならそれに越したことはないでしょう？理想論に過ぎませんけど、僕はそれを探したい」

そう言ってフェルは笑った。

淋しさ、諦観、迷い、希望、願い……

途方に暮れているようで、それでも手に入れようと必死に手を伸ばしているようで……

何と表現していいのか分からない笑みだと俺は思った。

ただ一つだけ言えることは

こいつは俺、いや普通の奴が見えていないもの、見たくないと思っているもの、見えてはいけないもの
色々なものを見ているのだろう。

誇りもある、覚悟もあるのだろう。けれど……

どうしようもなく悲しい生き方ではないだろうか……

第三十一話 命の価値（後書き）

第三十一話です。読んでくださった方々、ありがとうございます。

シーンが前話と変わっていないのですが、長さのかつ内容的に話を分けてみた次第です。

次回はイニスタ湿原とベルケンドのお話の予定です。

第三十二話 ただ単純な話（前書き）

あけましておめでとつございます
今年もよろしくお願いします

第三十二話 ただ単純な話

辺りに漂う湿気

足元には苔が繁茂し、大地はぬかるみをみせる

その中を僕達は……ひたすら逃げ続けていた。

「何なんだあの化け物は！？なんとかしやがれ、元導師！」

「手はあります。囮になって下さい、現六神将」

アッシュの嫌味を笑顔で受け流しつつ、現状打破のために手段を提案する。

「…で、その間お前はどつするんだ？」

無然としながら訊いてくるアッシュに僕はにっこり笑った。

「もちろん、逃げます」

「屑がああああーッ！」

バチカルを脱出した僕とアッシュはルーク達を追いかけるベルケンドに向かっている。

で、途中にあるイニスタ湿原を経由しているわけだが、ここにはベ

ヒモスという魔物が封じられているという噂があった。

てっきり眉唾だと思っていたが、本当だったらしい……。

ちなみに最初は倒そうとしたが……、

「なんで攻撃が効かないんだ!？」

「不思議パワー？」

「屑がああああーッ!！」

と何故かダメージが与えられずあえなく断念。

仕方なく絶賛逃亡中というわけだ。

「何か手はないのか!？」

「僕だけに現状打破を委ねるの止めてくれませんか？思考放棄は禿げますよ？あとその髪型も」

「黙れ屑がああああーッ!！」

結局、以降も同じようなやり取りをしながら僕達はイニスタ湿原を走り抜けた。

予期せぬ逃亡劇を演じる羽目になったが、どうにかベルケンドに無傷で入ることが出来た。

「フェルさん！それにアツシユさん！」

休憩がてら宿屋に向かおうとした僕達の方へ、ノエルさんが走り寄ってきた。

「大変です！ルークさん達がオラクル兵に連れて行かれてしまったんです！」

「何！？おい、詳しく話せ！」

ノエルさんの言葉に今までそっぽを向いていたアツシユが反応した。

「遠目だったんですが、ルークさん達がオラクル兵に囲まれてたのを見たんです…」

焦りながら話すノエルさんの言葉を聞き、アツシユが苦虫を噛み潰したように表情を歪める。

「ちツ、あの屑が！おい、あいつらはどこに行ったかわかるか？」

「はい、第一音機関研究所に連れて行かれたみたいですよ」

第一音機関研究所と言えばヴァンの拠点でしたね。ということは今度ルーク達を捕まえたのはヴァンですか…。

「わかった。おい！ナタリア達を助けに行くぞ！」

それだけ言い捨てアツシユ走り去っていった。

「やれやれ… 情報ありがとございました。ノエルさんは宿屋で待って下さい」

「はい、フェルさんも無茶はしないでくださいね」

ノエルさんの返事を聞きながら僕はアツシユの後を追った。

「アツシユ!!」

ナタリア姫の大声が聞こえる。

さて、アツシユが突撃して行った部屋の近くで、僕は気配を消しつつ様子を窺っているもののどうするべきか若干悩んでいた。

暗殺……は無理ですし、今更隠れてても生きてるのバレてますしね。

「その言葉、取り消して!」

珍しくティアが激昂した声が聞こえたので、僕は中に入ることに決めた。

「話合いの席で武器を抜くのは感心しませんよ?」

扉を開け中に入りながら、激昂からナイフを抜いたティアを諫める。

「フエル……」

「責様！」

リグレットはティアに向けていた銃口の一つを僕に向けた。

「よせ、リグレット」

「ティアも武器をしまつて下さい。ここでやり合つのは得策ではない」

ヴァンとジェイドがそれぞれ止めると二人は渋々武器をしまった。

「久しいな、報告は受けていたがよくあの状況で生き残つたものだ。そして今までよく生きてこられたな」

僕の秘預言について知っているが故の台詞だ。

ジェイドだけが若干顔を歪ませているのが視界の端に映る。

「まだ“やること”がありますのでね」

そう“やらないといけないこと”ではなく“やること”だ。

誰に強制されたわけではなく、むしろ止められながらも自分で決めたこと。

こんな中途半端で投げる気はない。

「“やること”か…“やりたいこと”とお互い言えんところが因果な

ものだな」

ヴァンの言うとおり“やりたいこと”ではない部分が確かにある。
むしろ……

「一つ確認させて下さい。あなたの目的は預言からの解放のために
現人類の抹殺およびレプリカによる再生、で間違いありません？」

元々知っていたヴァンの預言に縛られた世界への怒りと諦念、外郭
大地の崩落作業、そしてレプリカ……

「うむ、先程その出来損ないにも話した通りだ」

“出来損ない”という言葉に反応し、ティアがまたしてもナイフに
手をかけたがジェイドに制された。

「貴殿とて身に染みているだろう？ 預言が如何にふざけたものか、
預言に縛られた者達が如何に醜悪で愚かか」

頭によぎるのは導師としてのダアトでの暮らし、預言に縋る人々、
そして僕の前風景と罪……

「“ガラクタのような世界”。そう言ったのはお前だろうか？ フェル・
フォーヘン？」

そう、その想いは今も変わらず根付いている。

「“この世界に呪いを”そう呟き、絶望しながら過ごした日々をよ
もや忘れたわけではあるまい？」

もちろん、忘れていない。

「だからこそ同種の絶望を知る私を二十代という異例の若さで主席総長の座につけた。その上、理由も聞かず秘密裏に私に資金を流してくれた」

その資金が世界にとって害悪となることを感づきながら……

「“この世界への呪い”として間接的に私に協力してくれていたの
だろう？」

結果、世界が滅ぶならそれでも良い……

「なれば、今一度私と共に来ないか？同志として」

ヴァンの提案を受け入れても構わないと思っている自分が、今も昔もいた…。

「……あなたの言うとおり、こんな“ガラクタのような世界”など滅べばいいと今でも思っていますよ……」

「フェル！？」

僕の言葉にルーク達から驚愕の声が上がる。

ジェイドは厳しい目を僕に向け、アッシュにいたっては今にも斬りかかってきそうな様子だ。

「ほう、なら我々と……」

「お断りします」

ヴァンの言葉を遮り僕は拒絶の意を唱えた。

「まあ、そう答えるとは思ってたがな。一応理由を訊いておこうか」

さっきとは違う意味で周りは驚きを示したが、ヴァンは平然とした様子で訊く。

「僕にとって“ガラクタのような世界”であっても、他の人達にとっては“かけがえのないもの”です」

たとえ預言に絶る姿が愚かに見えても、彼らにとっては深刻な問題だから。

「それを否定する権利なんてない、それだけの話です」

自分が気に食わないからといって全てを破壊するなど、単なるわがままだと僕は思う。

「……立派な話だな。世界に否定されたというのにお前は否定しないというのか？ 苦しみ、嘆き、怒り、絶望を抱えながらそれでも有象無象のために犠牲になると言っただけか？」

僕は肩をすくめる。

「犠牲じゃないですよ。僕は僕の苦しみ、嘆き、怒り、絶望……すべてを含めた僕の人生に価値を求めてるだけ。自分のためです」

“ガラクタのような世界”に埋もれ、何も出来ないまま秘預言に殺

されるなど耐えられない。

それでは僕の生まれた意味は？生きる意味は？

……そして、死ぬ意味は？

重たい沈黙が流れる。

僕はやれやれと苦笑した。

「大口を叩きましたが、今更引けないだけですよ。決めた以上後は愚直に突き進むだけです」

秘預言を知り、独りで考えて考えて考えた故の結論。

後悔する余裕も時間もすでない。

「ヴァン、僕は貴方の考えに共感します。ですが同意しません」

はっきりと言い切った。選択の時はとうに過ぎ去っている。

「…残念だが、仕方あるまい。話は終わりだ」

ヴァンの言葉を最後に僕達は第一音機関研究所を後にした。

研究所から出たルーク達に漂う空気は一言で言うと「重い」に尽き

る。

「宿で休んでます。とりあえず僕は明日ダアトに向かいますので」
それだけ言い、僕はルーク達から離れた。

僕自身は空気が重かろうと気にしないが、特に今わざわざ一緒にいる理由もないので離れた方が無難だろう。

ちなみにダアトへ向かう理由はアルビオールの飛行譜石の奪還のためだ。

現在でも水上走行可能とはいえ、飛行出来た方が良いのは当然だ。

「フェルさん！ルークさん達はどうなりましたか！？」

宿屋の扉を開けると、ロビーで待っていたのだろうノエルさんが慌てて尋ねてきた。

「ご心配なく。今なら第一音機関研究所近くにいると思いますよ？
顔を見せてきたらどうです？」

僕が笑って答えるとノエルさんは不安そうだった表情を改め、安堵のため息を吐いた。

「良かった…本当に。フェルさん、ありがとうございました。では、
ちょっと行ってきますね」

お辞儀をし、ノエルさんは走っていった。

「本当に良い人ですね」

僕は苦笑する。

ノエルさんがルーク達と行動を共にした時間などそう長くはない。

なのに本気で彼女はルーク達の身を案じていたのが分かる。

ロビーで部屋の鍵を受け取り、部屋に入るや否やベッドに仰向けで寝転がった。

「“ガラクタのような世界”、か…」

かつて僕が形容した言葉。

そしておそらく今、ヴァンが見ている世界の在り方。

「腐ってる面もたくさんある。でも、全てじゃない」

ダアトでは改革派の皆やトリトハイム。

預言をただ遵守するだけではなくより良く利用するために苦心してくれた。

保守派にしても預言遵守のための何を犠牲にしても良いなどと考える者は極一握りだ。

キムラスカではナタリア姫。

アグゼリユスに供も付けずルーク達に同行する、政治の裏側に精通

していないなど問題点は多々ある。

それでも救護院の建設や失職者の保護など評価出来る点もある。

マルクトではピオニー陛下。

個人としてはツツコミ所満載だが、政治家としては一流だ。

そしてそれ以外の人々……

「ガラクタのような世界」。そう思って世界を見ると、その通りにしか見えなくなる」

“世界”は個人の見方に依る。

清濁様々なものが複雑怪奇に絡み合い、その一部分を人はそれぞれの見方で見ているだけに過ぎない。

「理性的な貴方なら当然分かってるでしょうけどね…ヴァン……」

お互いに、難儀な道を選んだものですね。

第三十二話 ただ単純な話（後書き）

第三十二話となりました。読んでくださった方々、ありがとうございます。

さて、ヴァンとやっと対面することになりました。

ヴァンとフェルの考え方はさして変わりません。原作でも協力関係でしたからね。

しかし、フェルは原作通り孤独に恨みながら死ぬのではなく、達観？しました。

そしてプロローグのように政治体制に一石を投じようとしたが、モースにより妨害。

ヴァンはその変化を好意的に思いつつ、結局フェルには時間がないので自分の計画を進めてることにしました。

お互いに今更止まれないので、評価し合いつつ敵対という関係というわけです。

では、次回もまた読んでくだされば幸いです

感想、誤字脱字報告お待ちしております

第三十三話 罪からの逃避

流れる風と舞い踊る花弁

降り注ぐ日差しは柔らかく、漂う木々の香りが鼻腔をくすぐる

ベルケンドで一泊した後、僕がダアトに向かおうとするとルーク達も一緒に行くということになった。

ダアトに行くついでに教団本部から行くことが出来、セフィロトがあるザレッツホ火山のパッセージリングも起動させようと思ったのだが、火山活動が活発で近付けなかったため後に回すことにした。

そしてイオンともダアトで合流することが出来た。

ちなみに飛行譜石はダアトであっさり回収済みだ。

「預けられていた響師ライナーを殴り倒し、強奪してでしょう？」

「ええ、それが何か？」

人のモノローグを読むジェイドの問いに僕はあっさり頷いた。

僕からすると、ただ単に手間をかけないといけない部分とそうでない部分を区別しているにすぎない。

どこに監視があるか分からないダアトで無駄な時間を過ごす意味が

解らない。

「で？みんなでセフィロトへの入り口を探そうって時にサボって何してるんですか？」

飛行能力を取り戻したアルビオール。

まだ降下させていないセフィロトがあるタタル渓谷までやってきた僕らだったが、肝心のセフィロトへと繋がる入り口を手分けして探している最中だ。

「年なもので歩き回る体力がないんですよ。そういうフェルこそサボってるじゃないですか」

「ええ、手を抜けるところは手を抜く性分ですので」

木陰の下で仰向けに寝転がったまま僕は答える。

「若年寄りですね」

「年齢不詳のジェイドに言われたくないです」

ジェイドは苦笑しながら隣に座ってきたので僕は少し横に移動した。

「体はまだ動きます。ヴァンとは繋がってないし、倒すつもりですよ。その他障気やら外郭大地の問題については予定通りです。他に質問は？」

思いつく範囲で質問を先取りし、答える。

「やれやれ、貴方って人は…まだ何も言ってないでしょう?」

「手を抜けるところは手を抜く性分なので」

「どれだけのぐさなんですか……」

さっきの言葉を繰り返すとジェイドもは再び苦笑した。

「大体答えてもらいましたが、一つだけ。…貴方とヴァン謡将が抱える同種の絶望とは何ですか?」

「……………」

即座に答えられなかった。言う必要性はないが…、

「……………少し長くなりますよ?」

言いたくないことだが、口を噤むことは自分の罪から目をそらす気がして僕は答えることにした。

「端的に言つと“大きな罪を犯したが無意味だった”ということですよ」

「…具体的には?」

目を細め、ジェイドは続きを促した。

「元々“導師イオン”というのは僕の二つ目の名前です。最初の名前が“フェル・フォーヘン”。そしてダアト生まれでもなくマルクトの片田舎が故郷になります」

ジェイドの驚いた顔を横目に僕は続ける。

「両親はローレイ教団の信者でしたが、ただの百姓でした。家は裕福とは言えませんでした。両親も周りの人も優しく不幸だとは思いませんでした」

正確には不幸でも何でもなく僕に取って単なる日常だった。

「そのまま七歳まで過ごしていましたが、丁度七歳の誕生日にローレイ教団から使者がやってきました。曰わく僕が次の導師となると預言が出たから教団で引き取ると」

有無も言わさない調子だったのをよく覚えている。

「両親は嬉々として僕を渡すことに同意しましたよ。預言に詠まれたのだからって」

ジェイドは苦々しそうに顔を歪めた。

「捨てないでと僕が泣き喚いても一切取り合ってくれませんでした」
「思えば人前で涙を流したのはあれが最後だ。」

「裏切られたという想い、預言のためにあっさり僕を渡してしまえる両親に対する恐怖、不安、怒り…いろんな負の感情がない交ぜになり、僕は力を暴走させました」

あの瞬間まで自分がダアト式譜術を使えるなんて全く知らなかった。もっともダアト式譜術を使える素養があつたから預現に詠まれたのだろうか……。

「結果、音素が溢れかえり建物13棟が消滅、34が半壊、98が損傷。人的被害は42人が死亡、358人が怪我を負つたという事態になりました」

両親だけでなく友人、近所の人達…多くの人を殺めた。

「そしてそれだけの被害を出しても預言遵守のため僕を導師にするためにダアトは引き取り、およそ一年間拷問じみた教育を受けました」

殺めてしまった人達に少しでも報いるために歯を食いしばって耐えた。

「で、そんなこんなで導師になり自分の秘預言を詠むと余命幾ばくもないことが分かったというわけです」

「…そんなことがあれば預言を消したいと思うのも当…」

「それは違います」

ジエイドの言葉を僕は強い調子で遮る。

そう、ここは間違えてはいけない。

「確かに預言を呪ったこともあります。ヴァンと心通わせたのは同種の絶望を持ったからですし、彼がレプリカ世界を創ってもそれはそれとも思ってます」

否定は出来ない。それでも…、

「ベルケンドで断った、その理由は預言が諸悪の根元ではないと思ってるからです」

「預言せいではないと？」

ジェイドの問いに僕は頷いた。

「例えば預言で”明日は雨が降ります”と出たとします」

ジェイドは怪訝そうな顔をしたが、目線で先を促した。

「しかし、外出し風邪を引きました。その後、風邪は悪化、肺炎となり死んでしまいました。さて悪いのは預言ですか？」

僕の例にジェイドは大きく息を吐いた。

「なるほど…悪いのは預言が出たにもかかわらず傘を持っていかなくなった者の落ち度、もしくは風邪の段階で適切な治療を受けなかったせい、と？」

僕は頷いた。

規模は違つが僕のケースも本質は同じだ。

預言を遵守するために子供を引き取るうとしたダアト、嬉々として受け入れた両親、何より術を暴走させた僕が悪いに決まっている。

預言を怨むのは罪からの逃避だ。

「預言が避けられないものだとしても、そこに至るまでは個人に任されています」

預言が記すのはあくまで結果のみ。

「僕は人の幸せというのは行き先が決めるのではなく、その歩き方にあると思います。そしてそう信じたい。そうじゃなければこの世界は悲しいことが多すぎる…それに、」

「それに？」

聞き返すジエイドに僕は笑いかけた。

「預言が不可避なら消すことに意味はなく、同時に消せるなら不可避足り得ません。逆説的ですが預言は変えられるんですよ、きつと」

風が吹いた。優しく撫でるように……。

第三十三話 罪からの逃避（後書き）

第三十三話となりました。読んでくださった方々、ありがとうございます。

さて、フェルことオリジナルイオンの独自設定と預言の解釈ですの
で若干ビビってますが……ご容赦ください。

ちなみにオリジナルイオンの家族はゲーム中も登場しません。

それではまた次回、よろしく願います。

誤字脱字報告、感想お待ちしております

第三十四話 悩み事（前書き）

話が進んでないです。前話にひつつけるべきだったと反省。

第三十四話 悩み事

「ところで、一つ相談に乗ってもらえませんか？……って何ですか？その顔？」

奇妙なものを見るような目をしたジェイドを僕は睨み付けた。

「い、いえ、すみません。独立独歩を地で行く貴方が相談など、かなり意外だったもので…」

「失礼な。僕は14歳の子どもですよ？大人なジェイドに相談することがおかしいとは思いませんか？……だから、何なんです、その顔」

表情を直したジェイドが突然非常に嫌そうな顔をしたので再度睨み付ける。

「いえ、失礼。ただ貴方がスタンダードな14歳という世界を想像してしまったら寒気がしたので」

「殴ってもかまいません？」

拳を握るとジェイドは「遠慮します」と苦笑した。

貴方がスタンダードな大人の世界も十分寒気がするでしょうに…。

「で、相談というのは？」

ジエイドが真剣な顔で訊ねる。

「僕一人ではもうどうしたらいいのか分からないんです…ぜひ、アドバイスをお願いします」

僕は頭を下げた。

「…貴方がそこまで悩むとは…。分かりました、出来る限り協力します」

眼鏡のブリッジを上げ真剣なジエイド。

「ありがとうございます。実は…アリエッタと最近距離を感じるんです…」

「は？」

風が吹いた。強風が何か言いたげに……。

side ジエイド

目の前ではフェルが何やら真剣な表情でアリエッタについて語り続けている。

てつきりヴァン 謡将やら預言やら外郭大地の降下についてだと思っただんですが……。

正直予想外にも程がある。

世界よりひとりの女の子についてのほうが大切ということですか
…いえ、人としてよほど健全ですが…。

なのに素直に認めてはいけない気がするのは何故だろうか。

「ちょっと！真剣に聞いて下さい！」

フェルから注意が飛ぶが今更真剣に聞くのは正直無理だ。

「はいはい、それでアリエッタがどうしました？」

明らかに適当な様子で返してもフェルは気にせず語り続ける。

曰く

「ちょっと前までは僕の後ろに隠れていたのに」

「ティアと仲が良いのは良いんですが、なにを話してるんでしょうか？」

「彼女が独立しようとしているのは嬉しいんですが寂しいような…」

「まさかガイは色目を使ってないか心配で…」

「ふふ、もし事実だったらどうしてくれましょう…？」

など以下省略。何かおかしなことも…いや、おかしなことしか言っていない気がするが気にしない。

「おーい、旦那、フェル」

おや？長話し過ぎましたか。それにしても…

「ガイ？ちょうど良いところに。少し訊きたいことがあるんですが？」

身を起こしてガイに笑いかけるフェル。

タイミングの悪さ、ここに極まれりといったところでしょうか。

「い、いや、みんな集まってるんだ。話はまた後で……」
「嫌です」

ガイは妙なオーラが漂うフェルから逃げようとしたがあっさり言い切られた。

「い、いや、ほら、待たせるのは良くないだろう？」

「そっちはジエイドにお任せします。かまいませんよね？」

フェルが私の方を見、にっこり笑った。不覚にも寒気が止まらない……。

「ええ、もちろん。後はお任せしますね、ガイ」

それだけ言い私はさっさとその場を後にした。後ろから悲鳴が聞こえた気もしたが……きっと気のせいだろう。

「それにしても……」

後ろから爆発音が聞こえる。

「アリエッタのことになると彼の脳みそは溶けるんでしょうかね……」

「？」

呟き、ガイの冥福を祈った。

「ガイが呼びに来たということはセフィロへの入り口、見つかったんでしょうね。まあ、若干行くまで暇がかりそうですが」

独り言を言いつつ、みんなのところへ向かう。二人が遅れる旨を伝えなくてはいけないだろう。

やれやれ……

第三十四話 悩み事（後書き）

第三十四話となりました。読んでくださった方々、ありがとうございます。

前書き通り、進んでません。そして次回もタタル溪谷という……

第三十五話 変わることのむずかしさ（前書き）

タタル溪谷はさすがに長いのでカットしました。

まあ、内容は引きずってますが……

第三十五話 変わることのむずかしさ

k
「はあ、……何やってたんでしょうね、ほんと…」

自嘲しながら溜め息を吐く。思い出すのはタタル溪谷での醜態だ。

反省しつつも、集中は切らさず作業を続ける。

行く手を阻むダアト式封呪は明滅を繰り返し…すつと消滅した。解
呪完了。

「OKです、先に進みましょう」

僕は解除されるのを待っていたガイ、ナタリア姫、アリエッタを呼
んだ。

茶褐色の台地と乾いた風。風化した岩石群が視界に映る。

第7セフィロトがあるメジオラ高原。

ニル二川の上流に位置し、旅人さえも寄り付かない不毛の台地。

しばらくあたりを散策することで、ようやく入り口を見つけること
が出来、解除がたった今完了した。

「何か悩み事、ですか？ アリエッタに出来ることないですか？」

顔に出ていたのだろう、アリエッタが心配そうに尋ねてきた。

「いえ、悩み事というか反省ですよ。そのアリエッタの気遣いだけで十分です」

僕は彼女の頭を撫で、笑いかけた。

貴方が僕から離れと行くのが寂しくて妙な暴走をしてしまったんです…なんて言えませんしね。

保護者として、また個人としてカッコ悪過ぎる。

しかし、僕って独占欲強かったんですね…それと……、

僕は首を振って考えを掻き消した。

“カンガエルナ”

「どうしたんだ？」

「どうかしまして？」

周囲を見回ってくれていたガイがナタリアを連れてちょうど戻ってきたようだ。

「いえ、気にしないで下さい。解説もちょうど終わりましたし、行きましょつ」

苦笑しながら、僕は首を振る。

ちなみに今いるのは、この四人で全員だ。

出来る限り急いだ方がいい降下作業を進めるべく、僕達はパーティーを2つに分けた。

ダアト式封呪を解呪するためにイオン、ユリア式封呪を解呪するためにティア、超振動でパッセージリングに指示を書き込まなくてはいけないルーク、ルークに指示を教えなくてはいけないジエイド、それにアニスは別行動。

彼らには第10セフィロトのあるザレッツホ火山に向かってもらった。

あそこはダアトから隠し通路で繋がっており、道順を知っているイオンに案内を頼んでいる。

ダアトで飛行譜石を回収したときはだめだったが、タタル溪谷で時間を潰したことで火山活動も若干落ち着いてると思う。

また彼らに降下作業が出来ることは僕がガイに対してお話している間にさっさとみんなが降下作業を進めたことで証明されたので大丈夫だろう。

怪我の功名ではないですが、1人で全ての封呪を解呪しないで済むのはありがたい。

もっともダアト式封呪を解呪するためにイオンは体力を使い、ユリア式封呪を解呪するためにティアは瘴気を抱えることになったはずだが。

気にならないわけではないが、例え彼らが傷つこうがやってもらえない。
しかない。

僕独りではどっちにしろ全てのパッセージリングを起動できないのだから……

「やることやってさっさとルーク達に合流しましょう」

アリエッタ達に先んじて解呪した扉を僕はくぐった。

side ガイ

「やることやってさっさとルーク達に合流しましょう」

それだけ言いフェルは1人、先へ進む。

「おい、待ってくれよ。ナタリア、アリエッタ、フェルを追おう」

呼び止めたが、すたすたと先に向かってしまっフェルの後を追う。

「ちょっと待ってってくれって。ここは魔物も出るじゃないか。みんな
で足並みを揃えよう」

「…あ、そうですね、すみません」

肩に手を置くとやっとフェルは立ち止まってくれた。

「では前衛は僕、中衛にアリエッタとナタリア姫、後衛はガイにお願いします」

ときはきと指示を出し、先ほどより少しゆっくりしたペースでフェルが歩き出した。

その後をアリエッタとナタリアが続く。

「何かあるのは確実だろうか…」

後に続きながらフェルの様子を見、俺は小さく呟いた。

思えばタタル渓谷でも様子がおかしかった。

いくらアリエッタが大切だろうとあんな風に暴走するだろうか？

「酷い目にあつたが、なんというかあの時の表情と今の表情を比べると…」

タタル渓谷の方が本当のフェルの顔だった気がする。

今は張り詰めているというか、感情を隠しているというか…。

「もっともフェルだけじゃないけどな…」

歯痒い思いが零れる。

旦那がフェルを見る目には何かある様子だし、タタル渓谷からティ

アも様子がおかしい。

アニスも時々街の中で姿をくらましていたし、ナタリアはバチカル
の一件で悩んでいるようだが何も言わない。

ルークはルークで色々考えるようになったが、みんなに相談とかは
してないみたいだし、また暴走しないか心配だ。

「結局アクゼリユスから何も変わってない、か…」

崩落を引き起こしたルークを俺達は責めた。

そして俺達を一喝したのがフェルだった。それぞれにも責任の一端
があり、互いに信頼が築けていればあの結果は変えられたかもしれ
ない。

なのに未だにバラバラのままだ。

「ガイ、置いてきますよ?」

フェルが少し先で手を挙げている。知らないうちに足を止めていた
らしい。

俺は慌てて後を追った。

side フェル

「ぐっ！」

一体の魔物を斬り捨てたガイだったが次の瞬間、横合いから別の魔物に殴り飛ばされた。

空中で態勢を立て直し受け身をとったが結構なダメージを負ったようだ。

「回復します、です」

「援護しますわ」

「獅子戦功！」

それを見た僕は相手をしていた二体の魔物に音素を叩き付け弾き飛ばす。そして詠唱に入った二人の護衛に下がる。

「頼む！おっと」

ガイは追撃に迫る魔物の一撃を間髪バックステップで回避した。

しかし動きに普段の精彩がない。

「やれやれ……」

ガイは気になるが、後衛二人に向かう魔物の相手を放置するわけにはいかない。

グローブからストックしていたライフボトルを取り出す。

「ガイ、やられちゃっても大丈夫ですよ？」

「勘弁してくれ！一瞬でいいからこいつの動きを止めてくれないか！？」

連続バックステップで逃げ続けるガイが叫んだ。

「仕方ないですね。せーの！！」

大きく振りかぶってライフボトルを魔物に投げつけた。狙い通り顔面に直撃し魔物が怯む。

「堅き護りよ、バリア！」

「命を育む女神の抱擁、キュア！」

「よし！集気法…！」

詠唱を終えた二人の譜術がガイを包みこんだ。傷が癒え、薄い膜が盾となる。

……ん？

「何やってるんですか？そんな暇あったら逃げないと駄目でしょうに」

せっかくアリエッタが回復させたというのに、その上に自己回復とか無意味だろう。

…ひょっとしてアリエッタの譜術が信じられないとも言いたいんでしょうか？

「フェル！何を考えてるか分からないが絶対違つから！…この！」

若干むつとするとガイが即座に否定してきた。

そして、そのまま必死の形相で迫り来る魔物を斬り捨てる。

「…なら構いません。ただ…」

「ただ？」

ガイが聞き返す。

僕は溜め息を吐いた。

「背後には気をつけた方が良いですよ？」

「へえ？うわああああ…」

油断しきっていたガイは、最初僕が相手をしていた魔物二体に残るからフルボッコにされた……やれやれ……。

ガイは「お笑いツッコミ役」の称号を得た。

第三十五話 変わることのむずかしさ（後書き）

第三十五話となりました。読んでくださった方々、ありがとうございます。

そしてまたしても別行動。というか別行動がデフォルトなフェルです。

それにしても・・・セフィロト多いですね。。

次回もまたよろしく願います。

誤字脱字報告、感想お待ちしております。

第三十六話 選択

途中予期せぬガイのツッコミだかポケだかがあったが、あの後には連携が上手くいきパッセーリングに辿り着いた。

さて、

「アリエッタ、周囲の警戒をお願いします。ガイはアリエッタの護衛を。さっきみたいな面倒かけないで下さいね？」

「わかりました、です！」

「…さっきのことは忘れてくれ…」

アリエッタは元気に、ガイは肩を落としながら出て行った。

「わたくしは何をすればよろしいんですの？」

「……僕の回復をお願いします」

ユリア式封呪を解呪すればまた障気を取り込むことになる。

前回のこともあり、アリエッタには見せたくない。

「どついう意味ですの？回復が必要には見えませんか？」

ナタリア姫が首を傾げる。

「説明するのは面倒なので割愛します。とりあえず詠唱を」

納得いかない様子だが、ナタリア姫は詠唱を始めてくれた。

「ではやりますか。冷静にお願いしますね？」

それだけ言い、僕はダアト式封呪を展開……ユリア式封呪を破壊した。

「ぐっ……！」

「フェル！？」

瞬間、パッセージリングを通り多量の障気が流れ込んできた。

ナタリア姫の声が、遠い……

体から嫌な汗が噴き出し、震えが止まらない……

足元がおぼつかず、膝を付いてしまう……

視覚が歪み、前後左右がワカラナイ……

時折ナタリア姫の譜術により楽になるが、すぐにまた戻ってしまう

……

……

……

……

数分経過し、僕は荒い息を吐いた。

体に熱が残っているみたいに震えは未だ、止まらない。

「よいつしょ…っ」と

それでも僕は掛け声を言いながら立ち上がった。

もたもたしていて二人が戻ってきたら席を外させた意味がなくなる。

「いったい何が起こりましたの！？あーもう！とにかく安静になさ
つてー！」

「もう落ち着きましたよ。さっきも言いましたが、さっさとやるこ
とやってルーク達と合流します」

言いながらパッセージリングを操作する。

どうやらザレッツホ火山のパッセージリングも起動しているようだ。

ルークの超振動で無理に動かしているからだろう、あちこちにエラ
ーが見られる。

「それはそうですね、一体さっきのは何なんですの！？普通じゃ
ありませんでしたわよ！？」

横でナタリア姫が怒鳴っているが無視しつつ、エラーをひとつずつ
消す。

それから降下指示を書き込み、パッセージリングを閉じた。

「聞いてますのー!!」

「……聞いてますよ」

あまりにしつこいので仕方なく返事をした。

「貴方、自分の体を何だと思ってますの！こんなこと続けていたら……！」

「死ぬでしょうね。それが何か？」

僕の言葉にナタリア姫は絶句した。

こんなやり取りばかりでいい加減煩わしいですね。

思うだけで口に出さないが、僕は辟易していた。

ガイヤティア、ルークも僕の状態を知らば「何で!？」と問うだろう。アリエッタは泣くかもしれない。

そしてそんなことくらい当然、僕は分かっている。

その上で今の状態なのだから……

「僕は全知でも全能でもないからですよ」

端的に理由を告げる。

いつになっても自分の不甲斐なさ、罪深さに苦しむことだらけだ。

「何かを犠牲にせず目的を達することは出来ません。そして何かを犠牲にすることを選んだなら、自分が犠牲になることを拒むなど赦されないんです」

物語に登場するような主人公なら全てを救うことが出来るかもしれない。

しかし凡人たる僕には、出来ない。

「……貴方は強いんですね。わたくしには真似出来ませんわ……」

ナタリア姫は俯いた。彼女の気持ちはある程度想像できる。

バチカルでの出来事がよほどショックだったのだろう。

自らの出自という基盤が偽りだったのだ。

どうすればいいのかわからずに苦しんでいるのだろう

けれど……

「最初から強い人間なんていません。そして強くなるうとする意志
無き者はいつまでも強くなれません」

羨むだけで手にはいるなら誰も苦勞はしない。

同時にそんなものにどれだけの価値があるだろうか。

「無力さに泣くことも、選択に迷うことも、後ろを振り返ることも
あります。そして時間が解決してくれることもあります」

僕はナタリア姫の肩に手を置き、視線をやや強引に上げさせた。

「その上でお聞きします。貴方の悩みは立ち止まっていれば解決す
るものですか？解決していいものですか？」

「おっしゃってることは分かりますの…けれど……」

ナタリア姫はもう一度視線を落とした。

「…なら全てを捨てて、キムラス力を捨てればいい」

僕は手を離し、少し後ろに下がった。

「そんなこと出来るはずが……！」

ナタリア姫が驚きの声を上げた。

「出来ますよ。あなたにその気があればですが」

「それでは逃げ出すことになりますわ！」

僕は大きな溜息をついた。

「逃げることのどこが悪いんですか？それも一つの選択です」

「無責任ですわ！わたくしは王族として……！」

ナタリア姫はごちゃごちゃと反論を始めた。

勝手な話ですね。そうやっていることが一番民にとって悪いことでしょうに。

彼女は無意味に決断を遅らせてるように思えてならない。

「……ふざけないで下さい」

決して大きな声ではないが、僕の怒気を感じたのだろうナタリア姫は黙り込んだ。

「無責任？進むでもなく逃げるでもなくただ立ち止まって、うだうだ言ってる人間が何を言ってるんです？」

責任は言葉ではなく、行動で示すしかないはずだ。

「選択することから逃げないで下さい。それで一番あおりを食らうのはキムラスカの国民です」

ナタリア姫がキムラスカを捨てるなら、それはそれでなんとかなくていくだろう。

一番まずいのは、彼女が結論を出さないせいで国民が抗議や暴動を起こした場合だ。

バチカルでの様子を見るにその可能性はかなり高く、暴動が起これば逮捕者や犠牲者が出るかもしれない。

いつそバチカルを捨て、マルクトに亡命すると言っならキムラスカ国民も暴動など、行われないはずだ。

「問題は単純です。“貴方は何者でこれからどうしたのか”です」
単純ながら一番難しいことくらい分かっている。それでも放置してはいけないこともある。

僕の問いに悩みながら口を開こうとしたナタリア姫を僕は片手を挙げて制した。

「とって今ここで答える必要はないですし、これ以上口出しする気も僕にはありません。後は貴方次第です、“ナタリア”」

僕はあえて名前を使う。一個人として彼女が答えを選べることを願って。

第三十六話 選択（後書き）

第36話となりました。読んでくださった方々、ありがとうございます。

特に付け足す内容がないので、次回もよろしくお願いします。

誤字脱字、感想お待ちしております

第三十七話 成長と停滞（前書き）

大変遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

体を壊し、およそ1か月の間ずっと入院していたもので。。。

書き方を忘れている部分がありそうで、どうしたものか……とにかくがんばります

第三十七話 成長と停滞

ザレッツホ火山とメジオラ高原のパッセージリングに降下指示を書き込むことが出来た。

まだ作業が済んでいないパッセージリングはアブソープ、ラジエイトの両ゲートと雪と氷に覆われた過酷なロニール雪山の計三カ所。

僕達はアルビオールでダアトのルーク達と合流し、シェリダンに向かった。

目的はアラルの改造といった地殻の振動停止装置の進捗状況を確認するためだったが、装置の完成にはもう少しだけかかるとのことだ。

「しばらくはここでゆっくりするといいぞい」

イエモンさんの提案に僕は少し悩む。

やっておきたいことは残り三カ所のパッセージリングに指示を書き込むことと保険。ですが…

このところずっとバタバタしていたこともあり、少し休息も必要だろうと結論付けた。

「ではしばらくご厄介になりましょう。ただ明日で構いませんのでアリエッタ、時間いただけますか？」

「ふえ？アリエッタに何か用事です？」

アリエッタが小首を傾げる。

「いえ、久しぶりにお話したいなと思ってね。嫌ですか？」

「と、とんでもないです！」

アリエッタは首を全力で横に振ってくれて、一安心だ。

「ありがとうございます。では続きは明日に」

アリエッタがないと話になりませんかからね。

心なしかアリエッタの表情は柔らかく、見ていて僕も心が落ち着くのを感じた。

なんだかんだで、僕も結構いっぱいだったようですね

……

気付けたのは僥倖だ。自覚していない疲れやストレスはいざという時のミスに繋がりがかねない。

「なあ、ちょっといいか？」

そこにルークが手を挙げた。

「どうかしましたか？ルーク」

「ずっと考えてただけで、大陸の降下のこと、俺達だけで進めて良いのかな？」

意外な言葉だ、僕がジェイドにちらりと視線を送るとジェイドも少し驚いた様子だった。

「理由は？」

端的に続きを促す。

「だって世界の仕組みを変える重要なことだろ。やっぱり伯父上とかピオニー陛下にちゃんと事情を説明して協力し合うべきなんじゃないって」

ルークの提案は僕も、おそらくジェイドも考えていた。

個人的には振動停止を成功させ、一つを残しパッセージリングに指示を書き込んでからと思っていた。

今は中途半端な時期だと思わなくもないが…

僕は視野が広がったルークに驚きながらナタリアに視線を移す。

ナタリアとちょうど目線が合ってしまった彼女がまだ迷ってることが伝わってきた。

「そのためにはキムラスカに行かなくちゃいけないんだ、ナタリア」
そんなナタリアに向かってルークは真つすぐ視線を向ける

世界の行く末を決める大事ですよ？

僕も心の中で問いかける。

「ルーク……」

「街のみんなは命がけで俺たちを……ナタリアを助けてくれた。今度は俺たちがみんなを助ける番だ」

誰かに責任を全て預けていた

「ちゃんと伯父上を説得して、うやむやになっちまった平和条約を結ぼう」

自分のことしか考えていなかった

「それでキムラスカもマルクトも、ダアトも協力しあって、外郭を降下させるべきなんじゃないか？」

具体性もなく、ただ感情のまま言葉を口にするしかなかったルークがここまで変わりましたか。

ルークの成長を嬉しく思う。

「……少しだけ、考えさせて下さい。それが一番なのは分かっています」

俯くナタリアに僕は失望と怒りを感じる。

「でもまだ怖い。お父様が私を……拒絶なさったこと……。ごめんなさい」

部屋から出て行くこととするナタリアの前に僕は立ちふさがった。

「では明日の正午まで時間を取りましょう。それまでに決断してください」

本当はそこまで急ぐ必要もないが、下手に時間を延ばしてたらずるいきそうなので。明確に期限を設けておく。

「…分かりましたわ」

ナタリアは小さな声で了承しつつ、集会所から出ていった。

彼女の姿にダアトに連れられたときの自分の姿が重なって仕方がない。

八つ当たりも含まれていることくらい自覚している。

けれど彼女はもともと王族の責務として自主的にルーク達と共にアクゼリユスに赴いたらしい。

そして彼女を助けようとバチカル市民はあれだけの騒ぎを起こしている。

責務を自覚し、さらには自ら必要とされる以上に背負い込み、そんな彼女を信じる人たちが大勢いる。

なのに今更、「怖い」などという理由で向き合おうとしない彼女が僕はどうしても許せなかった。

どれだけ大きな壁が立ち塞がろうと、歩くと決めた以上突き通すべきでしょうに……

第三十八話 それぞれの役割

紅く染まる街

黄昏時に悩み惑う彼女を支えるは、想いの強さといつかの約束

段差に腰掛け迷子のように不安げに視線を落としたナタリア

その後ろから歩を進めるアッシュを見つけ、僕はその場を後にした。

「何も言わなくていいんですか？」

そこにナタリアを心配して様子を見て来ていたのだらうイオンが、移動する僕に声をかけてきた。

「言いたいことはこの間言いましたし、どこからかやってきたアッシュに任せますよ」

振り返りも、立ち止まりもせず僕に答えを返す。

後ろから足音が聞こえ、イオンが僕の隣に並んだ。

「しかし、揃いも揃って心配症というか物好きですね」

僕やイオンだけでなく、ルークにティア、ガイがナタリアの様子をうかがっていたことには気づいていた。

どうやらガイは撤収したようだがルークとテアアは残ったようだ。

「ふふ、フェルがそれを言いますか？自分だってナタリアが心配で様子をうかがっていたのに」

「別に心配してたわけじゃないです。散歩してたら目に留まったので後をつけたにすぎません」

僕が言うとイオンは「そういうことにしておきます」と笑った。

いかにも“分かってますよ”という態度に若干ムっとする。

「で？イオンはどこに居たんですか？ダアトで助けてから影が薄くしていたんだか、いなかったんだか分からなかったんですけど？」

僕を茶化すとはいいい度胸してますね

「仕方ないじゃないですか！魔物が出るようなところでは後ろに下がってましたし、セントビナーでは危ないからって先に避難させられてましたよ！その上途中で僕はダアトに戻ってましたし、フェルは別行動多いんですよ!？」

ちよつと苛めてみるとイオンは手を振り回し、必死になって反論してくる。

あまりの必死さに反省…しないでもないがこのまま続けたいという思いの方が強い。

「なんとというか……戦えないヒロインポジションですよね、イオンって」

線が細く、華奢な上、しょっちゅう攫われ、助けられるポジション……ヒロインとしかいえない。

「僕は男です!!」

イオンは顔を赤くし、必死になって否定してきた

「ええ、男の娘ってやつですよね」

「なんか僕が言ったのと違う意味な気がするんですけど!!」

イオンが大声をあげるというのもなかなか新鮮ですね。

「ま、いいです。僕は休みますのでイオンもゆっくり休んで下さいね」

大人げないのでこの辺で切り上げることにする。

「ちよつと！フェル！」

手をひらひらと振りながら僕は宿に向かった。

集会所に集まった僕達を前にナタリアはバチカルへ行くと告げた。

キムラスカ兵に捕まる可能性もある、インゴベルト陛下が話を聞い

てくれない可能性もある。

危険性は高いが、それでも皆はナタリアに笑顔を向けた。

「よし！じゃあバチカルへ出…」

「すみません、僕とアリエッタは残りますので」

ルークがずっこけた。うん、良いリアクションですね

ちなみにアリエッタには朝方のうちに話して、了承して貰っている。

「フェル」

恨みがましそうにルークが睨んできたので僕は苦笑した。

「そう怒らないで下さい。キムラスカに付いていっても僕に出来ることはありませんから」

「そんなことねえって！フェルはスゴく頼りになるし、いざって時には…」

「ルーク」

小さな声でルークを制する。

「僕を当てにするのはやめて下さい」

「フェル…ごめん、俺…」

バツ悪そうに視線を下げるルークに対して、僕は首を横に振った。

「怒ってるわけじゃないんですよ。ただ僕に過度な期待をしないで

下さい」

ざっとみんなを見渡す。

どうやらみんな困惑しているようだ。

そんな中僕は口を開く。

「僕は僕がかつて誓った想いの元で行動しています」

“世界の不条理さからの解放”

僕が僕としてやり遂げると誓ったこと…

「ですが、僕の存在はイレギュラーに過ぎません」

秘預言から逃れるため無理に無茶に無謀を重ねて今、ここに立っている。

倒れる気は、ない……

しかし一方でいつまでも続くわけじゃないこともまた、自覚している。

「出来ることはやりますし、遂げるつもりです。それでも失敗する可能性はゼロじゃないんです」

ヴァンの気配を感じるたびに逃げ出していたのも、六神将のような強敵と戦わざるを得ない時に小賢しい手ばかり使ってきたのも消耗しないためだ。

しかしセントビナーではディストの符号兵器と真正面から戦うはめになってしまった。

何より二度の取り込んだ障気のこともある。

「だから僕にあまり過度な期待はしないで下さい」

「そんな悲しいこと言つなよ！フェルが何か困ってるなら力を貸すし、手伝えることなら…」

僕は再度首を横に振ってルークを制した。

「僕はあくまで裏方です。キムラスカを説得したり、マルクトとの条約をさせたりといった表はルーク達の役割です」

「けど…」

ルークはまだ納得いかないようだが、ここは譲れない。

「行きましよう。当人が言っているのですから。それに意味もなく残るわけじゃないでしょう？」

「ええ、もちろん」

代わりにジェイドが話を進めてくれたので僕は頷いた。

「ほら、行きますよ？時間は有限です」

「ああ………」

再度ジェイドが促すことで、やっとみんなが出て行った。

いつだって未来を作るのは生きている人の役割なのですよ

第三十八話 それぞれの役割（後書き）

第三十八話となりました。読んでくださった方々、ありがとうございます

しかし、やはり違和感が残ってますね。後日修正するかもしれませ
ん……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2594o/>

深淵に抗する平和の紡ぎ手

2011年2月28日07時54分発行